小城町文化財調査報告書第11集

西谷六角遺跡

（にしたにろっかく）

土砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査

1999年3月

佐賀県小城町教育委員会

小城町文化財調査報告書第11集

西谷六角遺跡

（にしたにろっかく）

土砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査

1999年3月

佐賀県小城町教育委員会

序

この報告書は、小城町教育委員会が株式会社中島工務店から委託を受けて平成９年度に行った発掘調査の記録です。

西谷六角遺跡が所在する当町岩蔵地区は秀峰天山から流れ出る清水祇園川によって深い谷を形成しています。古来よりこの地は小城を代表する天台宗の古刹雲海山岩蔵寺をはじめ、多くの寺院が開かれた霊地であります。

しかし、これに先立つ歴史は具体的な調査が行なわれておらず、いままで知られていませんでした。今回の発掘調査により、空白であったこの岩蔵地区の古墳時代の有様の一端が明らかにされたことは、郷土の歴史を知る上で貴重な成果であるといえます。

この発掘調査にあたり多大なご協力を賜りました株式会社中島工務店をはじめ、地元岩蔵馬場地区の方々に対し厚く御礼申し上げ序といたします。

1999年３月31日

小城町教育委員会

教育長　古賀　弘基

例　　言

1．本書は、株式会社中島工務店が行なった土砂採取に伴い、平成９年度に行なった小城町大字岩蔵西谷五角に所在する西谷六角遺跡の発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は佐賀県教育委員会の指導を受け、小城町教育委員会が主体となって行ない、古庄秀樹が担当した。

3．地形測量、墳丘測量、遺構実測については埋蔵文化財サポートシステム（佐賀県佐賀市）に委託したほか、古庄が行なった。

4．遺構の空中写真撮影は（有）空中写真企画（福岡県太宰府市）に委託した。

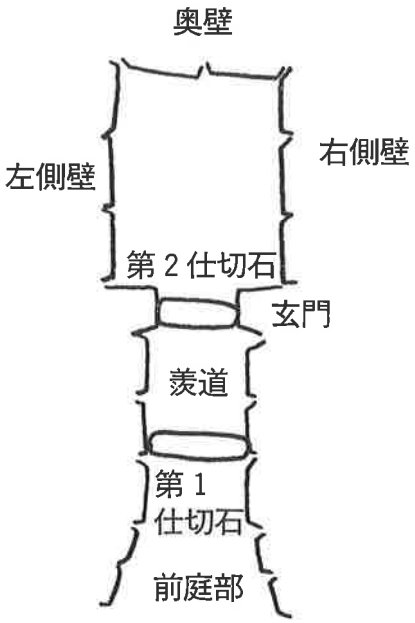
5．出土遺物の整理、実測、製図は西田悦子、手塚裕子、古庄が行なった。

6．本書の編集、執筆は古庄が行なった。

凡　　例

1．挿図中の方位はすべて座標北である。

2．石室の各部名称は以下のとおりである。



本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査組織 …… 1
　3．調査指導 …… 1
　4．調査協力 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の経過 …… 6
Ⅳ　遺構と遺物 …… 8
1　古墳時代 …… 8
　1．1号墳 …… 8
　2．2号墳 …… 14
　3．3号墳 …… 37
2　中　世 …… 54
　1．土　坑 …… 54
3　その他の出土遺物 …… 54
Ⅴ　まとめ …… 55

挿　図　目　次

図1　西谷六角遺跡と周辺遺跡（1/50,000） …… 2
図2　調査区位置図（1/2,500） …… 7
図3　1号墳地形測量図（調査前） …… 8
図4　1号墳墳丘測量図（調査後） …… 8
図5　1号墳墳丘土層図 …… 9
図6　1号墳石室 …… 10
図7　1号墳閉塞石 …… 11
図8　1号墳出土遺物 …… 12
図9　2号墳地形測量図（調査前） …… 13
図10　2号墳墳丘測量図（調査後） …… 14
図11　2号墳墳丘土層図 …… 15
図12　2号墳石室 …… 16
図13　2号墳閉塞石 …… 17
図14　2号墳遺物出土状況 …… 18

図15　2号墳出土遺物(1) …… 19
図16　2号墳出土遺物(2) …… 20
図17　2号墳出土遺物(3) …… 21
図18　2号墳出土遺物(4) …… 22
図19　2号墳出土遺物(5) …… 23
図20　2号墳出土遺物(6) …… 24
図21　2号墳出土遺物(7) …… 25
図22　2号墳出土遺物(8) …… 26
図23　2号墳出土遺物(9) …… 27
図24　2号墳出土遺物(10) …… 28
図25　2号墳出土遺物(11) …… 29
図26　2号墳出土遺物(12) …… 30
図27　2号墳出土遺物(13) …… 31
図28　2号墳出土遺物(14) …… 32
図29　3号墳地形測量図（調査前） …… 36
図30　3号墳墳丘測量図（調査後） …… 37
図31　3号墳墳丘土層図 …… 38
図32　3号墳石室 …… 39
図33　3号墳閉塞石 …… 40
図34　3号墳羨道床石（1次） …… 40
図35　3号墳遺物出土状況 …… 41
図36　3号墳出土遺物(1) …… 42
図37　3号墳出土遺物(2) …… 43
図38　3号墳出土遺物(3) …… 44
図39　3号墳出土遺物(4) …… 45
図40　3号墳出土遺物(5) …… 46
図41　3号墳出土遺物(6) …… 47
図42　3号墳出土遺物(7) …… 48
図43　3号墳出土遺物(8) …… 49
図44　3号墳出土遺物(9)、1号土坑出土遺物 …… 50
図45　1号土坑出土遺物 …… 51
図46　その他の出土遺物 …… 52

写　真　目　次

西谷六角遺跡遠景（東から）
図版1
1号墳全景（南から）

1号墳全景
1号墳　トレンチ土層
1号墳　トレンチ土層

図版2
1号墳全景（東から）
1号墳（南から）
1号墳羨道部（東から）
1号墳玄室（東から）
1号墳玄室から閉塞石の状況
1号墳玄室から羨道部をのぞむ
1号墳玄室遺物出土状況（南から）
1号墳羨道部（南東から）

図版3
2号墳全景（南から）
2号墳全景
2号墳閉塞石の状況（北から）
2号墳閉塞石除去後
1号土坑（東から）

図版4
2号墳樹木撤去後（南から）
2号墳（北西から）
2号墳（南から）
2号墳周溝（東から）
2号墳Bトレンチ土層
2号墳石積
2号墳玄室石積状況
2号墳玄室石積状況

図版5
2号墳玄室石積状況
2号墳玄室石積状況
2号墳袖石
2号墳玄室から外を見る
2号墳前室の石積
2号墳羨道部遺物出土状況
2号墳羨道部遺物出土状況
2号墳前庭部石積

図版6
3号墳全景（南から）
3号墳全景
3号墳玄室から羨道部方向

図版７
　３号墳（北から）
　３号墳（南から）
　３号墳玄室（東から）
　３号墳玄室（東から）
　３号墳羨道部遺物出土状況
　３号墳羨道部敷石（２次）（東から）
　３号墳閉塞石内遺物出土状況（西から）
　３号墳羨道部敷石（下面）（西から）
図版８
　出土遺物（土器）
図版９
　出土遺物（土器）
図版10
　出土遺物（土器、装身具）

表　目　次

表１　西谷六角遺跡と周辺遺跡 …… 2
表２　出土土器観察表 …… 56
表３　出土鉄鏃観察表 …… 58
表４　出土装身具観察表 …… 60

Ⅰ　調査に至る経過

1．調査に至る経過

今回の発掘調査は株式会社中島工務店（本社　小城郡三日月町）の土砂採取に先駆けて西谷六角遺跡の記録保存を図るために実施したものである。

平成９年３月３日付で株式会社中島工務店から小城町大字岩蔵字馬場西谷五角において45,626m²にわたり土砂採取を行なう計画の埋蔵文化財発掘の届出があった。この届出を受けて町教育委員会によって現地において平成９年３月23日から27日まで埋蔵文化財の確認調査を行なった。調査の方法は現地踏査及び重機によるトレンチ調査によるもので、その結果、丘陵上に古墳３基と丘陵南側の谷部において中世の遺跡約1,000m²（Ａ地区）を確認した。

この調査の結果をもとに、中島工務店、県文化財課、町教育委員会と協議を行なった。協議の結果、開発面積45,626m²のうち古墳３基と中世の遺跡を確認した1,000m²において発掘調査を行なうこととし、記録保存を図ることで合意した。発掘調査の費用については中島工務店が負担することとなった。発掘調査の計画については当初古墳３基及び中世の遺跡部分を全て当初９年度中に終了する予定であったが、中世の遺跡部分については調査の過程で旧地権者の意向もあり、平成12年度に行なうこととなった。

平成９年度の発掘調査については平成９年６月23日に中島工務店と小城町との間に発掘調査の業務委託契約を締結し、７月22日に発掘調査に着手、西側の１号墳から順に調査を行なった。

2．調査組織

調査主体	小城町教育委員会
事務局	教育長　古賀弘基
	公民館長　柴田　洋
	公民館係長　桑原　英
	公民館主査　梅谷幸子（庶務担当）
	公民館主事　古庄秀樹（調査担当）
発掘作業員	石井慶子　泉貴美子　伊東初次　大坪見次　久保富子　柴田幸子　林田　實 野田順子　真子善八　宮島種子
整理作業員	西田悦子　手塚裕子

3．調査指導

佐賀県教育委員会文化財課

4．調査協力

株式会社中島工務店、馬場地区

図1　西谷六角遺跡と周辺遺跡（1/50,000）

① 西谷六角遺跡
② 老松山遺跡
③ 岡本遺跡
④ 龍王遺跡
⑤ 寺浦瓦窯跡
⑥ 自在遺跡
⑦ 布施ヶ里遺跡
⑧ 八ツ戸遺跡
⑨ 八反遺跡
⑩ 晴田小学校校庭遺跡
⑪ 桜岡遺跡
⑫ 石木中高遺跡
⑬ 土生遺跡
⑭ 下久米遺跡
⑮ 本告遺跡
⑯ 生立ヶ里遺跡
⑰ 久蘇遺跡
⑱ 天神軒遺跡
⑲ 石木遺跡
⑳ 戊遺跡
㉑ 久米遺跡
㉒ 織島東分上遺跡
㉓ 寺浦遺跡
㉔ 滝C遺跡
㉕ 寄居古墳
㉖ 茶筅塚古墳
㉗ 姫御前古墳
㉘ 宮戸前方後円墳
㉙ 寺浦前方後円墳
㉚ 滝A遺跡
㉛ 城側山古墳
㉜ 吉田古墳
㉝ 一本松古墳群
㉞ コウザン山古墳
㉟ 鏡山古墳
㊱ 米ノ隈古墳
㊲ 坂井山古墳群
㊳ 深底籠古墳
㊴ 丹坂峠古墳
㊵ 山崎山古墳群
㊶ 権現山古墳
㊷ 円山古墳
㊸ 姫塚古墳
㊹ 地蔵山古墳
㊺ 織島西分古墳群
㊻ 寺浦廃寺
㊼ 千葉城跡
㊽ 晴気城跡
㊾ 北浦遺跡
㊿ 赤司遺跡
(51) 杉町遺跡
(52) 織島西分遺跡
(53) 小城藩邸跡

表1

II　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

西谷六角遺跡は佐賀県小城郡小城町大字岩蔵字西谷五角に所在している。この西谷六角遺跡の所在する小城町は佐賀県のほぼ中央部、佐賀平野の北西隅部を占める。面積は約45km² で、町の形状は山麓部に広く平野部に向かって狭くなる逆三角形状を呈している。多久市、三日月町、牛津町、富士町と隣接する。小城町の地形は北部に脊振山系が連なり、山系の西端には古代から人々の信仰を集めている標高1,046m の霊峰天山が聳える。この天山南麓には愛宕山（標高396m）と笠頭山（標高334m）を中心とする二つの山系が延びている。主な水系としてはこの天山に源を発する東の祇園川と西の晴気川水系がありそれぞれ岩蔵谷、晴気谷と呼ばれる深い谷を形成し、嘉瀬川、多久川に合流し有明海へと注ぐ。町の南部にはこの二つの水系によって形成された低平な沖積平野が広がっている。西谷六角遺跡は祇園川の上流部、愛宕山から派生する山系の東斜面上標高約90～110m の地点に位置する。遺跡の北側はすでに土取により大きく削られており、旧地形はうかがいしれない。

2．歴史的環境

有明毎を望む山麓部から平野部にかけたこの肥沃な土地には旧石器時代から数多くの遺跡が残されており、この地域に太古から人々の活発な営みがあったことの証である。以下時代ごとに著名な遺跡を中心に紹介し西谷六角遺跡を取り巻く歴史的環境を述べてみたい。

旧石器時代では三日月町にサヌカイト製の石器が多数出土した老松山遺跡①、岡本遺跡が著名である。

縄文時代では三日月町の山麓部に龍王遺跡が知られる。

弥生時代では遺跡の数も増加し、丘陵部から平野部にかけて多くの遺跡が分布する。小城町では山麓部に土器棺墓を検出した早期の寺浦瓦窯跡、祇園川の形成する扇状地上に所在する自在遺跡②は中期から後期にかけての墓地で３連式、及び４連式の甕棺墓が確認され、擬朝鮮系無文土器の長頸壷が出土している。また、西側に位置する布施ヶ里遺跡③は中期初頭から後期にかけての集落及び墓地で竪穴住居跡、環濠の一部が確認されたほか土坑墓内から青銅製装身具「銅釦３点」が出土している。天山山系から派生する低丘陵上に位置する八ツ戸遺跡④、八反遺跡⑤は後期から終末期に至る集落跡で特に八ツ戸遺跡では竪穴住居内から小型仿製鏡が出土している。晴気川沿いに位置する微高地状には後期の甕棺墓群で晴田小学校校庭遺跡、晴田小学校裏遺跡⑥等が知られる。桜岡遺跡⑦は町の中心部に位置し桜岡と呼ばれる小丘に甕棺墓、土坑墓が確認された他、銅剣の峰部分、及び擬朝鮮系無文土器片が採集されている。平野部では特に三日月町で刻目突帯文土器が出土した早期の石木中高遺跡や、遺跡の規模の大きさや豊富な出土遺物から拠点的な集落であったことがうかがわれる中期から後期にかけての土生遺跡が知られる。墓地として三日月町に下久米遺跡、本告遺跡がある。牛津町では木製品が大量に出土した生立ヶ里遺跡が知られる。

古墳時代では集落跡として小城町では平野部に前期の久蘇遺跡⑧、丘陵上に中期の八ツ戸遺跡、天神軒遺跡⑨が知られる。三日月町では石木遺跡が知られる。墳墓としては４世紀前半期に位置付けられる方形周溝墓群が平野部から山麓部に営まれる。三日月町では戊遺跡、久米遺跡、下久米遺跡、織島東分上遺跡、小城町では寺浦遺跡⑩、滝Ｃ遺跡⑪である。古墳では小城町に４世紀初頭で方格規矩四神鏡が

出土した寄居古墳[12]、4世紀後半では嘉瀬川以西では最も古い前方後円墳とされる茶筅塚古墳[13]（県史跡）、6世紀代では円墳で長大な横穴式石室を持つ姫御前古墳、また宮戸前方後円墳、6世紀後半の寺浦前方後円墳[14]が知られており、これらの古墳はこの地域での首長墓の系列とされている[15]。

他に祇園川水系の清水川沿いに滝A遺跡[16]、吉田山には城側山古墳、吉田古墳がある。その他多くの古墳があったとされるが蜜柑園の開墾によって破壊されている。また笠頭山から派生する山系上にも多くの群集墳が知られる。一本松古墳群[17]（町史跡）は5世紀後半から7世紀後半にかけて営まれ、金銅製馬具など多くの副葬品が出土している。現在は10数基が残るのみであるが以前は70基があったとされる。晴気川の東側丘陵では竪穴式石室や箱式石棺が確認されたコウザン山古墳群がある。鏡山古墳群からも金銅製杏葉が出土している。米ノ隈古墳群、坂井山古墳群、深底篭古墳群は線刻文様を持つ点で特色がありこの線刻文を有する古墳群の分布は多久市、杵島郡にかけて分布しており独特の古墳文化が営まれていたとされる。しかし、現在は米ノ隈古墳群を除きそのほとんどが蜜柑園の開墾で破壊されてしまっている。他に丹坂峠古墳、山崎山古墳群が知られる。

三日月町では山麓部には5世紀前半代の権現山古墳、5世紀後半の円山古墳、6世紀前半代の姫塚古墳、6世紀中頃の地蔵山古墳などの前方後円墳や円墳が知られるほか群集墳では織島西分古墳群がある。

奈良時代では小城町では寺浦廃寺[18]（県史跡）が特筆される。小城町教育委員会が行った5ヶ年に及ぶ発掘調査により伽藍配置が明らかにされた。金堂を中心とした一堂伽藍から塔を備えた伽藍への2期にわたる伽藍の変遷がうかがえる。近くには瓦窯跡も確認されている。小城郡司によって造営されたものとされる。また、布施ヶ里遺跡の土坑内から巡方が出土している。圃場整備前までは平野部の地割に条里制の名残を止めていた。現在でも条、坪、里の地名が残されているが、その施行時期については不明である[19]。小城郡衙の位置については不明である。

平安時代になると西谷六角遺跡の位置する丘陵南の谷部には天山神を祭る岩蔵天山神社やその神宮寺として延暦22年（803）に天台宗の大寺院雲海山岩蔵寺が創建される。「岩蔵寺由緒」によればこの地は古来高隈の里と呼ばれていたが岩蔵寺の創建により岩蔵に改称されたという。「小城郡誌」には伝説として建久の頃、岩蔵寺山中の岩室に経文を入れた銅函を収めたとされ江戸期に村人により掘り出されたとある。岩室とは古墳の石室を示すものであろうか。また、牛尾別当坊、清水山見瀧寺も延暦22年に相次いで創建される。近年確認された平安期の仏像群は天山山系における天台系仏教の隆盛を示すものであろう。11世紀代に晴気荘、赤目荘、大楊荘が相次いで立券され宗像神社、宇佐神宮領として寄進される。

鎌倉～室町時代では関東御家人千葉氏が晴気荘の地頭職を得たことで晴気荘を拠点に次第に小城郡一円に勢力を拡大していく。「日蓮宗紙背文書」の研究から千葉氏と小城郡の在地勢力（小地頭）及び大領主宇佐神宮との関係が読み取れ興味深い[20]。当時の小城を知る文献資料としては他に15世紀に朝鮮で編纂された「海東諸国紀」、或いは近世編纂物として「元茂公御年譜」、「北肥戦志」などがある。これらの書物によれば祇園川沿いに町が形成され、国府と称されていた。しかし、この町については最近の宅地開発による緊急調査においても確認できていない。この期を代表する遺跡としては城跡として晴気城跡、千葉城跡、居館跡として北浦遺跡[21]がある。集落跡では布施ヶ里遺跡[22]、八ツ戸遺跡がある。三日月町では居館跡の戊遺跡、集落跡の赤司遺跡、杉町遺跡、織島西分遺跡が知られる。

15世紀後半期には肥前国内において小城を拠点に最大の勢力を誇った千葉氏も有力守護大名大内氏、大友氏、少弐氏との抗争や一族の分裂によりその勢力を失う。この小城の地は代わって勃興してきた竜造寺氏、鍋島氏の支配下となった。鍋島氏の支配の下、戦国の戦乱で荒廃した小城の地は復興が行

なわれた。寛永年間（1624～1644）には祇園社の門前町形式として上、中、下町が成立する。その後桜岡に小城鍋島家の陣屋が置かれ、周囲に小路と呼ばれる武家屋敷群が配置される。その東方には正徳年間（1711～1716）までに庶民の町が形成され、現在の小城町の景観の原形となっている。

註

①佐賀県教育委員会『老松山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第92集　1989
②昭和59年度調査　小城町教育委員会『小城町の文化財』1992
③昭和59年度調査　小城町教育委員会『小城町の文化財』1992
　小城郷土史研究会「布施ヶ里遺跡出土の銅釦」『小城の歴史31号』1995
④昭和58年度、平成２年度調査
⑤小城町教育委員会『八反遺跡』小城町文化財調査報告書第６集　1988
⑥木下巧『晴田小学校裏遺跡』佐賀県立博物館・美術館調査研究書第18集　平成５年
⑦平成２年度小城公園整備に係る確認調査
⑧佐賀県教育委員会『土生・久蘇遺跡』佐賀県文化財調査報告書第25集　1973
⑨小城町教育委員会『天神軒遺跡』小城町文化財調査報告書第１集
⑩佐賀県教育委員会『老松山』佐賀県文化財調査報告書第92集　1989
⑪佐賀県教育委員会『老松山』佐賀県文化財調査報告書第92集　1989
⑫佐賀県教育委員会『老松山』佐賀県文化財調査報告書第92集　1989
⑬平成２年度小城公園整備に係る確認調査
　小城郷土史研究会「茶筅塚古墳の調査」『小城の歴史30号』平成６年
⑭佐賀県教育委員会『老松山』佐賀県文化財調査報告書第92集　1989
⑮蒲原宏行「佐賀平野の首長墓系譜とその画期」『交流の考古学』肥後考古第８号　肥後考古学会　1991
⑯佐賀県教育委員会『老松山』佐賀県文化財調査報告書第92集　1989
⑰小城町史編纂委員会『一本松古墳群』小城町史料第１号　1970
⑱七田忠志「肥前晴気廃寺址と九州地方に於ける古瓦の一様式に就いて」『考古学８巻４号』1973
　松尾禎作『寺浦廃寺址の調査』佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第６輯　1938
　小田富士雄「歴史時代編」『九州考古学研究』1977
　佐賀県教育委員会『寺浦廃寺跡』佐賀県文化財調査報告書第34集　1976
　小城町教育委員会『寺浦廃寺調査概報Ⅰ』小城町文化財調査報告書第５集　1988
　小城町教育委員会『寺浦廃寺』小城町文化財調査報告書第８集　1991
　小田富士雄「肥前の奈良時代の寺院跡」『風土記の考古学５』1995
⑲佐賀県教育委員会『肥前国小城郡の条里』佐賀県文化財調査報告書第75集　1984
⑳湯浅治久「肥前千葉氏に関する基礎的考察」『千葉県史研究第５号』平成９年３月
㉑小城町教育委員会『北浦遺跡』小城町文化財調査報告書第２集　1982
㉒小城町教育委員会『布施ヶ里遺跡』小城町文化財調査報告書第10集　1994

参考文献

小城町史編纂委員会『小城町史』昭和49年

III　調査の経過

調査は梅雨明けの７月22日から開始し、例年にない真夏の酷暑と幾度かの大型台風を経て、冷たい天山おろしが吹き始める12月26日まで５ヶ月間に渡り行なった。真夏の間は頻繁に休憩時間を設け水分の補給を行なうなど健康対策には配慮した。大きなケガ、病気等がなかったことは幸いであった。ただし、作業員の高齢化と人員の確保についてはこれからますます困難な状況にあると予測される。以下調査のあらましを述べる。

調査は条件整備として発掘調査の委託契約締結後、７月１日現地において中島工務店担当者と打ち合わせを行ない、調査に先立ち立木の伐採、撤去と１号墳上に祭られていた祠の移転を依頼した。７月18日には現地にプレハブ、簡易トイレを設置し、発掘器材の搬入を行なった。

発掘調査は７月22日から開始した。調査に先立ち安全祈願祭を岩蔵寺中村勝俊住職にお願いし中島工務店、発掘作業員、町教育委員会関係者の出席のもと行なった。調査は表土剝ぎ前の現況写真撮影のため各古墳の除草作業から行なった。除草作業終了後、７月29日には（有）空中写真企画に委託し、空中写真撮影を行なった。翌30日から１号墳の掘り下げを始めた。人力により表土を除去、墳丘上に３本のトレンチを設定し主体部を確認するとともに盛土の状況を調べた。地形測量、墳丘測量、石室測量については（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託し並行して行なった。８月29日には２号墳の掘り下げを開始した。２号墳は東半分の墳丘が既に取り去られており、石室の石材が露出している状況であった。発掘は玄室北側が石材が抜かれ内部に作業できる広さが確保できる状況であったので、玄室内の土についてはここから搬出した。また、羨道入り口部分には大きなハゼの木の根があったが、撤去し羨道部からも土の搬出を行なった。土については篩いにかけ、遺物の検出を行なった。石室は予測どおりほぼ完全な状況であった。墳丘の盛土状況の確認のためにトレンチを３本設定した。10月９日から３号墳の掘り下げを開始した。途中、10月22日小城中学校２年生が社会科の見学に訪れた。３本のトレンチを設け主体部と盛土の状況の調査を行なった。発掘調査がほぼ終了した11月15日には現場説明会を行なったが、激しい雨の中25名の参加者があった。11月25日には完掘後の空中写真撮影を行なった。12月26日には石室の測量作業も終え、現場作業は全て終了した。

報告書作成業務については平成10年度に小城町中央公民館で行なった。

最後になったが、酷暑の中ご苦労いただいた作業員の方々をはじめ、石材の撤去など数々の便宜を図って頂いた（株）中島工務店に対し、記して感謝の意を表したい。

図２　調査区位置図（1/2,500）

Ⅳ　遺構と遺物

1　古墳時代

1．1号墳

（1）位置と現状（図3）

愛宕山から南へ延びる丘陵の東側斜面には標高差の大きい深い谷が発達している。今回調査した3基の古墳の位置する地点は、丘陵の傾斜が標高約130m付近で緩やかになり祇園川に向けてなだらかに落ちる地形である。1号墳は今回調査した3基の古墳の中では最高所に位置している。標高は約113mである。これらの古墳の位置する丘陵は第二次大戦後の昭和30年代に蜜柑園として開墾されたが、その後昭和50年代には蜜柑の低迷により荒廃し、現在は雑木林となっていた。

1号墳は、墳丘上部を削平されており平坦地となっている。調査前には祠が祭られており楠などの樹木が繁茂していた。地元では塚と呼ばれていた。明治期には

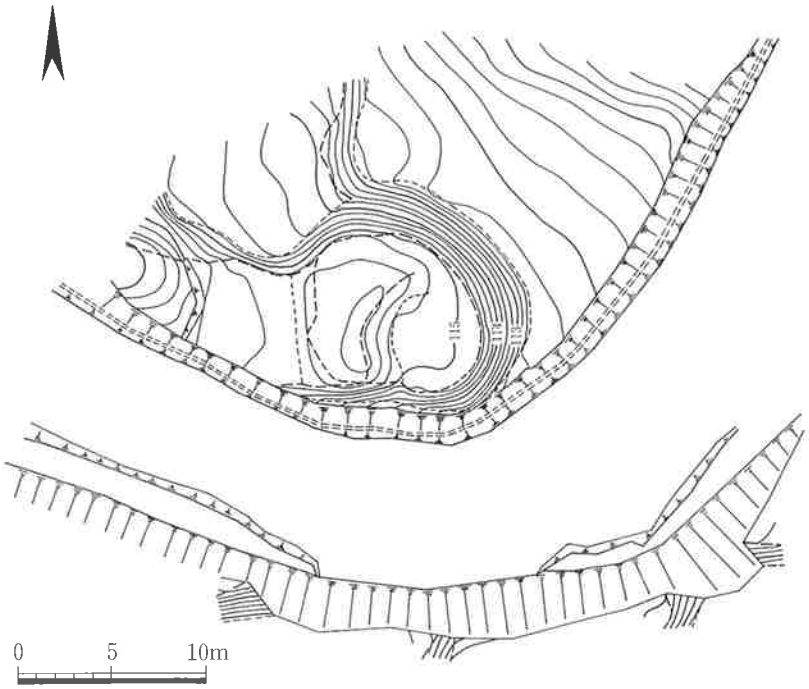


図3　1号墳地形測量図（調査前）

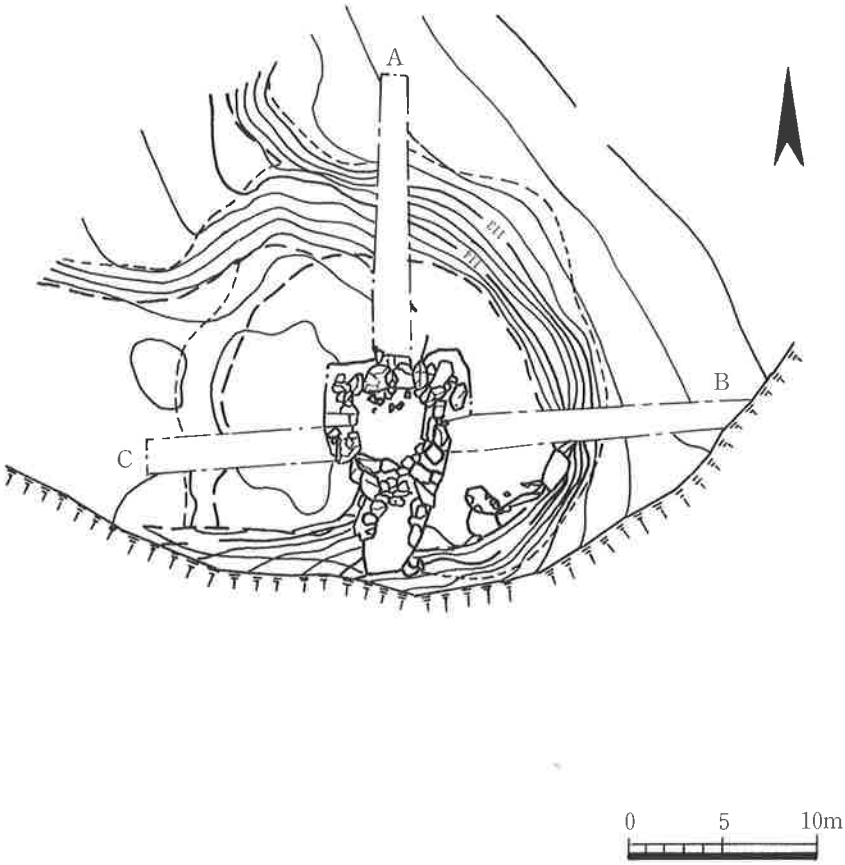
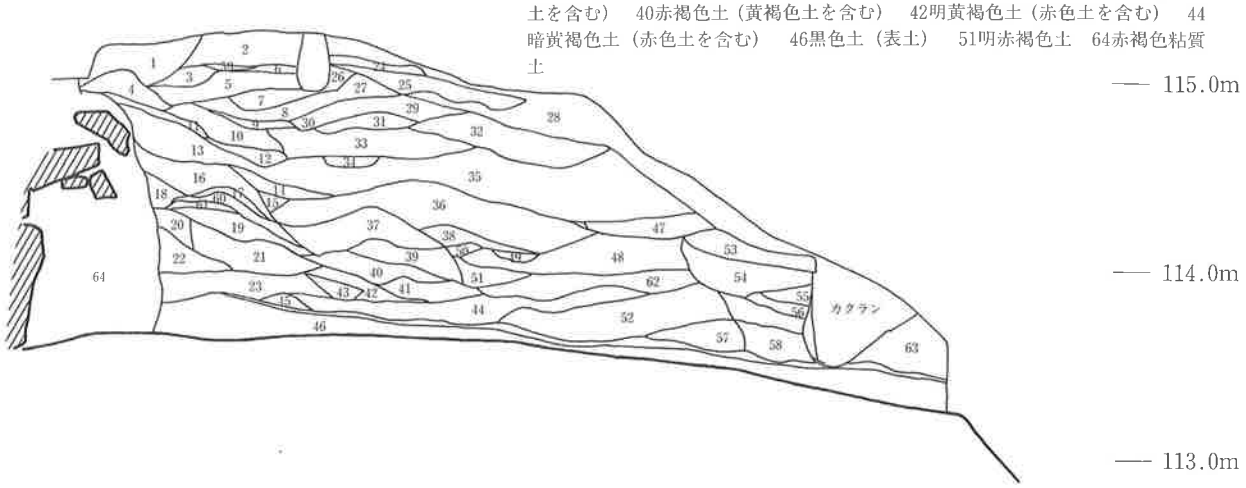
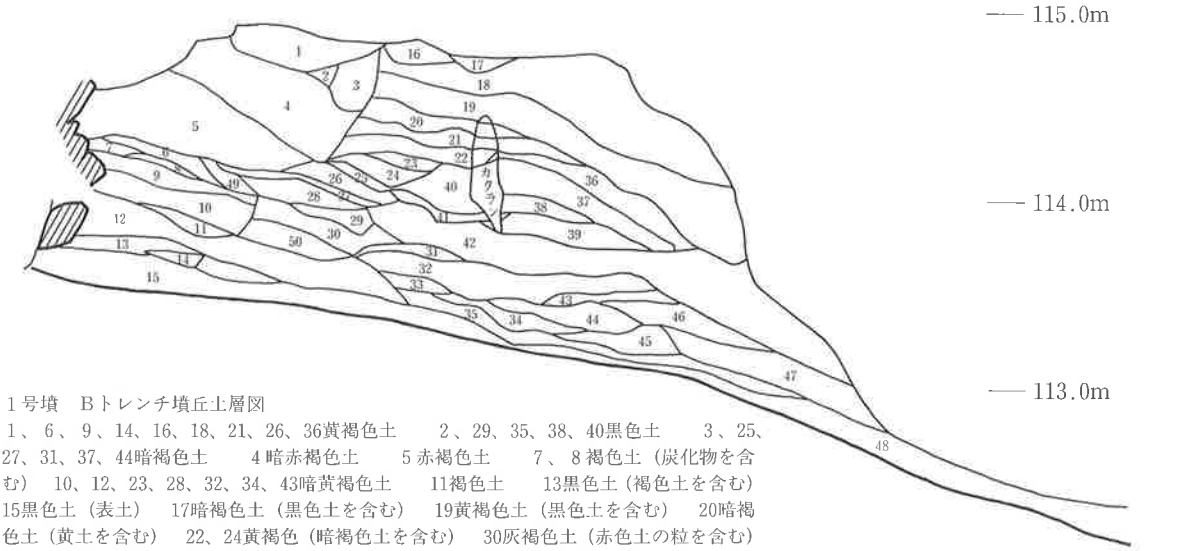


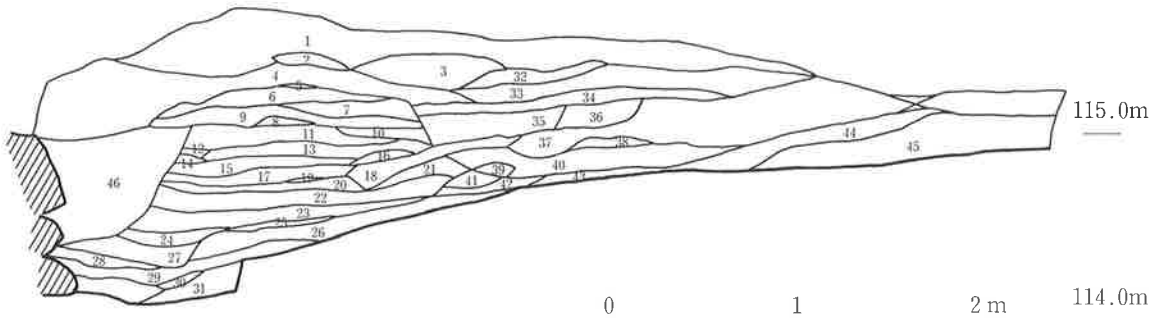
図4　1号墳墳丘測量図（調査後）

１号墳　Ａトレンチ墳丘土層図
１、５、57、59灰褐色土　２、４、13、16、20、21、22、23、26、37、52、56、61赤褐色土　３、19、24、27、28、29、30、32、39、41、47、55、60暗褐色土　６、８明灰褐色土　７暗灰褐色土（黒色土を含む）　９、11、38、43、50黒色土　10、12、18明黄褐色土　14灰褐色土（黒色土を含む）　15赤褐色土（赤色土の粒を含む）　17、33、53暗黄褐色土　25、48、49、54、58、62、63暗赤褐色土　31黄褐色土（黒色土を含む）　34、35、45黄褐色土　36赤黄褐色土（黒色土を含む）　40赤褐色土（黄褐色土を含む）　42明黄褐色土（赤色土を含む）　44暗黄褐色土（赤色土を含む）　46黒色土（表土）　51明赤褐色土　64赤褐色粘質土





１号墳　Ｂトレンチ墳丘土層図
１、６、９、14、16、18、21、26、36黄褐色土　２、29、35、38、40黒色土　３、25、27、31、37、44暗褐色土　４暗赤褐色土　５赤褐色土　７、８褐色土（炭化物を含む）　10、12、23、28、32、34、43暗黄褐色土　11褐色土　13黒色土（褐色土を含む）　15黒色土（表土）　17暗褐色土（黒色土を含む）　19黄褐色土（黒色土を含む）　20暗褐色土（黄土を含む）　22、24黄褐色（暗褐色土を含む）　30灰褐色土（赤色土の粒を含む）　33、45、46灰褐色土　39、41暗褐色土（炭化物を含む）　42、47、49明黄褐色土　48黒色土（表土）　50淡黄褐色土



１号墳　Ｃトレンチ墳丘土層図
１、７、９、17、28、32、34、36、38、39、42暗褐色　２、８、10、13、25、30、41黒色土　３、14、15、20暗赤褐色土　４、５、６、21、24赤褐色土　11、12、16明黄褐色土　18暗褐色土（炭化物を含む）　19灰褐色土　22暗褐色土（黒色土を含む）　23明赤褐色土　26、27灰赤褐色土（黒色土、赤色土を含む）　29灰赤褐色土　31、45赤褐色砂質土（地山）　33明黄褐色土　35、37暗赤褐色土　40暗褐色土（炭化物を含む）　43、44暗褐色土（旧表土）　46赤褐色粘質土

図５　１号墳墳丘土層図

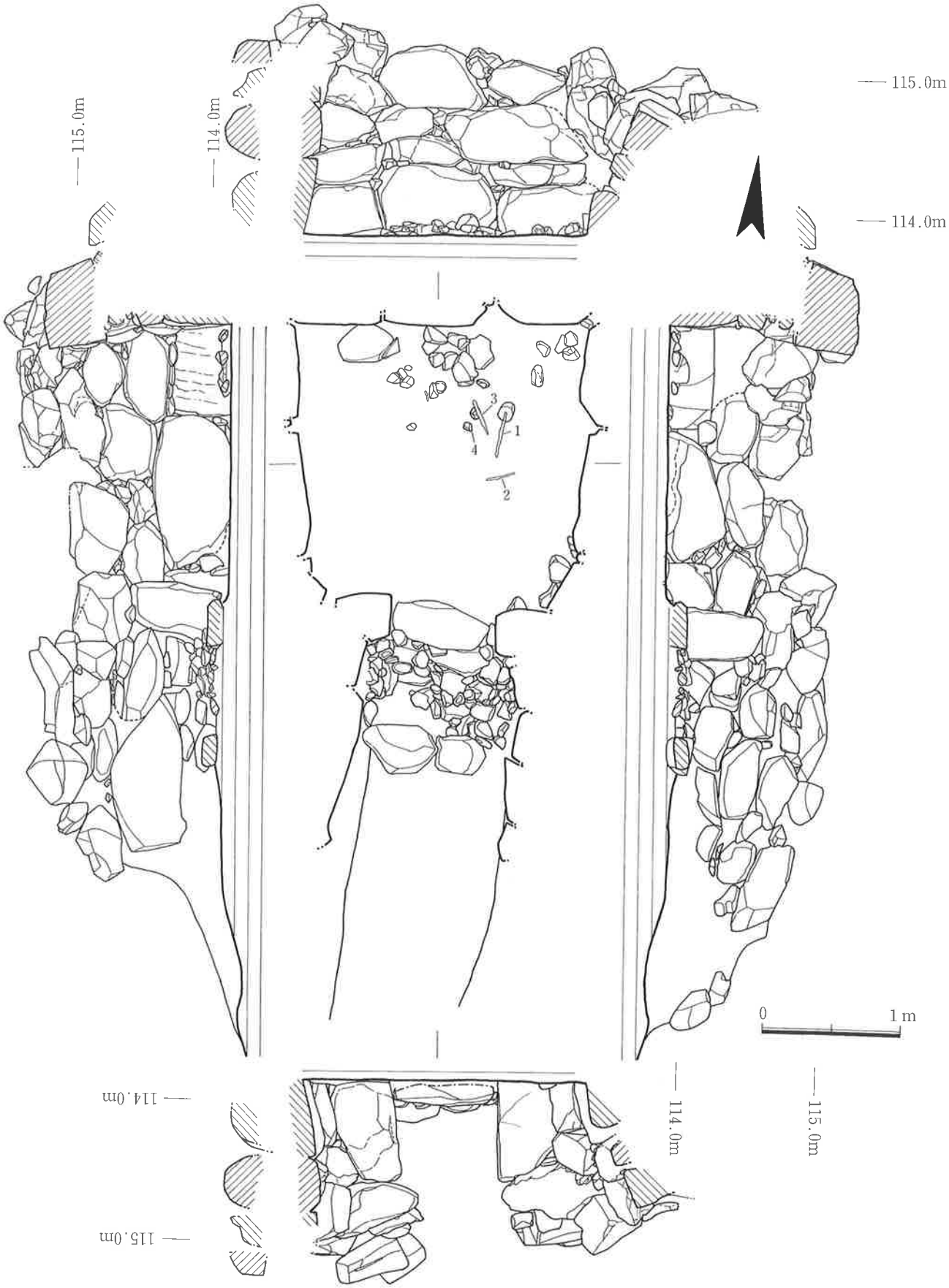


図6　1号墳石室

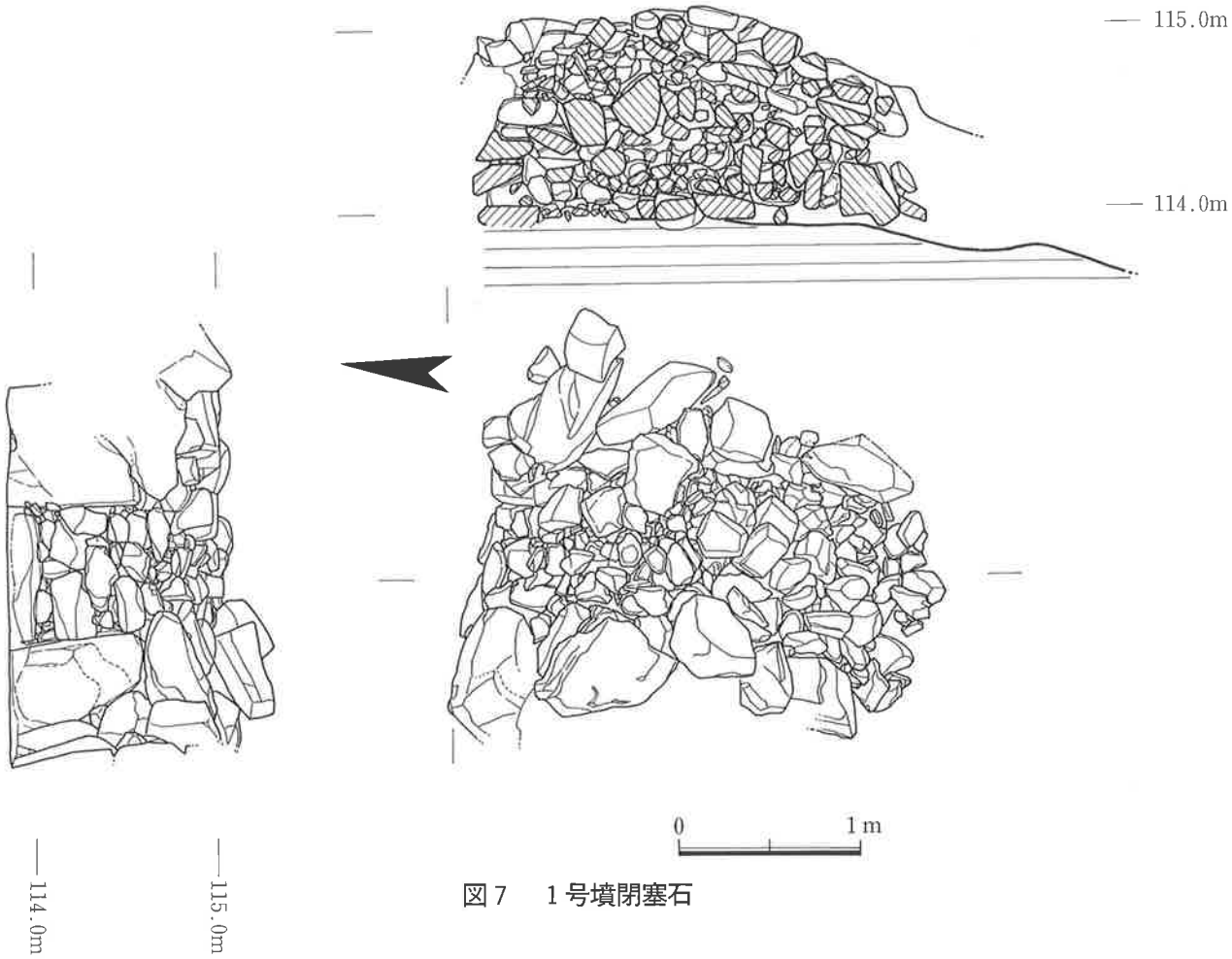


図7　1号墳閉塞石

盗掘が行なわれ、鉄刀が出てきたといわれている。1号墳の東から南側にかけては農道により大きく削られている。北側も蜜柑園として大きく整地されている。さらに、北側は約25m離れたところでは昭和40年代以降に真砂土採取のために土取りされており旧地形は不明である。南側は大きく谷部を形成している。

（2）墳　丘（図4）

墳丘は上部と周囲を削平されているが、遺存状況はよい。石室は斜面に直交して設けられ、墳丘は旧表土（黒色土）上に直接盛られている。墳丘は標高115.2mから113.2mへ東に向かって下る斜面に直接盛られているために西に薄く、東に厚く盛られている。盛土は旧表土の上に暗褐色土系の土と赤褐色土系の土を交互に積み上げている。Aトレンチでは石室の裏込めとして赤褐色の粘質土を用い、その後盛土を行なっている。墳丘端は削平を受ける。Bトレンチでは最初石積みの中程まで細かく盛土を行なった後、さらに外側に盛土を行なう。最後には石室上部の裏込めとして赤褐色粘質土を充填する。7、8、39、41層には炭化物が混じる。Cトレンチでも同様に最初に土堤状に盛土を行なった後、外側に盛土を行ない、赤褐色粘質土を裏込める。18、40層には炭化物が混じる。この赤褐色粘質土は固く締まっている。墳丘の直径約10m、墳丘の残存高は奥壁側で1.28m、左側壁側で1.18m、右側壁側で1.2m程残る。周溝は確認できなかった。

（3）埋葬施設

内部主体は平面形が単室両袖型横穴式石室である。主軸の方位はN—5°—Wである。南側の谷部に向かって開口する。石室の天井石は既に失われていた。

玄　室

玄室は奥壁幅2.14m、前壁幅は1.6m。奥壁から第２仕切石までは中央長1.96m。奥壁側に向かって開く。左側壁長は1.94m、右側壁長は2.04mでありわずかに右側壁が長く、やや膨らむ。奥壁は腰石に３石用い、横位置に配置している。腰石の高さは不揃いで大小の石を交互に横位置に積み、高さを揃える。左側壁側には腰石を３石用いる。３段分の石積みが残る。側壁に用いられている腰石の袖石側はいずれも小振りの石を用い、内側に向け石室を玄門に向けてやや閉じる形とする。壁の立ち上がりは奥壁と左側壁が持ち送るが、左側壁側は石積みが東側に傾斜する。構築時から傾いていた可能性がある。石積みの隙間には小振りの石を充塡する。敷石は攪乱により原位置を止めてはいないと思われる。敷石のものと思われる８～22cm大の石が奥壁側に散乱していた。袖石は小振りの石を用い、垂直に立てる。左袖石が下部幅0.38m、上部幅0.21m、高さ0.71m、左袖石が下部幅0.41m、上部幅0.2m、高さ0.72m、両袖石間は0.76m床には仕切石を斜めに組み込む。

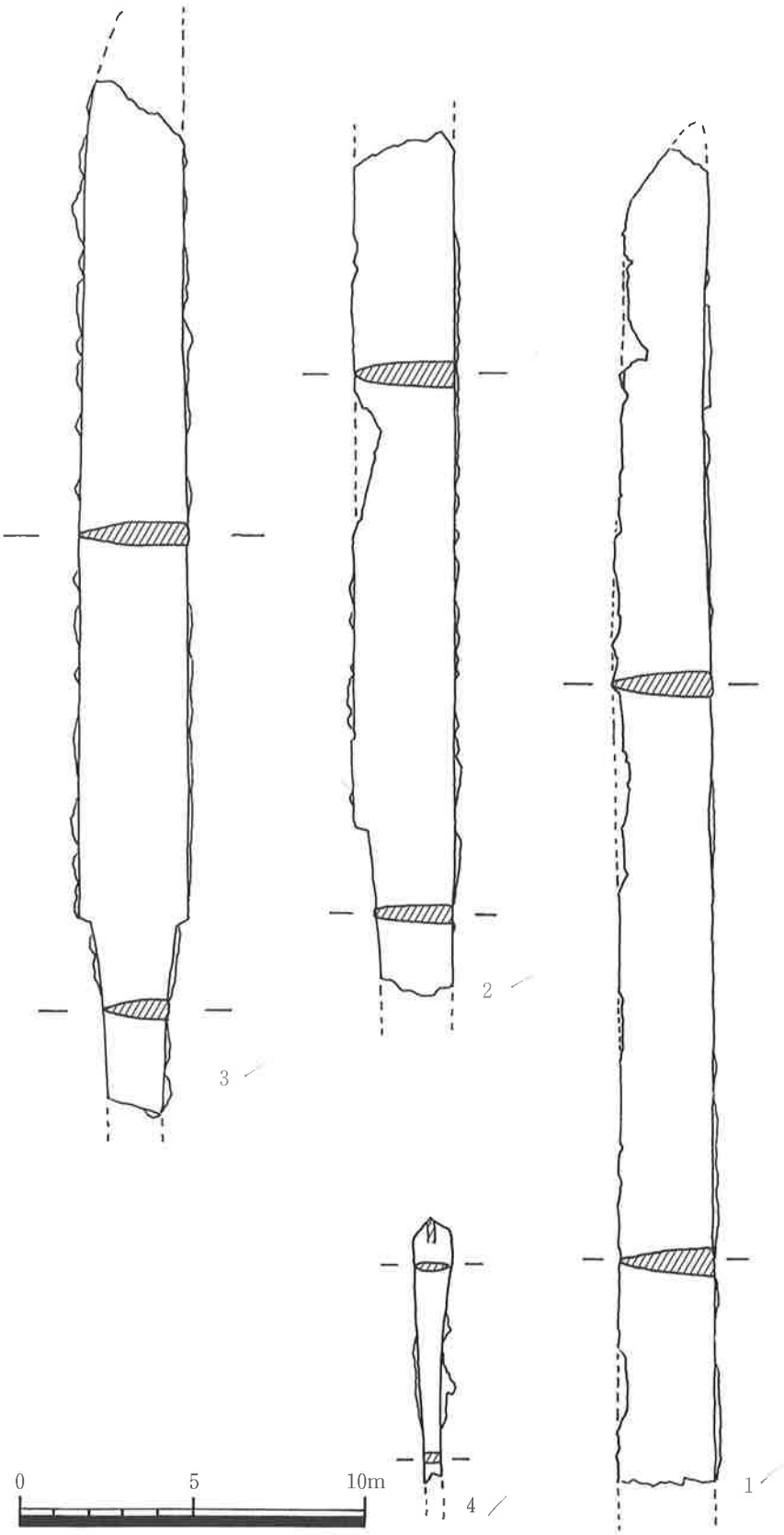


図８　１号墳出土遺物

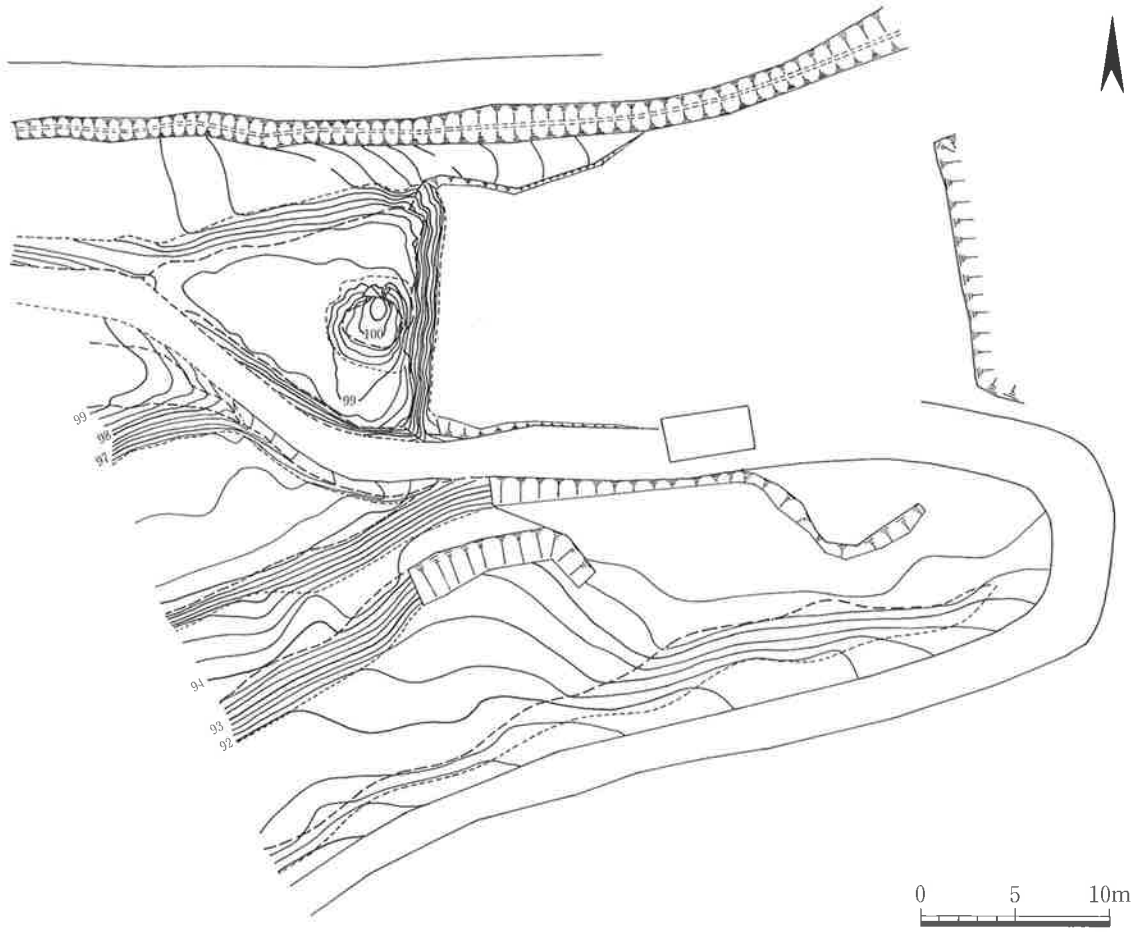


図９　２号墳地形測量図（調査前）

羨　道

羨道は玄門部から羨門部までの中央長0.62m。幅は玄門側で0.94m、羨門側で1.12m。右側壁側が膨らむ。羨道両側壁には４段分の石積みが残っており、大小の石を横位置に積む。隙間に小振りの石を充塡するが石の面は不揃いである。石積みは雑然としている。敷石は16～40cm 大の大きめの石を敷き、石の間に10cm 前後の石を積める。第１仕切石は長さ0.58m、幅0.38m 大の２石を用いる。

前庭部

前庭部は長さ0.9m。墓道に向けてやや広がる。第１仕切石から前庭部にかけては傾斜し次第に低くなる。さらに墓道では傾斜しもう一段低くなる。両側壁の石積みは最下部を省略している。

墓　道

墓道は長さ約1.0m、幅1.12m 程残るが農道により大く削られ南側は不明である。谷部に向かって延びていくものと思われる。

閉塞施設

閉塞石は玄門部から前庭部にかけて認められた。８～40cm 大の石を用いている。玄門部と開口部に大きめの石を、内部に小さな石を用いている。特に玄門部側は横長の石が玄室側に面を揃えて積まれている。その他では雑然としている。閉塞石間には土砂が堆積していた。

石室掘方

石室掘方は斜面に直交するように掘られている。玄室部の掘方は右側壁側を深く掘り、腰石を据え

る。羨道、前庭部側は浅い。

（4）遺　物

出土状況

玄室は盗掘により荒らされており、わずかに奥壁側から鉄刀片３点と鉄鏃１点が出土したのみである。また、墳丘から須恵器片及び染付磁器片数点が出土したのみである。

鉄　器

武　器（図８）

鉄　刀（１～３）

１は切先から刀身部にかけての破片。残存長38.0cm、幅2.8cm、２は刀身部から茎部にかけての破片。残存長24.6cm、幅2.8cmである。いずれも平造りで同一のものの可能性もある。３は切先と茎部の一部を欠く。残存長29.5cm、幅3.2cmである。

鉄　鏃（４）

長頸鏃で両丸造。残存長7.8cmである。

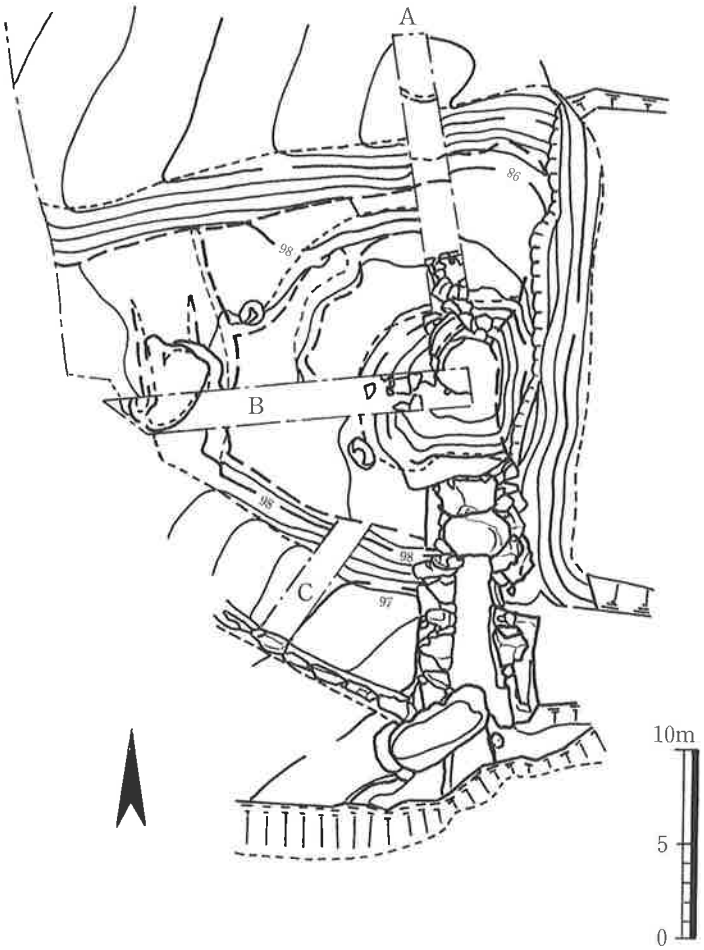


図10　２号墳墳丘測量図（調査後）

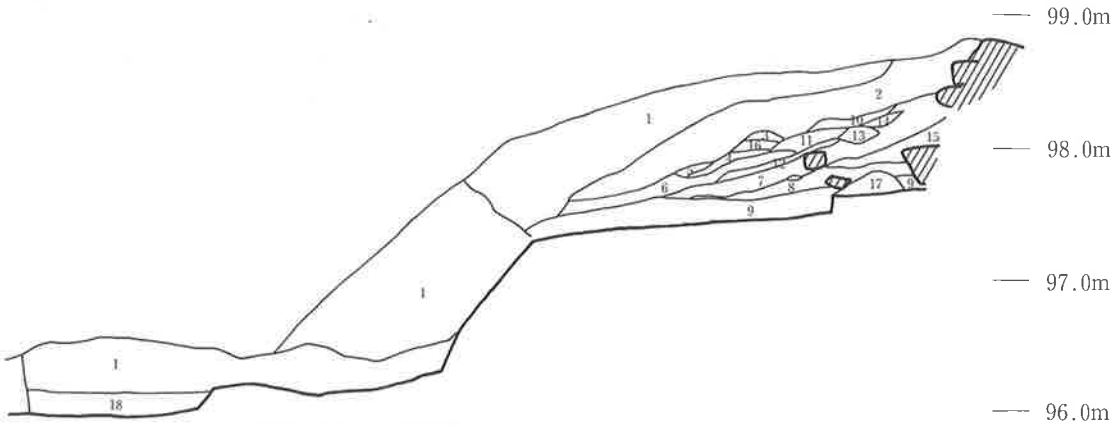
２．２号墳

（１）位置と現状（図９）

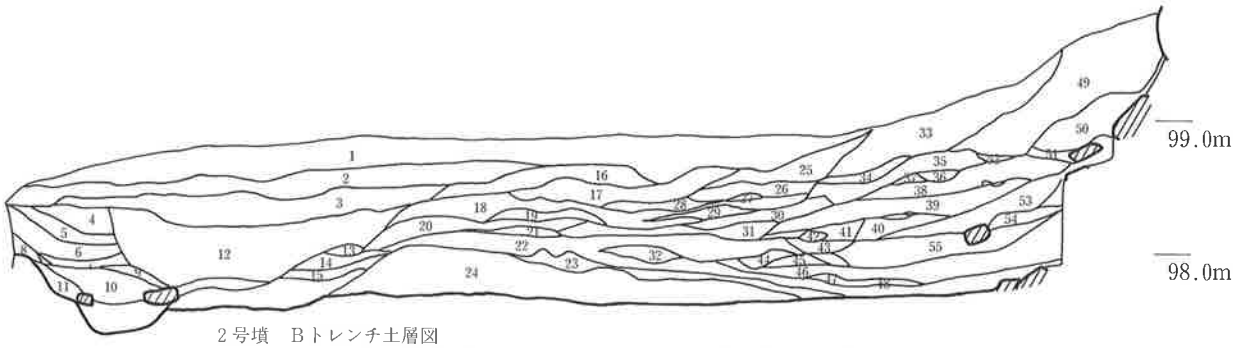
２号墳は１号墳と３号墳のほぼ中間地点に位置する。１号墳からは約100m程東へ下った地点である。標高約96m。丘陵の南側縁辺部に位置し、南側は谷部となる。谷部斜面は蜜柑園としてテラス状に開墾されている。２号墳は調査前は雑種地となっており竹及び雑木が繁茂していた。玄室が一部露出し、奥壁側上部の石が抜かれ、玄室内に出入りできる状況であった。地元の方の話によればこの古墳も明治期に盗掘され、最近まで子ども達の遊び場であったという。墳丘東側半分は大きく削られ平坦地となっている。この広場は農作業用の駐車場として使用されていた。しかし、石室の石材が露出し危険な状況であった。墳丘北側も蜜柑園として削られていた。また、墳丘南側には農道が設けられていた。以上のように墳丘は大きく改変を受けていた。

（２）墳　丘（図10）

墳丘については上述したように大きく改変を受け詳細については不明である。Ａトレンチでは17層の盛土を確認することができた。盛土は黄褐色砂質土（地山）の上に盛られており、旧表土は確認できなかった。最初に７、８、９層を盛る。これらの層は石英粒や赤色粘土を含む黄灰色砂質土層で非常に固く締まっている。30cm前後の礫を含む。石室の裏込めとして用いられたものである。その上に黒色土、黒褐色土及び黄褐色土を交互に盛る。盛土は石室側で1.3m程度残る。北側は地山部分まで大きく削られている。Ｂトレンチでは尾根筋に沿って設けたトレンチである。旧表土上に直接盛土を行



２号墳　Ａトレンチ土層図
１灰褐色土（表土）　２黄褐色土（黒色土を含む）　３、５、12黒色土　４、６、16暗黄褐色土　７、８、９黄灰色砂質土（石英粒、黄色粘土を含む。非常に固い）　10黒褐色土（黄色土を含む）　11、14、15黄褐色土　13、17黒褐色土　18赤褐色土



２号墳　Ｂトレンチ土層図
１灰褐色土（表土）　２暗褐色土　３、５、７、９、15、17、27、28、30、32、36、42、51、52黒色土　４、６、８、12、14、16、18、19、38、47、49黄褐色土　10、13、20、37、44、46黄褐色土（黒色土を含む）　11、21、25、26、31、35、41黒色土（黄褐色土を含む）　22黄褐色土（石英粒、黄色の粘土を含む。非常に固い）　23黒色土（旧表土）　24横色土（池山）　29黒色土（炭化物を含む）　33、34、50灰褐色土　39暗灰褐色土　40黄褐色土（灰色土を含む）　43黄褐色土（白色砂質土、黄色粘土を含む）　45黄褐色土（黄色土、黒色土を少し含む）　48黄褐色土（黒色土、白色砂質土を含む）　53、55横白色砂質土（固い）　54黄白色砂質土（黒色土を含む）

２号墳　Ｃトレンチ土層図
１、２暗褐色土　３淡黄褐色土　４、５暗褐色土(黄灰色砂質土を含む)　６黄灰色土　７淡黄褐色土（黒色土を含む）　８黄灰色砂質土（石英粒を多く含む）　９淡黄褐色土　10黒色土（旧表土）　11黄褐色土（池山）　12道路舗装　13、14黒色土（赤褐色土を含む）　15黒色土　16黒色土（黄褐色土を含む）　17黄褐色土（石英粒を含む）　18黒色土（赤褐色土を含む）　19黄褐色土　20、21黒色土（赤褐色土を含む）　22、23黄褐色土　24、25、26、27黒色土（赤褐色土）　28黄褐色土　29黒色土（赤褐色土）　30黄褐色土　31黒色土（赤褐色土を含む）　32白色砂質土　33、34黒色土（赤褐色土を含む）　35黄褐色土（池山）　36黒色土　37黄褐色土　38黒色土（赤褐色土を含む）　39灰黒色土

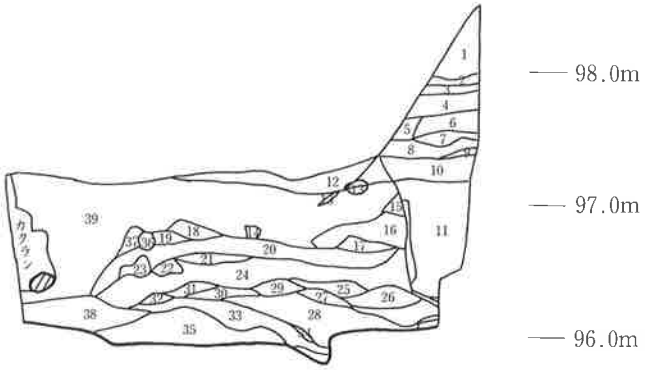


図11　２号墳墳丘土層図

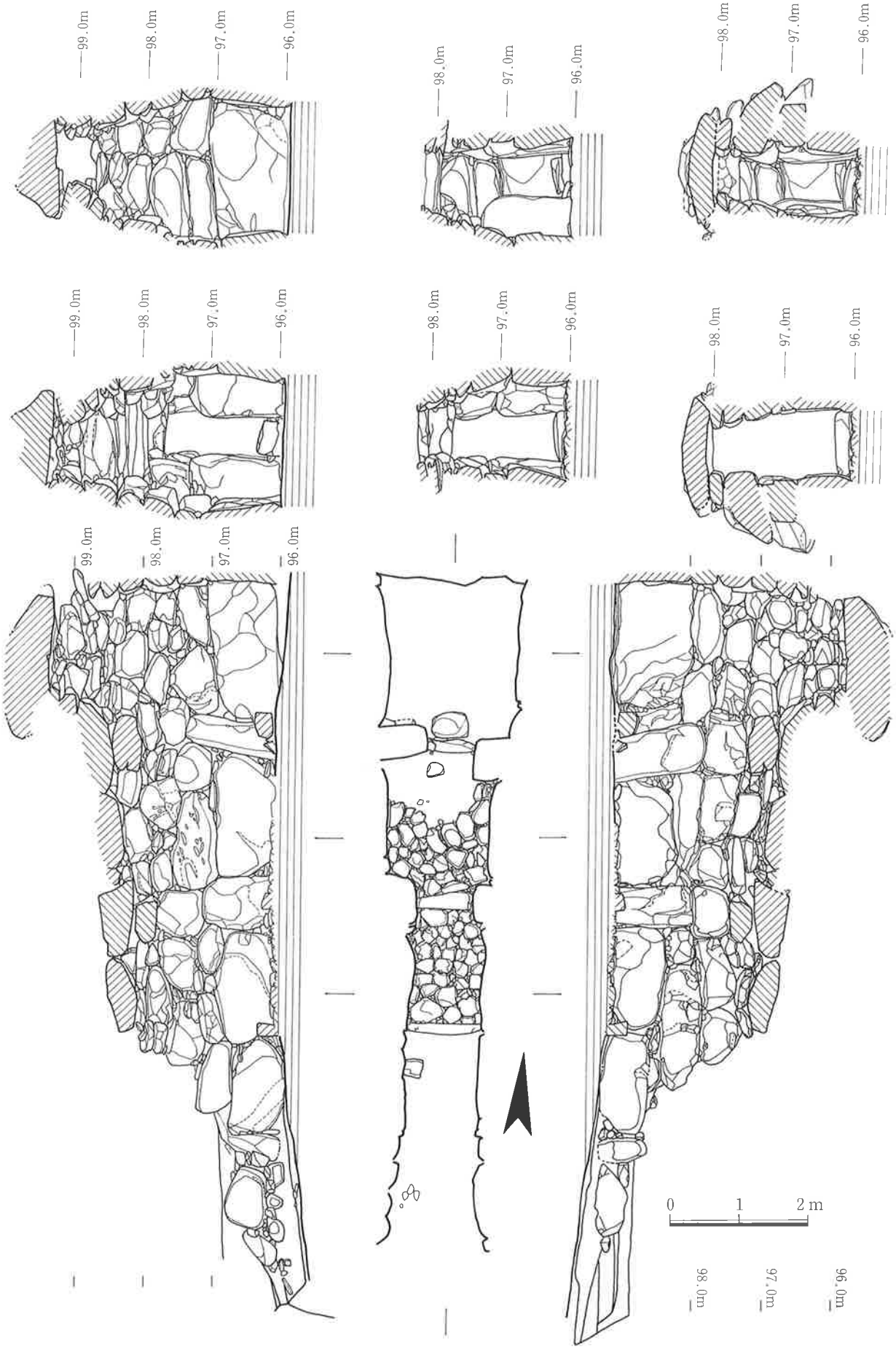


図12　2号墳石室

なう。このトレンチでも石室側は53、54層など石英粒や赤色粘土を含む黄白色の砂質土を盛る。非常に固く締まっている。20cm 前後の礫を含み、黒色土のブロックが多数認められる。トレンチ西側では盛土を行なう前に設けられていたと思われる平面円形の土坑を確認した。この土坑の埋土は黄褐色土と黒色土が交互に堆積していた。最下層から土師器の小片を数点出土した。墳丘はこの土坑が埋没、或いは埋められた後に造られている。また、平面プランでは確認できなかったが、トレンチ断面に溝状の遺構（12層）を確認した。尾根を遮断するための周溝の可能性がある。墳丘端をこの周溝までと考えると、玄室中心から約６ｍあり、直径約12m の墳丘を想定することができる。Ｃトレンチでは、農道の造成の際に墳丘を大きく削られるが、旧表土の上に直接盛土を行なう。盛土は10層確認できた。

（３）埋葬施設（図12）

内部主体は前室を持つ両袖型横穴式石室である。石室は前庭部上部を農道により破壊されていた他はほぼ完全な形で残されていた。当初の予想を越え、石材には巨石を用いており、石室の全長は約9.6ｍにもなる長大なものである。石室は尾根にほぼ直交して設けられていた。主軸方位はＮ－5°－Ｗである。ほぼ真南に谷部に向けて開口していた。

玄　室

玄室の平面形はほぼ正方形で奥壁側2.2m、左側壁側2.24m、右側壁側2.2m、玄門側1.92m、わずかに奥壁側に向かって広がる。玄室の高さは3.32m である。奥壁には腰石に長さ2.2m、高さ1.04m の大型の１枚石を据える。腰石上には５段の石積みが残る。３段目までは大きな横長の石を横位置に積むが４段目以降は扁平な石を横位置に積む。隙間には小振りの石を充塡する。奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。左側壁は奥壁に長さ2.04m、高さ1.04m の大型の１枚石を据える。腰石上には６段の石を積む。３段目までは比較的大きな石を横位置に積むが４～６段目の石積みは扁平な石を横位置に積む。壁の持ち送りは急である。右側壁側の腰石は長さ1.84m、高さ0.96m の大型の石と幅0.44m、高さ0.96m の石の２石を配置する。腰石上には５段の石を積む。３段目までは比較的大きな石を横位置に積む。４、５段目は0.4m 前後の石を積み隙間には小振りの石を詰める。両側壁の目路はよく通る。壁の持ち送りは急である。天井石には長さ約２ｍ、厚さ0.8m 以上の石を用いる。前壁には３段の石を積む。玄門上には幅0.8ｍ、厚さ0.4m、長

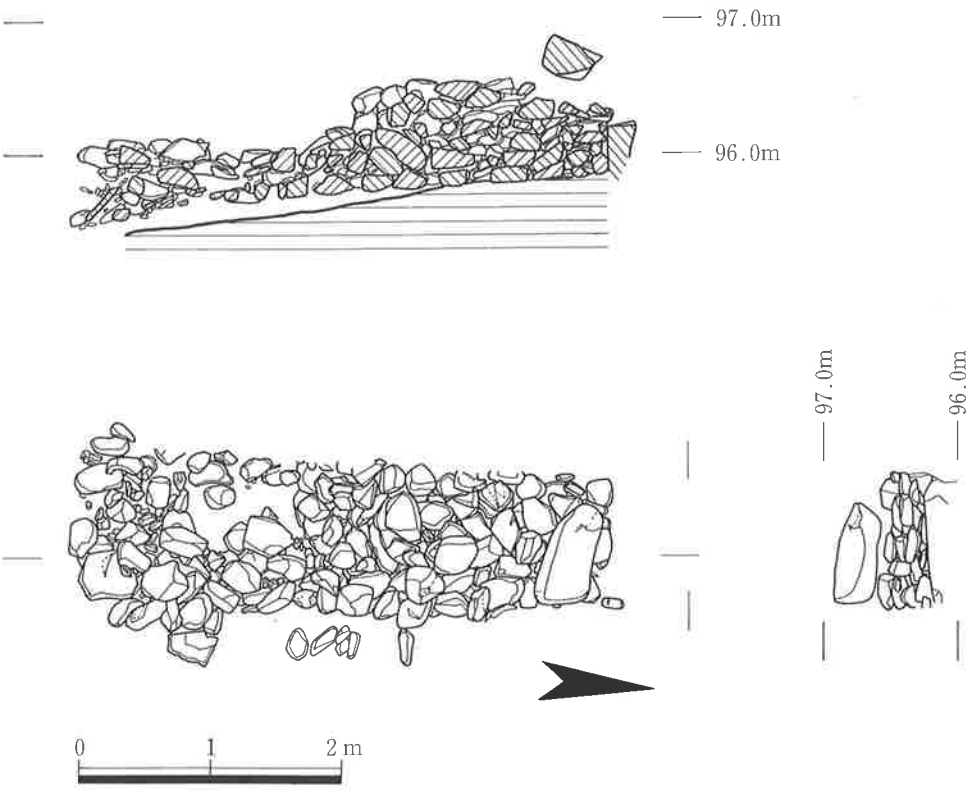


図13　２号墳閉塞石

さ２ｍ以上の横石を渡す。敷石は認められなかった。袖石は側壁にはめ込む。左袖石に幅0.6m、高さ1.24m、厚さ0.48mの石を垂直に立てる。右袖石は幅0.8m、高さ1.36m、厚さ0.64mの石を立てる。袖石間は0.68m。床面には仕切石をはめ込む。

前　室

前室は玄門側で幅1.6m、左側壁長は1.68m、右側壁長は1.48m、羨門側で幅1.52mになる。右側壁長は右袖石の厚さが左側壁に比べて厚いものを用いている分短くなる。左側壁の腰石は長さ1.68m、高さ0.8mの１枚石を用いる。腰石上には３段の石を積む。右側壁は腰石に長さ1.48m、高さ0.84の１枚石を用いる。腰石上に３段の石を積む。天井には３石を用いる。高さ2.12mである。敷石は20～40cm大の転石を敷詰め、隙間を小石で詰めていたと思われるが、玄室側が荒らされ抜かれている。前室と羨道の境には左側壁側で幅0.8m、高さ1.0mの袖石を立てる。右側壁側には幅0.76m、高さ1.2mの袖石を立てる。ともに側壁に組み込まれている。袖石間は0.8mで仕切石をはめ込む。天井には0.68m、厚さ0.32m、厚さ1.6m以上の横石を渡している。

羨　道

羨道は第２仕切石側で幅1.08m、左側壁長1.48m、右側壁長1.44m、第１仕切石側で幅1.08mで平面形は長方形である。左側壁は腰石に長さ1.6m、高さ0.8mの１枚石を据える。腰石上には４段の石を積む。右側壁は腰石に長さ1.44m、高さ0.8mの１枚石を据える。腰石上には３段の石を積む。天井には２石を用いる。高さ2.24mである。敷石には20～60cm大の転石を一面に敷き、隙間に小石を詰める。敷石は丁寧に敷かれ、完全な状況で残されていた。羨道と前庭部の境には長さ1.04m、幅0.16mの仕切石を置く。天井石には長さ1.4m、幅1.0m、厚さ0.6m、及び長さ1.8m、幅1.0m、厚さ0.35mの大型で扁平な石を用いる。第１仕切石から南側では中央長3.12m、平面形は墓道にかけてやや広がる。農道により上部を削平され、両側壁側とも１段分の石積みしか残っていない。羨道部側の両側壁は大型の石

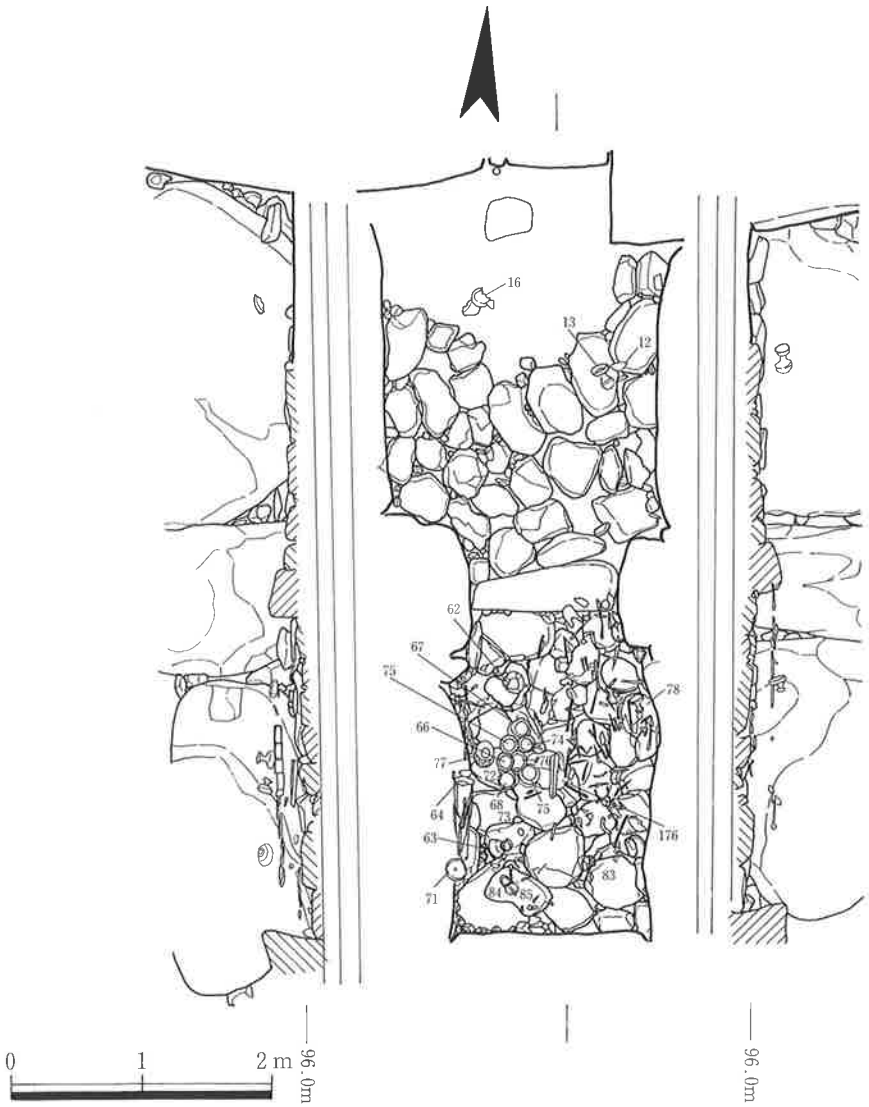


図14　２号墳遺物出土状況

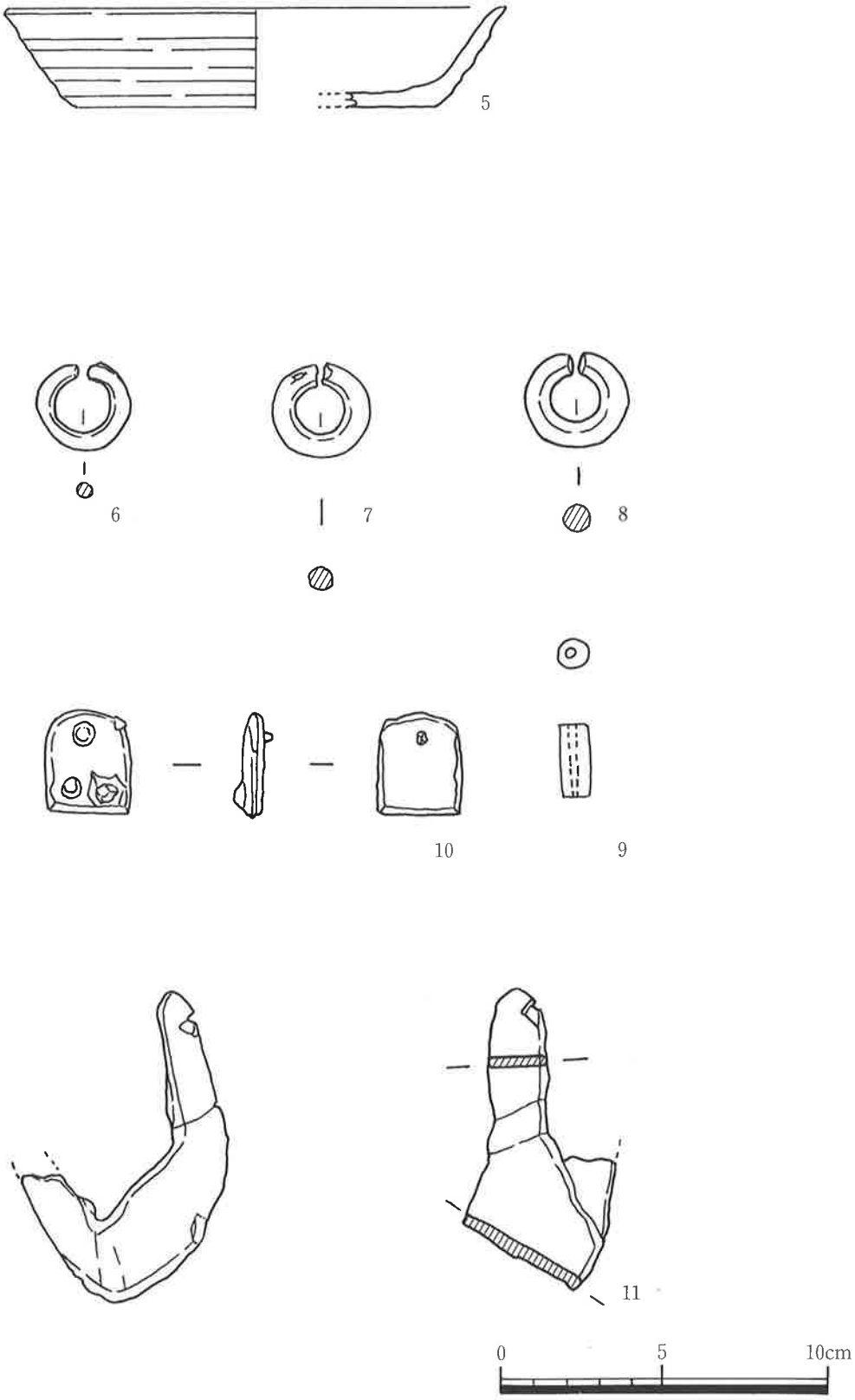


図15　2号墳出土遺物(1)

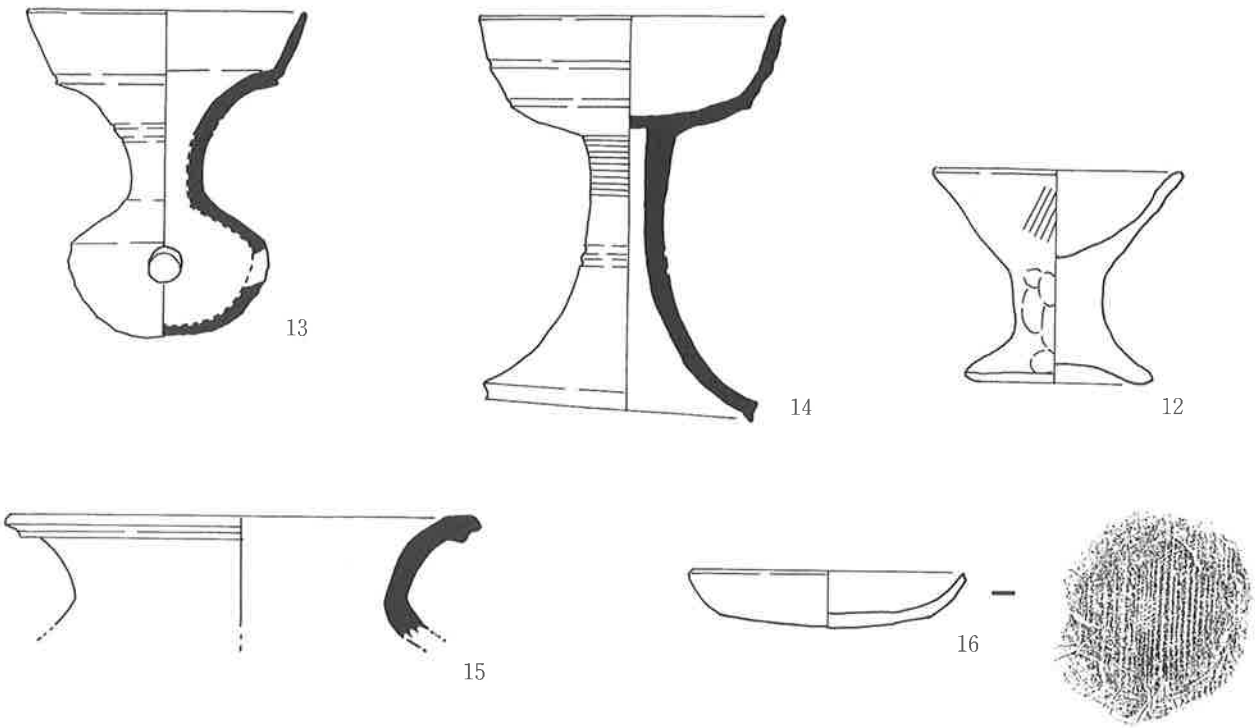


図16　2号墳出土遺物(2)

0　5　10cm

を用いるが、墓道にかけてやや小振りの石を用いる。羨道中央部に幅0.2m、高さ0.7mの石を立てる。袖石を意識したものであろうか。谷部に向けて緩やかに傾斜する。閉塞石が残る。

墓　道

墓道はほぼ直線的に長さ2.1m程度残っていた。中世の土坑により一部を切られている。墓道の床面は平坦である。

石室掘り方

尾根にほぼ直交して掘られていると思われるが、全容は確認できていない。

閉塞施設（図13）

閉塞石は第1仕切石から前庭部にかけてほぼ全域に積む。厚さ0.75～0.5m程である。農道により削平されているが、本来はまだ厚く積まれていたものであろう。20～40cm大の扁平な転石が使われ前庭部の両側壁に立てられた袖石部分までは密に積まれているが、墓道側に向かって疎らに薄く積まれている。積み方は雑である。石の間には黒褐色砂質土が堆積していた。

（4）出土遺物

出土状況（図14）

玄室内からの出土遺物はすべて埋土中からで、点数もわずかである。装身具、鉄製馬具、鉄鏃、不明鉄器、土師器が出土している。前室もすでに荒らされていた。前室ほぼ中央部から須恵器瓶、土師器高坏が並んだ状態で、また、南東隅部からは鉄製馬具、鉄鏃片が出土している。埋土中からは須恵器高坏、甕、瓦器坏、装身具、鉄製馬具、鉄製武器、鉄鏃、不明鉄器及び歯2個、骨片が出土した。羨道内からはほぼ供献された状況をとどめた遺物群が出土している。出土状況から上下2面に分けることが可能である。上面では羨道右側壁側から須恵器坏が身と蓋がセットになった状況で出土している。下面では羨道のほぼ中央部に砥石を置きその周囲に多数の鉄鏃及び鉄製馬具を配している。また、その他須恵器高坏、土師器高坏、装身具が出土している。閉塞石内からは装身具、鉄製馬具、武器が

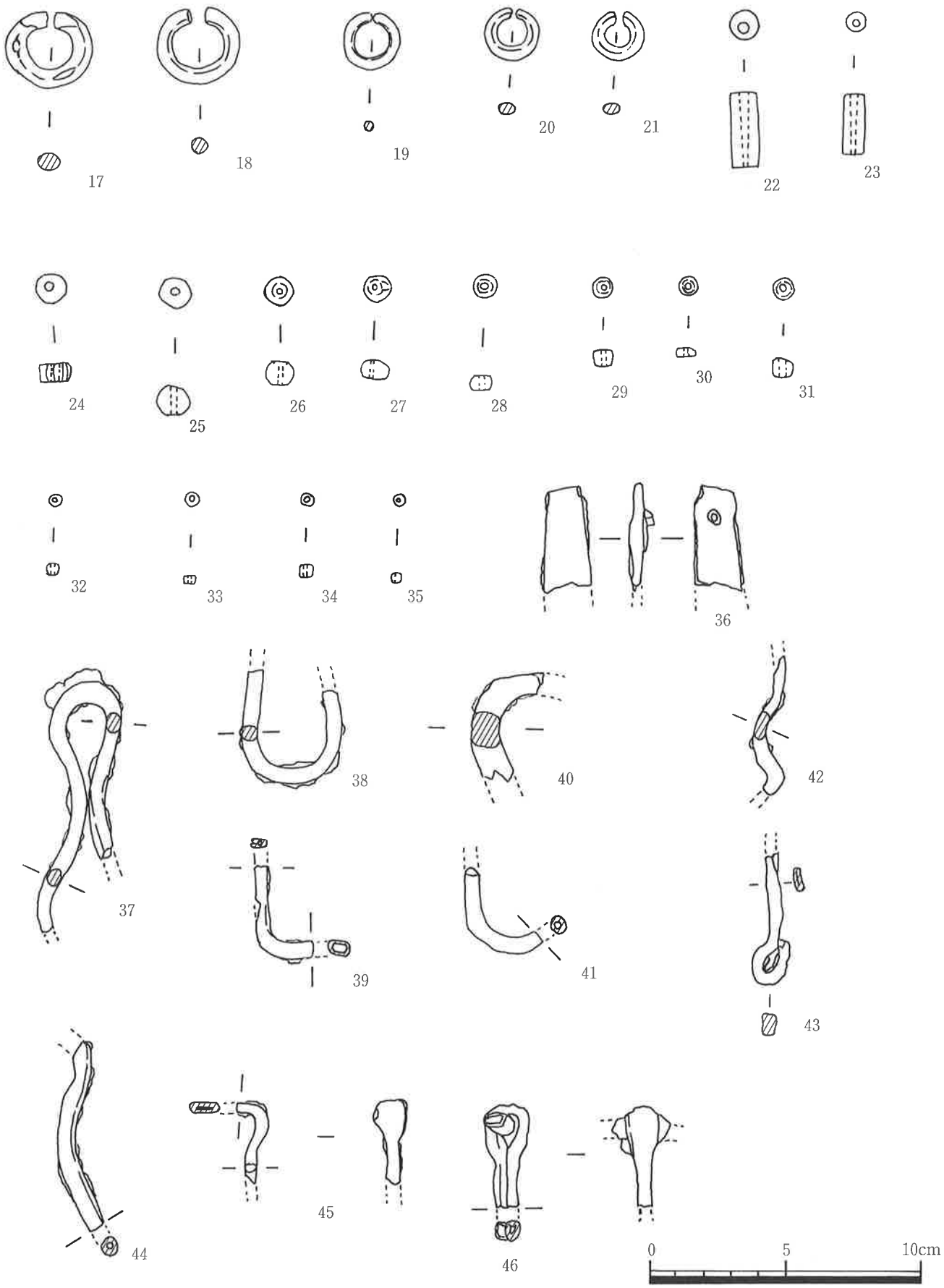


図17　2号墳出土遺物(3)

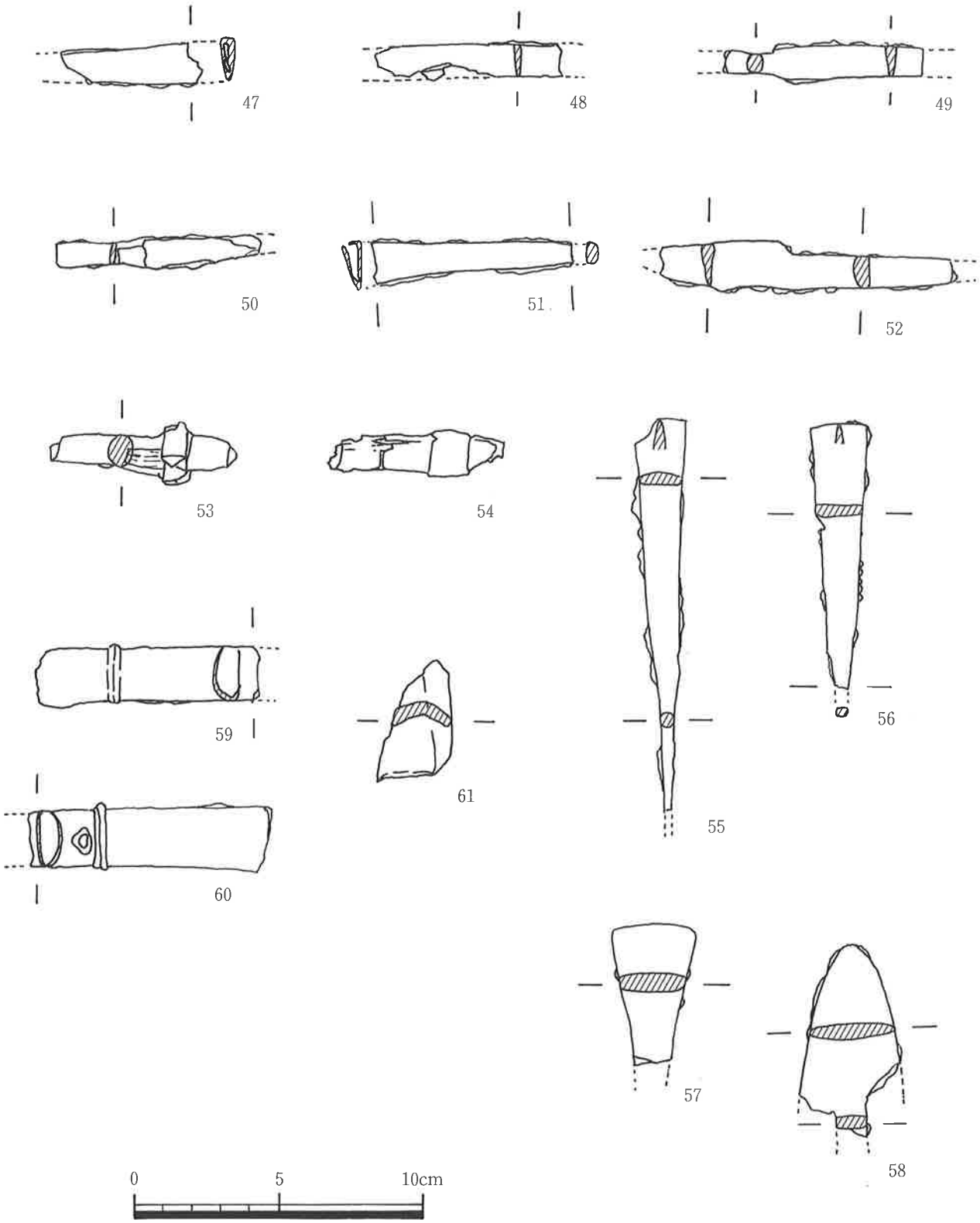


図18　2号墳出土遺物(4)

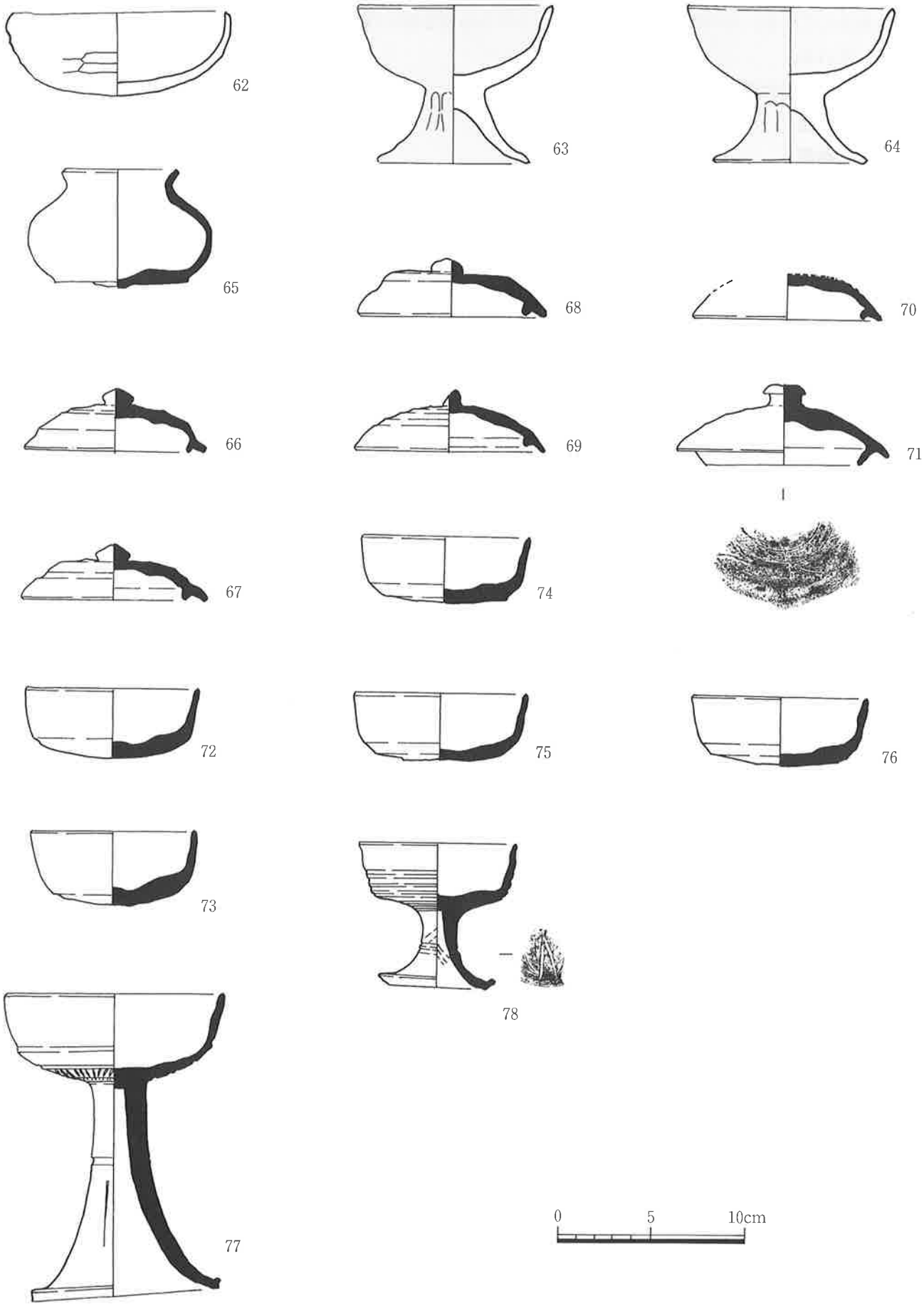


図19　2号墳出土遺物(5)

出土している。その他、農道南下の表土中からは須恵器坏(蓋、身)、瓿、甕、鉄製馬具、武器が出土している。

玄室内出土遺物（図15）

土　器

土師器

坏（5）

口径15.1cm、底径11.0cm、器高3.0cm、底部は糸切り離し。茶白色。風化が著しい。1/4程度残存。

装身具

耳　環（6～8）

6、7、8はいずれも銅芯に金張り。6は短径2.6cm、長径3.0cm。18g。7は短径2.8cm、長径3.2cm。22g。8は短径2.9cm、長径3.2cm。26g。

管　玉（9）

長さ2.3cm、直径0.9cm、濃緑色。碧玉。

鉄　器

鋲留金具（10）

平面方形で一端が隅丸になる。長さ3.0cm、幅2.6cm、厚さ0.7cm。鋲3個を用いる。鉄製。わずかに金張りが残る。

不明鉄器（11）

U字形をなす。長さ9.8cm、厚さ0.5cm。台を受ける溝が切られていないが、鋤先の可能性がある。

前室内出土遺物（図16、17、18）

土　器

土師器

高　坏（12）

手捏ねの高坏。坏部が直線的に開く。脚部は太く短い。裾部は短く開く。口径9.2cm、器高8.0cm。裾部径7.0cm。坏部外面はハケ目後ナデ。内面はナデ。脚部から裾部には指頭圧痕が残る。橙色。

須恵器

瓿（13）

体部は丸味のある底部を持ち、肩部はやや張る。頸部はやや強く締まる。頸部上部は大きく開き、口縁部は斜め上方に開く。端部は丸く収める。口径10.5cm、器高12.2cm、孔径1.4cm。体部下半部へラケズリ後ナデ。灰色。

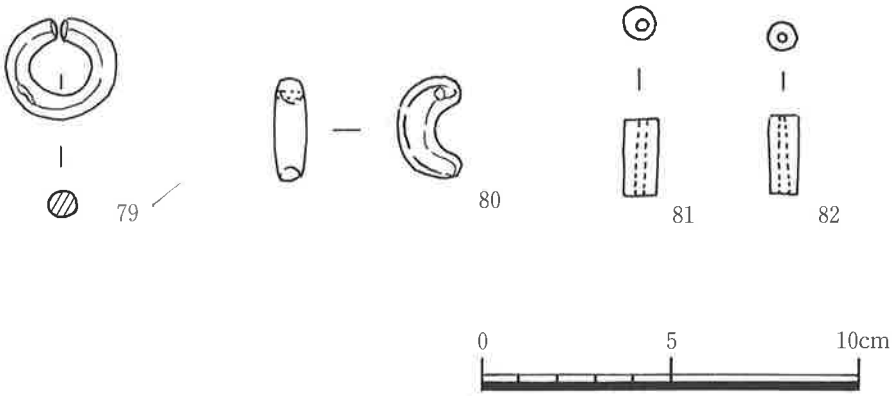


図20　2号墳出土遺物(6)

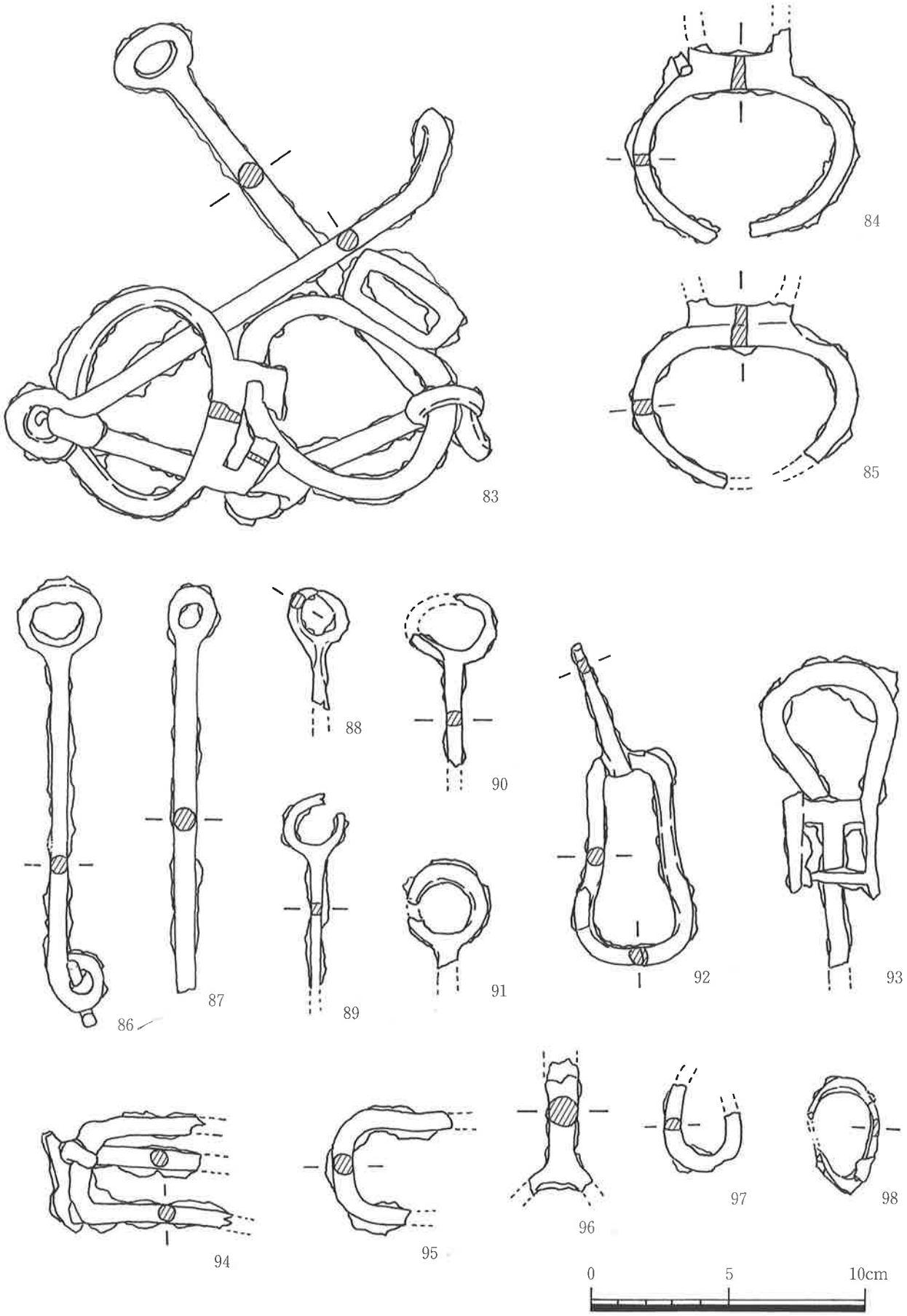


図21　2号墳出土遺物(7)

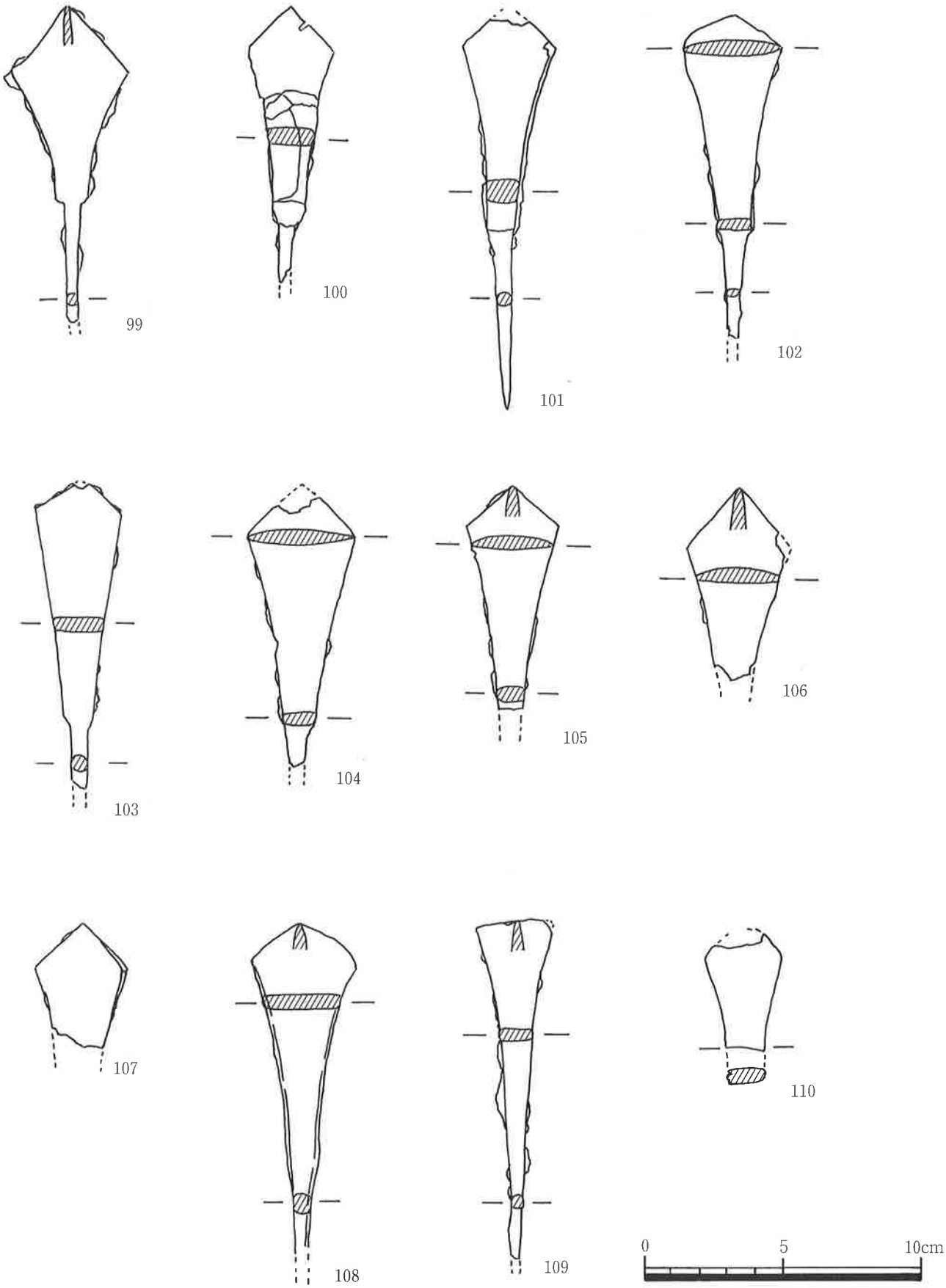


図22　2号墳出土遺物(8)

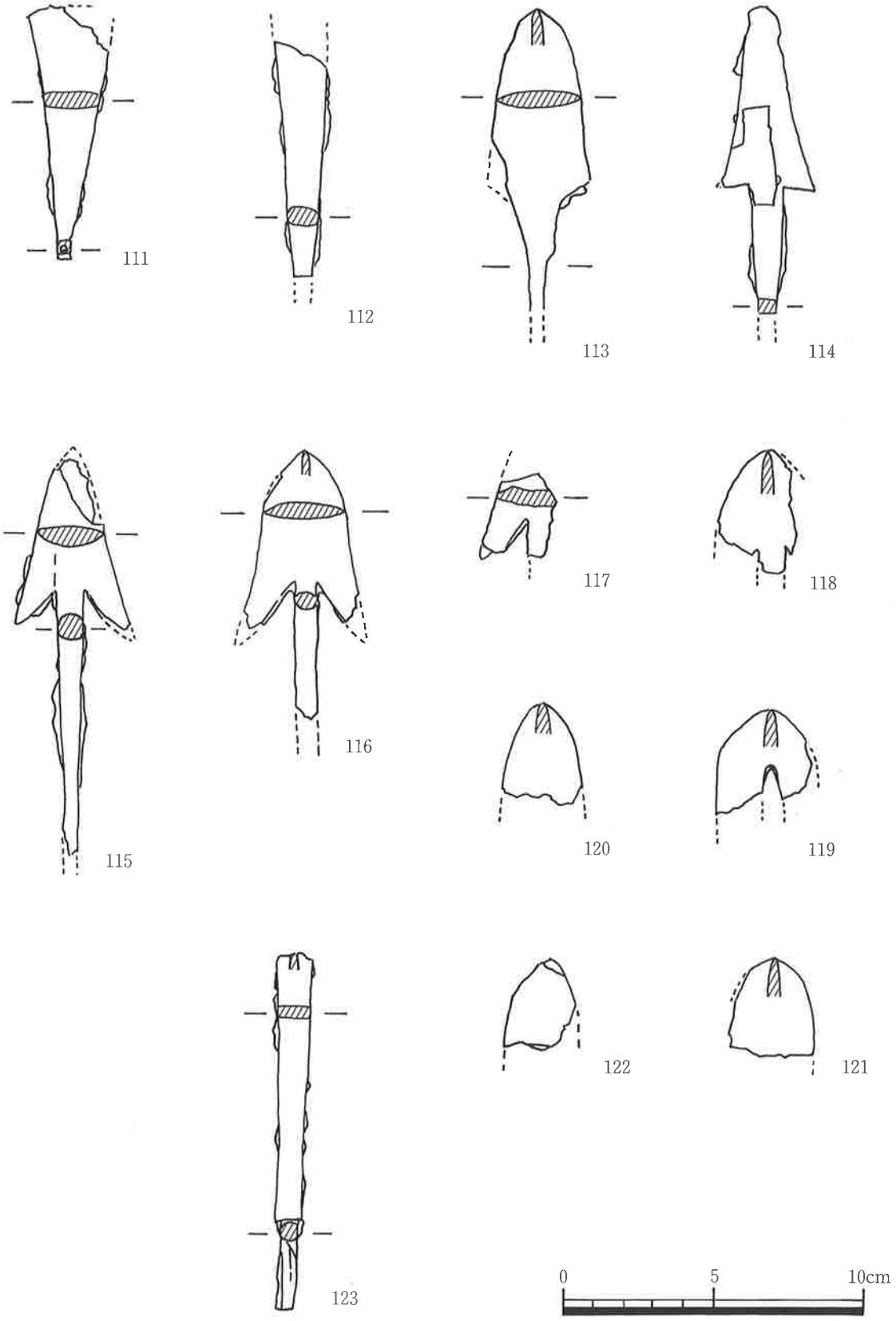


図23　2号墳出土遺物(9)

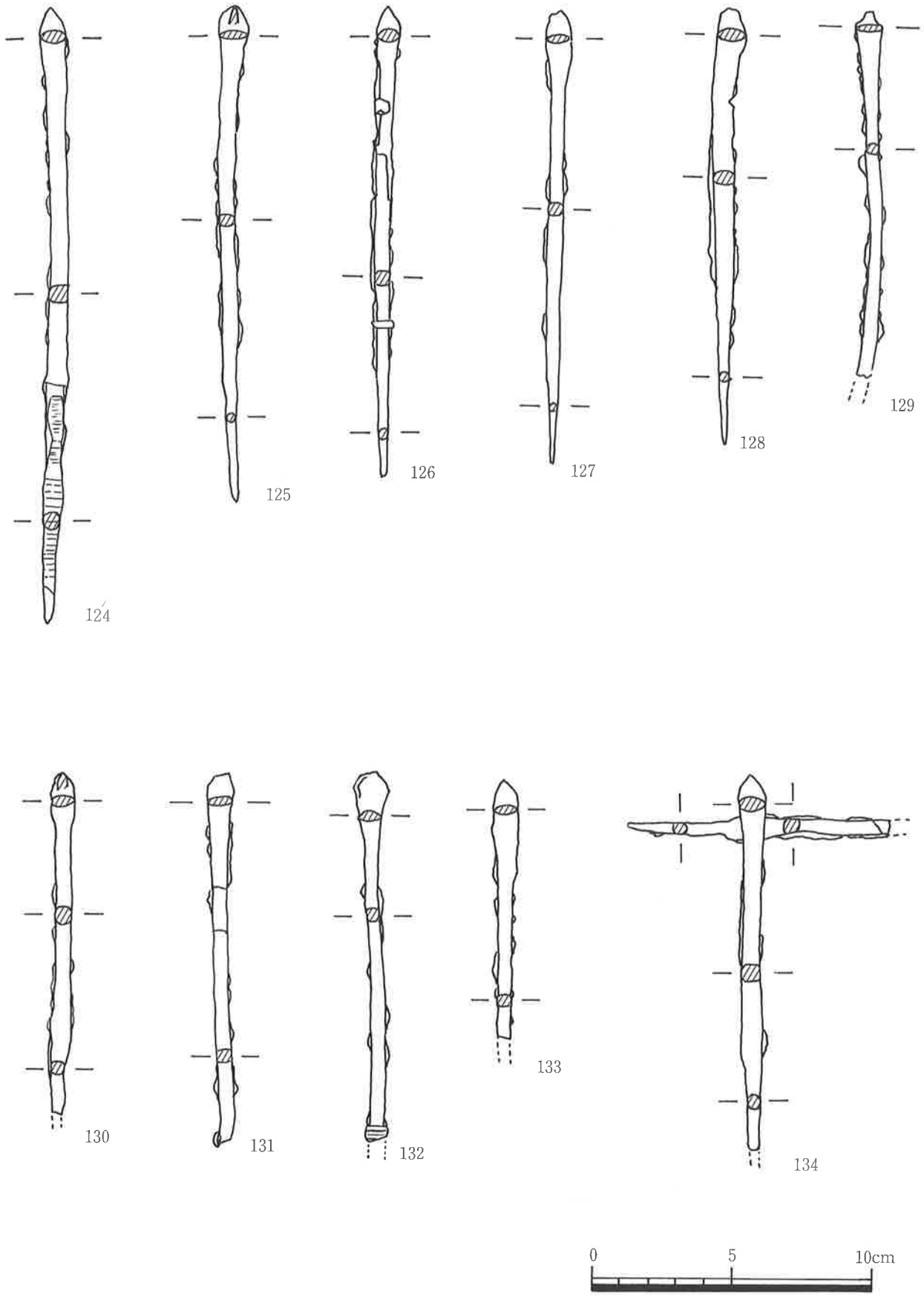


図24　2号墳出土遺物(10)

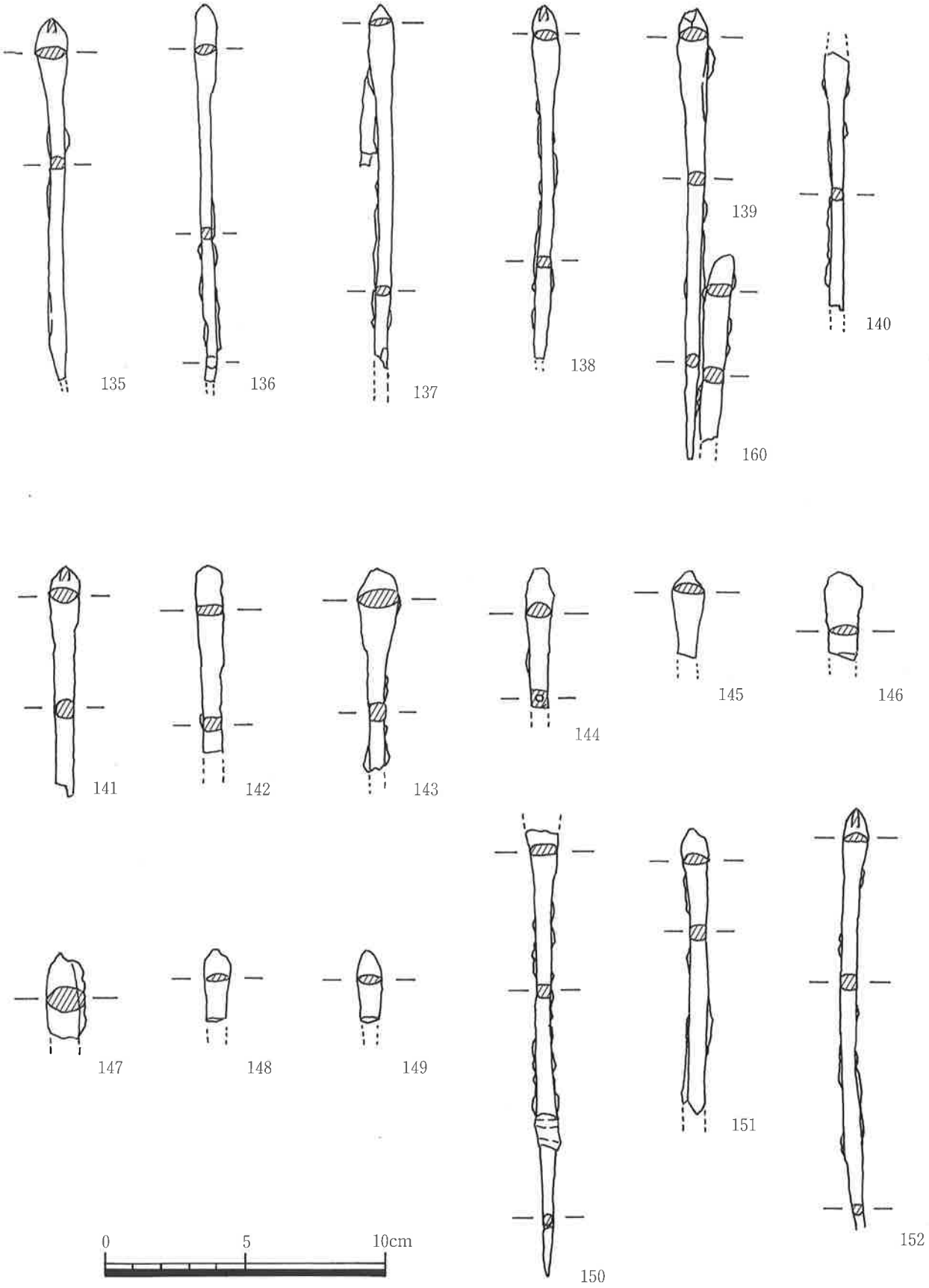


図25　2号墳出土遺物(11)

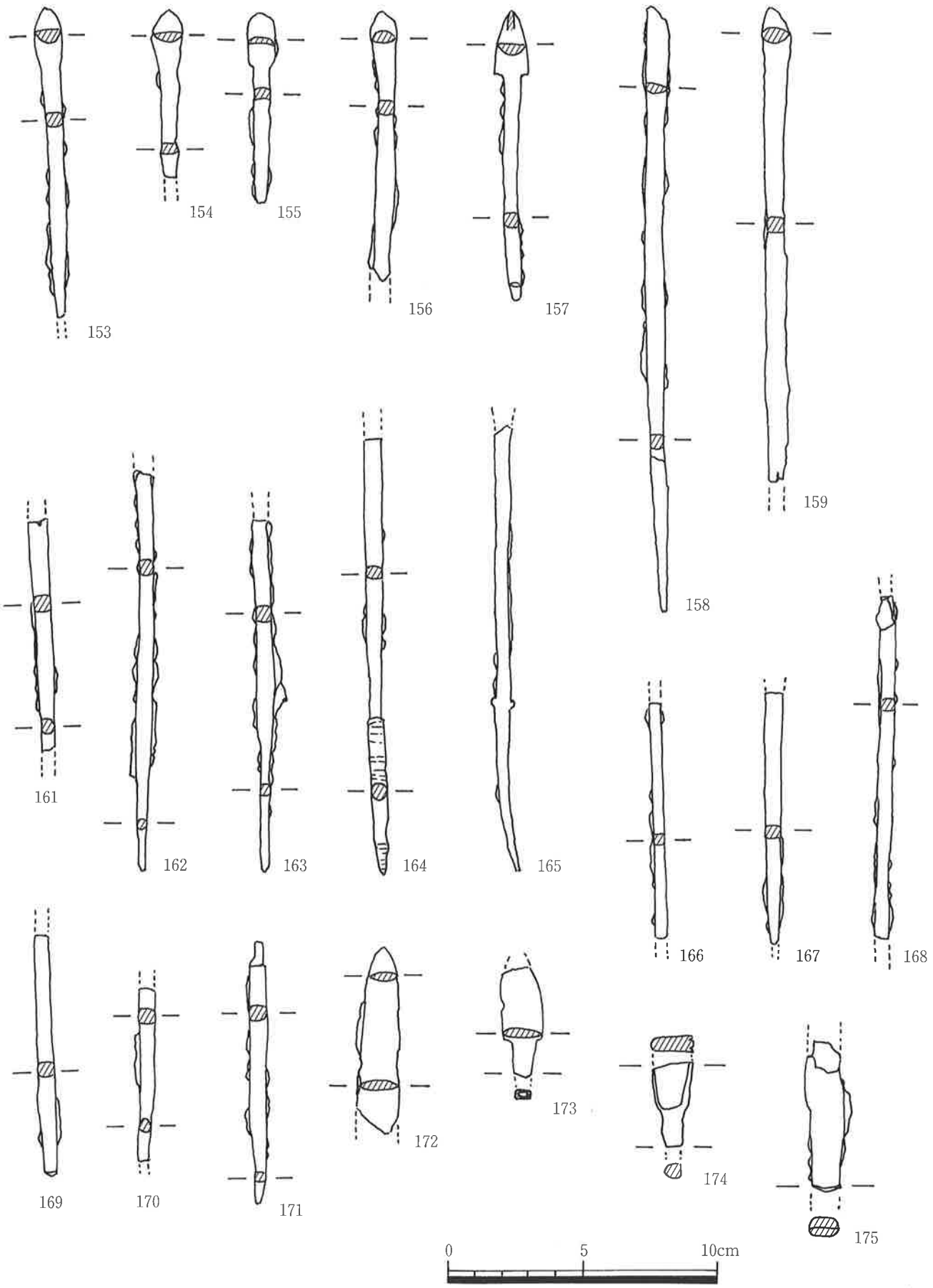


図26　2号墳出土遺物(12)

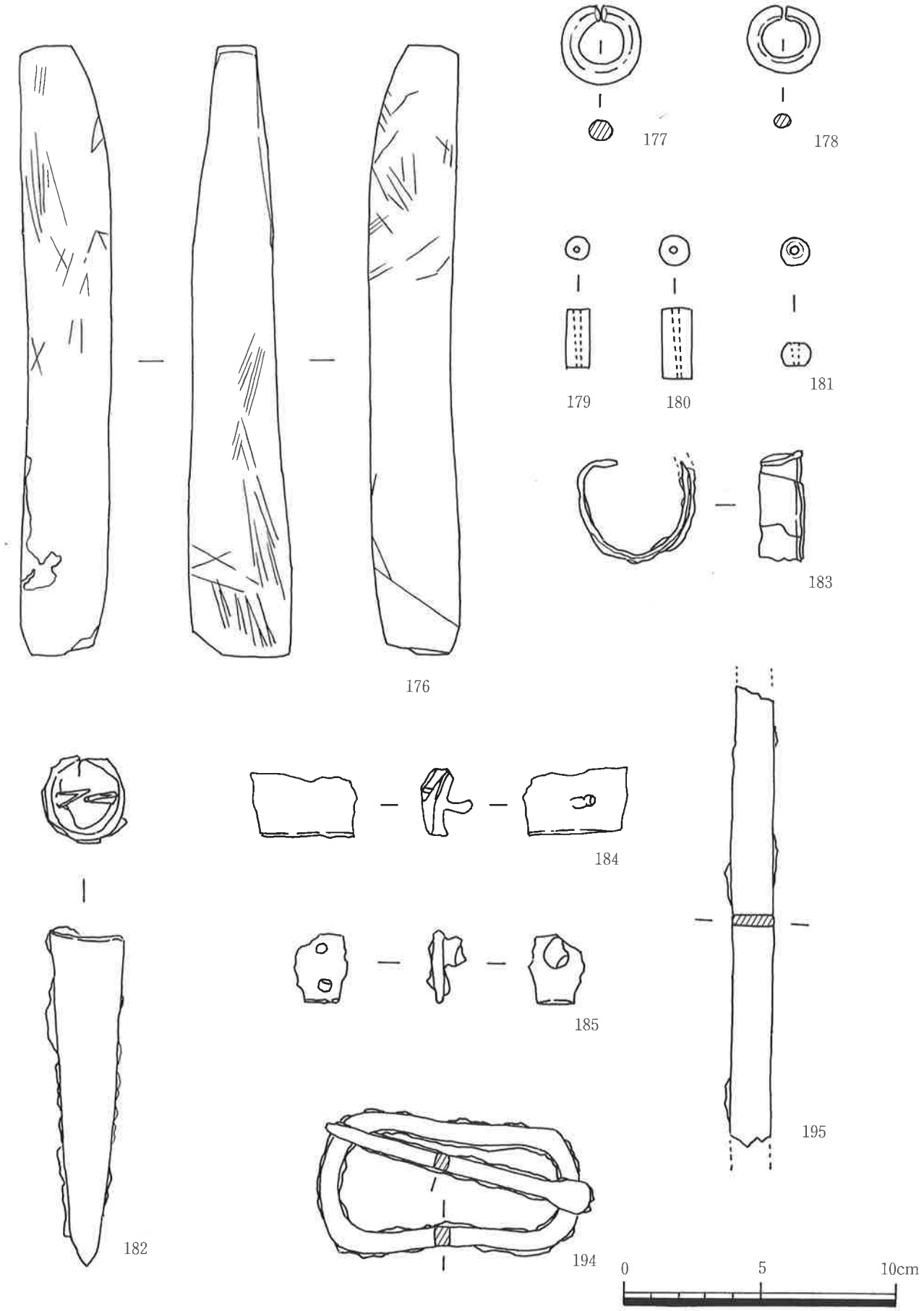


図27　2号墳出土遺物(13)

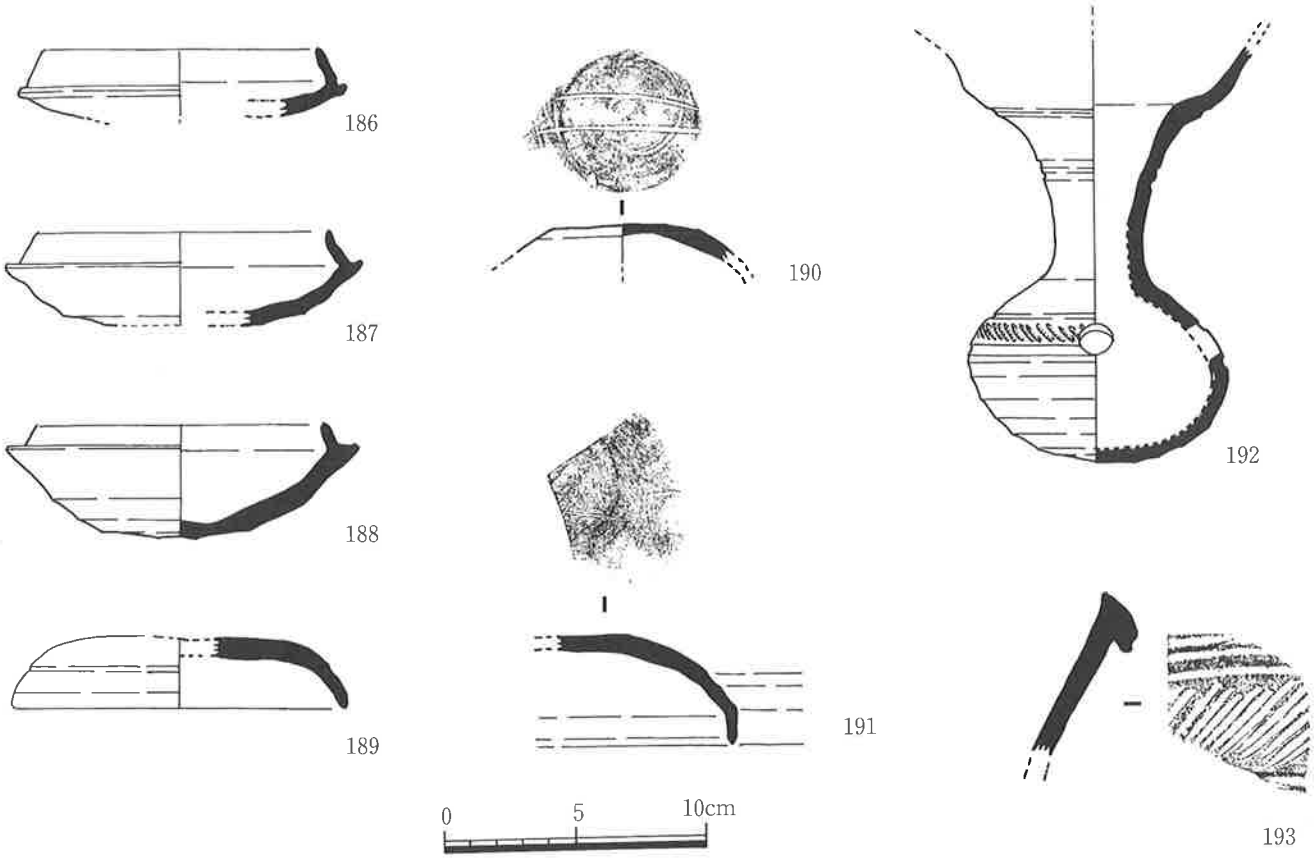


図28　2号墳出土遺物(14)

高　坏（14）

無蓋の高坏である。坏部は底部が平坦に近く、口縁部は斜め上方に開く。端部は丸く収める。脚部は長く裾部は大きく開く。脚部上方には横方向のカキ目。口径11.6cm、器高14.8cm、裾部径10.4cm。灰色。外面は一部黒色。

甕（15）

甕口縁部の破片。口径17.3cm、残存高4.5cm。外面黒灰色。内面灰白色。

瓦　器

皿（16）

丸底気味の底部に口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。口径10.2cm、底径6.6cm、器高2.1cm。内外面ともヘラミガキ。底部は糸切り離し。板状圧痕が残る。口縁部一部黒灰色。

装身具

耳　環（17～21）

いずれも銅芯で金張り。17は短径2.8cm、長径3.1cm。18は短径2.8cm、長径3.0cm。錆が著しい。断面は丸い。19～21は小型のものである。19は短径2.0cm、長径2.1cm。全面に金が残る。細身で断面は丸い。20は短径1.9cm、長径2.0cm。断面はやや扁平である。21は短径1.8cm、長径1.9cm。断面は扁平である。20、21は錆が著しい。

管　玉（22、23）

22は長さ2.7cm、直径0.9cm、濃緑色。4g。23は長さ2.1cm、直径0.8cm、濃緑色。2g。

丸　玉（24～27）

24は高さ0.7cm、直径1.2cm、赤橙色。25は高さ1.1cm、直径1.1cm、橙色。26は高さ0.8cm、直径1.0cm、橙色。27は高さ0.8cm、直径1.0cm、橙色。24～27はメノウ製。

小　玉（28～35）

28は高さ0.6cm、直径0.8cm、群青色。29は高さ0.6cm、直径0.8cm、青色。30は高さ0.3cm、直径0.7cm、青色。31は高さ0.7cm、直径0.7cm、濃青色。32は高さ0.4cm、直径0.4cm、濃青色。33は高さ0.35cm、直径0.6cm、群青色。34は高さ0.4cm、直径0.4cm、青色。35は高さ0.35cm、直径0.4cm、青色。

鉄　器

馬　具（36～46）

いずれも馬具の一部と思われる。完全なものはない。36は鐙金具と思われる。37、38は兵庫鎖の破片と思われる。

武　器

刀　子（47～54）

47は切先の破片。残存長5.7cm。48は刀身部のもの。残存長6.4cm。51～54は茎部から刀身部のもの。51は残存長6.8cm。52は残存長9.8cm。53は残存長6.2cm。一部木質が残る。鉄製の刀装具。54は残存長6.0cm。一部木質が残る。金銅製の刀装具。

鉄　鏃（55～58）

55～57は鏃身部が方頭形をなす。断面は両平造。55は残存長13.3cm。20g。56は残存長8.9cm。57は残存長4.9cm。58は鏃身部のもの腸抉をもつ。残存長6.5cm。

不明鉄器（59～61）

59、60は筒状のもので端部を袋状に閉じる。針金状のものを巻く。61は筒状のものの破片。

羨道内出土遺物（図19、20、21、22、23、24、25、26、27）

土　器

土師器（62～64）

坏（62）

丸味のある底部から口縁部は直立する。口径11.4cm、器高4.3cm。底部外面はヘラケズリ。外部上面と内面ヨコナデ。

高　坏（63、64）

63、64は坏部は深く、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げる。脚部は短く裾部は大きく開く。坏部内外面はナデ。脚部から裾部にかけて外面はヘラケズリ。後ナデ。内面はナデ。丹塗りを施す。63は口径10.2cm、器高8.4cm、裾部径8.2cm。64は口径10.8cm、器高8.1cm、裾部径8.2cm。

須恵器（65～78）

壷（65）

扁平な体部に短く外反する口縁部をもつ。端部は丸く収める。底部は平底。口径5.8cm、器高6.2cm、底部径7.2cm、１～２ mm 大の砂粒を含む。黒灰色。

坏　蓋（66～71）

いずれも宝珠形のつまみを有する小型の坏蓋。66は天井部がやや丸味を帯びる。かえりは短く小さい。天井部はヘラケズリを行なうが他は内外面ともナデ。口径9.8cm、器高2.9cm、灰色。67は天井部

を平坦に仕上げる。かえりは短く太い。天井部はヘラケズリ。他は内外面ともナデ。口径10.0cm、器高2.9cm、灰色。68は天井部を平坦に仕上げる。天井部はヘラケズリを行なう。他は内外面ともナデ。かえりは短く太い。口径10.0cm、器高3.0cm、灰色。69は天井を丸く仕上げる。かえりは小さい。天井部はヘラケズリ。他はナデ。口径10.4cm、器高3.2cm。70は天井部が剝離する。かえりは短く細い。内外面ともナデ。口径10.0cm、残存高1.4cm、灰色。71は天井部を丸く仕上げる。かえりは細長く、口縁部より高い。内外面ともナデ。口径11.2cm、器高4.2cm、茶褐色。壷蓋か。

坏　身（72～76）

いずれも小型の坏身。72は底部はヘラケズリのままでやや丸底気味に仕上げる。体部はやや外反気味に立ち上がる。端部は丸く収める。体部内外面はナデ。73は口径9.0cm、器高3.7cm、底径6.6cm。灰色。74は口径8.6cm、器高3.9cm、底径6.6cm、灰色。75は口径8.8cm、器高3.5cm、底径6.4cm、灰色。76は口径9.0cm、器高3.6cm、底径7.0cm、灰白色。

66と73、68と74、69と75はセットで出土している。

高　坏（77、78）

77の坏底部はやや平坦で、底部と体部の境には段を持つ。体部は外反しながら立ち上がる。端部は丸く収める。脚部は長く、裾部は大きく広がる。坏部底部外面に櫛描紋、脚部中央部には沈線を巡らす。口径11.4cm、器高15.7cm、裾部径9.7cm。灰色。78は小型の高坏。坏底部は平底。体部はやや外反しながら立ち上がる。端部は丸く収める。体部下半部には沈線を巡らし、底部にはカキ目を有する。脚部は短く、裾部は大きく開く。裾部端部は斜め上方に張り出す。脚部中央に沈線を巡らす。また、脚部内面にヘラ記号がある。口径8.2cm、器高7.6cm、裾部径6.2cm、灰色。

装身具

装身具はいずれも羨道の埋土中から出土したものである。

耳　環（79）

銅芯に金張り。短径2.7cm、長径3.0cm。16g。

勾　玉（80）

長さ2.7cm、茶白色。

管　玉（81、82）

81は長さ2.0cm、直径0.9cm、濃緑色。3g。82は長さ2.1cm、直径0.8cm、濃緑色。2g。いずれも碧玉製。

鉄　器

馬　具

轡（83～91）

83は完全な状況で残っていた。矩形立聞をつけた環状鏡板付轡である。銜と引手金具を同じ個所で連結する。鏡板は長径8.4cm、短径6.4cmの楕円形で短辺2.0cm、長辺4.5cmの矩形の立聞が付く。引手金具の長さは19.8cm。金具の断面は丸い。84、85も矩形の立聞を付けた環状鏡板付轡の破片である。84は鏡板が長径8.0cm、短径6.2cmの楕円形である。断面は扁平である。85は鏡板が長径8.0cm、短径6.0cmの楕円形で、断面は扁平である。84とセットと思われる。86、87は銜と思われる。86は残存長14.8cm、断面は丸い。87は長さ15.6cm断面は扁平である。その他88～91については引手金具あるいは銜の破片と思われる。

鈴　具（92～95）

92はほぼ完形である。他はいずれも破片である。その他96～98は環状の金具だが部位は不明。

武　器

鉄　鏃（99～174）

99～108、110は鏃身部が圭頭形をなす。99は残存長11.4cm、重さ20g。100は鏃身部の一部を欠く。両丸造。101はほぼ完形。残存長13.9cm、重さ32g。両丸造。102は残存長11.4cm、重さ27g。両丸造。103は残存長10.8cm、重さ24g。両丸造。104は残存長7.5cm、重さ34g。両丸造。105は残存長8.0cm、重さ29g。片丸造。106は残存長7.0cm。片丸造。107は残存長4.4cm。108は残存長11.6cm、重さ34g。平造。109はほぼ完形。鏃身部が方頭形をなす。残存長12.0cm、重さ20g。110は残存長4.8cm。111は鏃身部が方頭形をなす。残存長8.4cm。平造。112は鏃身部の破片で刃部を欠く。113は鏃身部が三角形をなす。両丸造。残存長10.0cm、重さ20g。114は鏃身部が三角形をなす。残存長10.0cm、重さ25g。115～117は鏃身部が三角形で腸抉をもつ。115は残存長13.4cm。片丸造。重さ32g。116は残存長9.0cm。両丸造。重さ22g。117は腸抉の破片。118、119は透かしを有する。120～122は鏃身部の破片。形式不明。123は細根。残存長11.8cm。平造。茎部には木質が残る。重さ17g。

124～171は長頸鏃である。124は完形。長さ21.6cm。重さ20g。両丸造。茎部に木質が残る。125は両丸造。全長17.4cm、重さ10g。126は両丸造。全長16.5cm。127は両丸造。全長16.0cm、重さ10g。128は両丸造。全長15.3cm、重さ12g。129は鏃身部が扁平である。残存長13.8cm、重さ13g。130は両丸造。残存長12.1cm、重さ12g。131は両丸造。残存長13.2cm、重さ10g。茎部先端が捩れる。132は両丸造。残存長13.2cm。茎部に樹皮状のものを巻く。133は両丸造。残存長9.2cm。鏃身部が長い。134は両丸造。残存長13.2cm。135は両丸造。残存長12.6cm。136は両丸造。残存長13.2cm。鏃身部が長い。137は両丸造。残存長12.8cm。138は両丸造。残存長12.4cm。139は両丸造。残存長15.9cm。140は残存長9.2cm。鏃身部が長い。141は両丸造。残存長7.9cm。142は両丸造。残存長6.5cm。143は両丸造。残存長7.2cm。144は両丸造。残存長5.0cm。145～149は鏃身部の破片。いずれも両丸造。150は鏃身部を欠く。残存長15.7cm。木質が一部残る。151～157は片丸造。151は残存長9.8cm。152は残存長14.8cm。153は残存長11.8cm。154は6.1cm。155は7.1cm。156は残存長9.8cm。157は鏃身部が三角形をなす。残存長10.8cm。158～160は平片刃造。158は完形。全長22.3cm、重さ23g。159は残存長17.3cm、重さ18g。160は残存長6.8cm。

161～171は頸部及び茎部の破片。161は残存長8.3cm。162は残存長14.8cm。163は残存長14.0cm。164は残存長16.0cm。茎部に木質が残る。165は茎部が湾曲し棘状の関部が残る。残存長16.4cm。166～171は頸部の破片。その他172～174は鏃身部及び頸部の破片。

刀　子（175）

刀子の茎部と思われる。残存長5.5cm。

石製品

砥　石（176）

長さ22.2cm、断面形がほぼ正方形をなす。表面には擦痕が残る。灰色。

閉塞石内出土遺物（図27）

装身具

耳　環（177、178）

177は短径2.8cm、長径2.9cm。金箔が残る。重さ22g。178は短径2.4cm、長径2.6cm、重さ8g。いずれも銅芯。

管　玉（179、180）

179は長さ2.2cm、直径0.8cm、白緑色。2g。180は長さ2.6cm、直径1.1cm、濃緑色。6g。

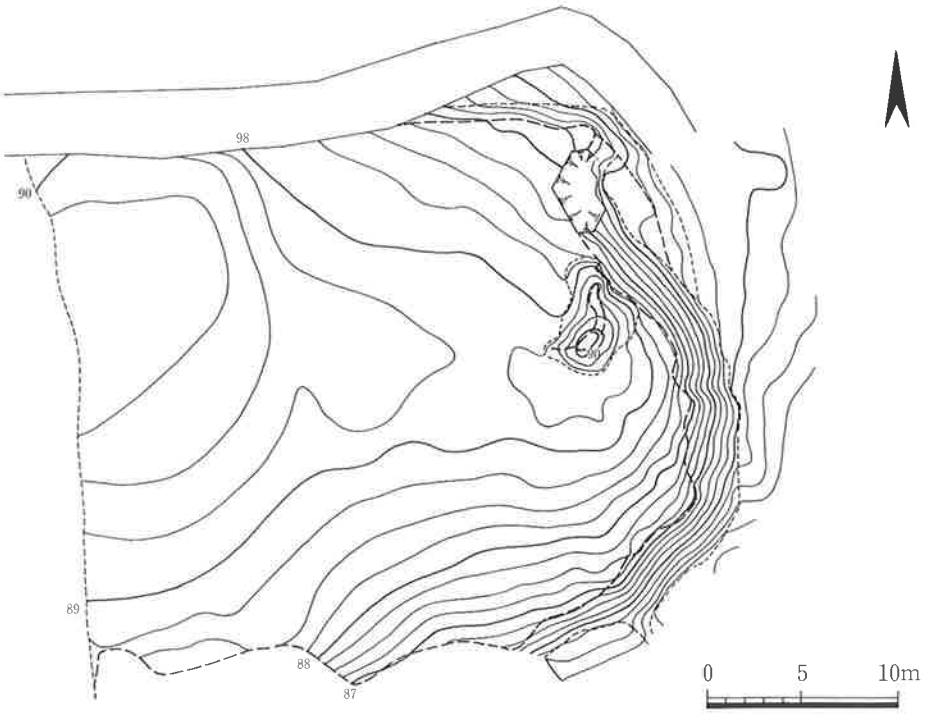


図29　3号墳地形測量図（調査前）

小　玉（181）

高さ0.8cm、直径1.0cm、白色。

鉄　器

武　器

石　突（182）

長さ12.0cm、重さ105g。

不明鉄器（183～185）

183は刀装具か。184、185は馬具の一部と思われる。

表土出土遺物（図28）

ここで紹介する遺物は古墳南側の段落ちの部分に堆積していた表土から出土したものである。

土　器

須恵器

坏　身（186～188）

いずれも立ち上がりを有する。186、187はやや長く。188は短い。186は復元径10.4cm、残存高2.5cm。内外面ともナデ。灰色。187は復元径11.0cm、残存高3.5cm。底部外面ヘラケズリ。他はナデ。灰褐色。188は口径10.8cm、器高4.2cm。底部外面はヘラケズリ。他はナデ。

坏　蓋（189～193）

189は天井部と口縁部の境に沈線を有する。190及び191はヘラ記号を有する。192は体部は丸く、頸部はあまり締まらない。胴中位に櫛描文、頸部上部に沈線を巡らす。残存高15.8cm。下半部はヘラケズリ。他はナデ。灰色。193は甕口縁部の破片。

鉄　器（194、195）

194は絞具。重さ63g。195は細長い板状のものである。断面形は方形である。

3．3号墳

（1）位置と現状（図29）

2号墳から東へ約90m程下った丘陵の縁辺部に位置する。標高は87.5mである。3号墳は墳丘の東側を大きく削られていた。また、西側は整地され平坦地となっており、わずかに1mの高まりが認められるのみであった。後にこの高まりは墳丘の削り残しであることが判明した。調査前は一帯は雑種地となり雑木或いは竹が生い茂っていた状況であつた。この古墳についても地元の方からの聞き取りにより明治期に盗掘され、鉄刀が出土したことがわかった。

（2）墳　丘（図30）

墳丘は上部は北、東、南東部が大きく削られている。また、西側は埋め立てられ平坦地となっている。Aトレンチでは東に傾斜する地山上に直接赤色土と褐色土が交互に積まれ、、盛土が整然と行なわれていたことが確認できた。Aトレンチでは盛土は石室側で1.3m、Bトレンチでは盛土は石室側で2.2mほど残る。盛土は地山上に直接積む。Cトレンチでは石室側で1.3mほど残る。盛土は地山上に直接積む。Bトレンチでは細かく盛土が行なわれているのに対し、Cトレンチでは雑である。周溝、葺石は確認できなかった。

（3）埋葬施設（図32、33、34）

内部主体は単室両袖型横穴式石室である。石室上部は大きく削平され天井石等は既に失われていた。石室は斜面に直交して設けられ谷部に向けて開口している。主軸方位はN－5°－Wである。

玄　室

玄室は平面形が正方形を呈し、奥壁幅2.56m、左側壁長2.64m、右側壁長2.36m、前幅2.4mである。奥壁には腰石を3石据える。腰石上には4段の積石が残る。積石の大きさは不揃いで、横長の石を積み、隙間に小石を充塡する。左側壁は腰石を3石据え、腰石上には3段の積石が残る。右側壁は腰石を3石据え、

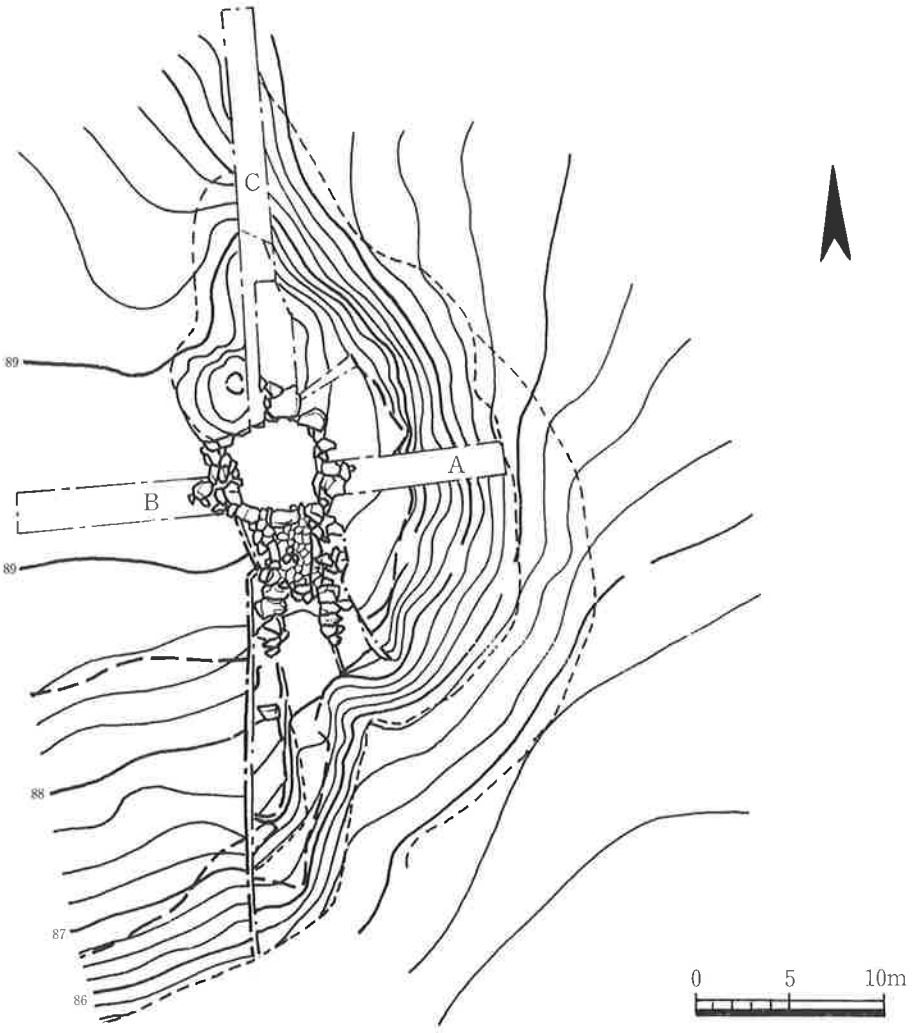
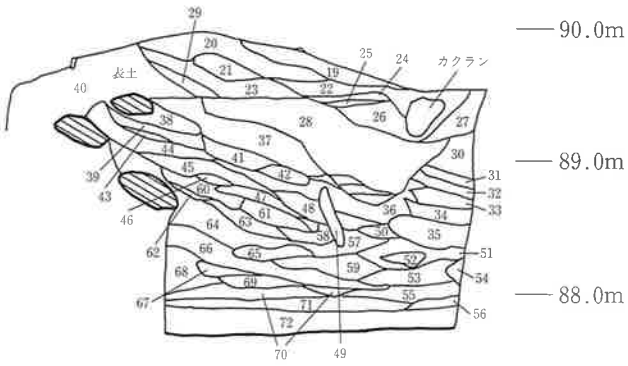
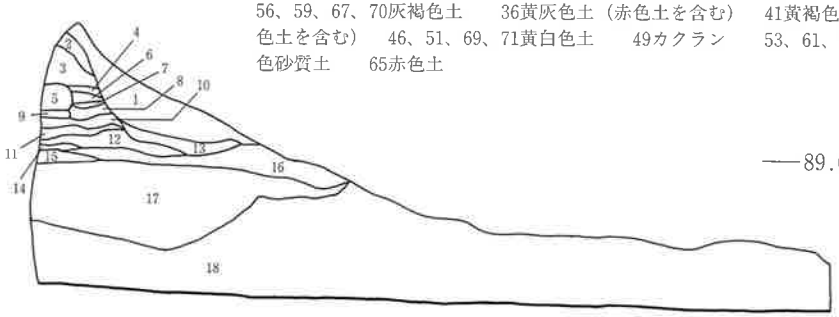


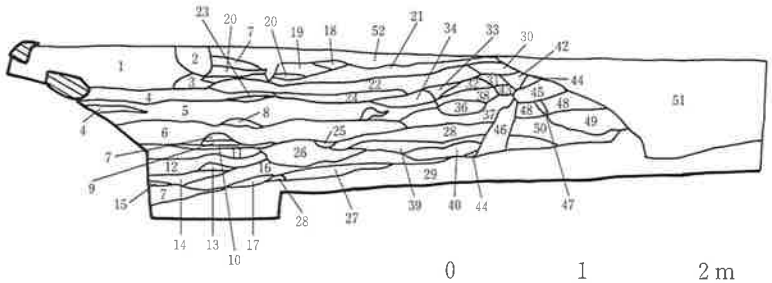
図30　3号墳墳丘測量図（調査後）





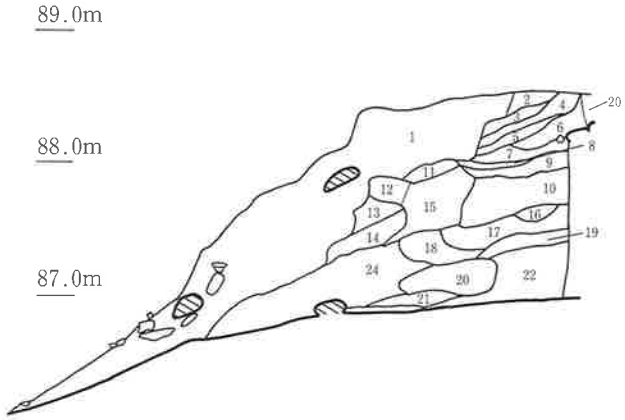
3号墳　Cトレンチ土層図

1、40表土　2、4、7、19、28、37、68赤褐色土　3、6、8、9、12、13、21、43暗褐色土　5、16、20、23、24、30、34、38、44、45、47、48、52、54、58、60、62、63褐色土　10黄褐色土　11、14黒褐色土　15、64黄白色土（赤色土を含む）　17、18、72池山　22、25、26、27明褐色砂質土　29、32、39、57明褐色土　31、42黒色土　33、35、50、55、56、59、67、70灰褐色土　36黄灰色土（赤色土を含む）　41黄褐色土（白色土を含む）　46、51、69、71黄白色土　49カクラン　53、61、66黄白色砂質土　65赤色土



3号墳　Bトレンチ土層図

1、5、6、11、12、15、19、42、43、45褐色土　2褐色土（黄白色土を含む）　3黄白色土（褐色土、黒色土を含む）　4、10、14、26赤色土（黄白色土を含む）　7、8、13、16、17、21、22、23、24、25、31、32、34、36、38、40、49、50、52暗褐色土　9黄色粘質土　18、28、44黒色土　20、27、30、33、35、37、39、41、48黄白色土　29池山　46、47カクラン　51表土



3号墳　Aトレンチ土層図

1表土　2、5、7、9褐色土（赤色土を含む）　3、16黒色土　4赤色土（色色土を含む）　6、8、10褐色土　11、19淡褐色土　12暗褐色土　13暗褐色土　14、24暗褐色土（赤色土、淡褐色土を含む）　15、20淡褐色土（赤色土、黒色土を含む）　17淡褐色土（灰褐色土を含む）　18、21赤色土　22池山

図31　3号墳墳丘土層図

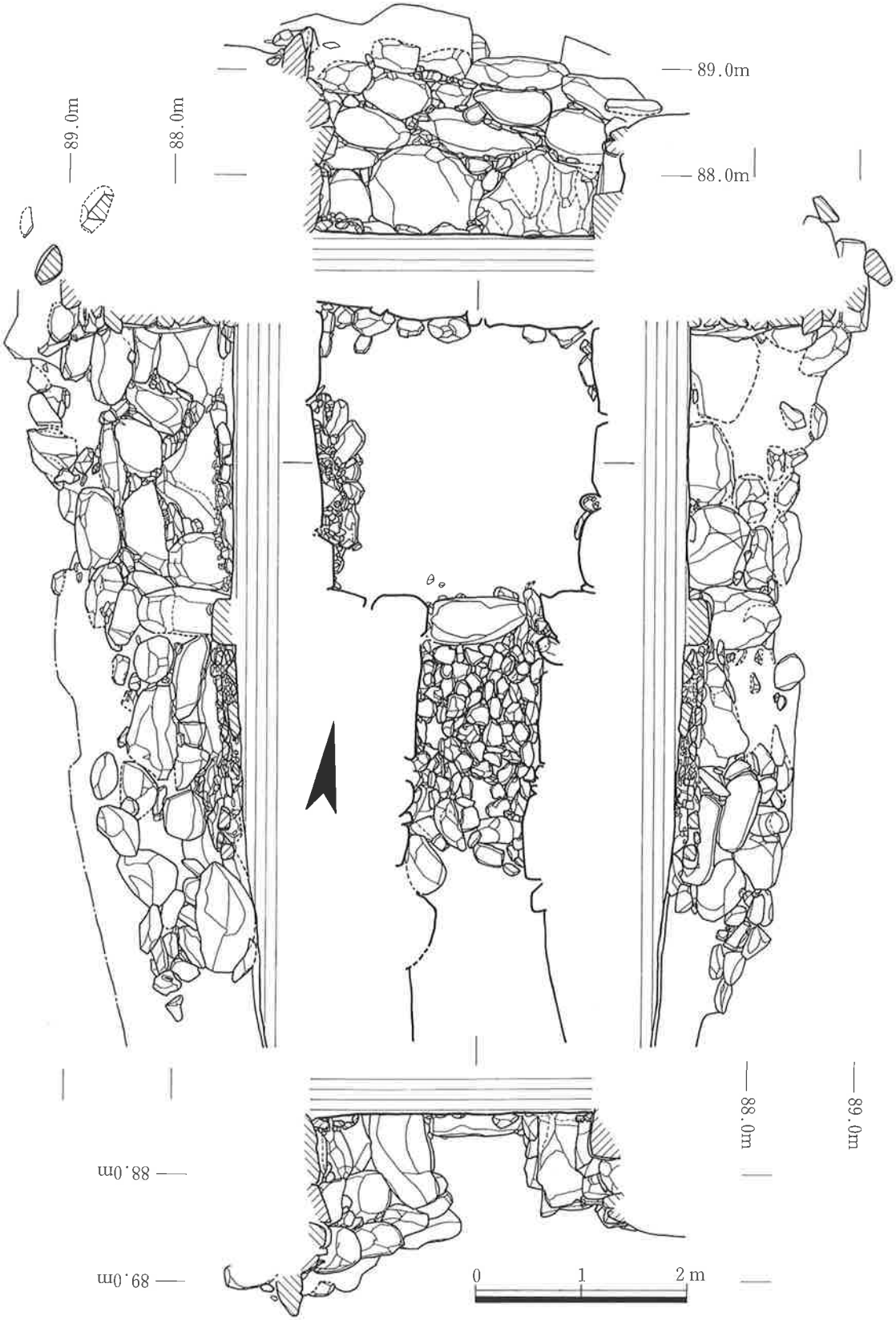


図32　3号墳石室

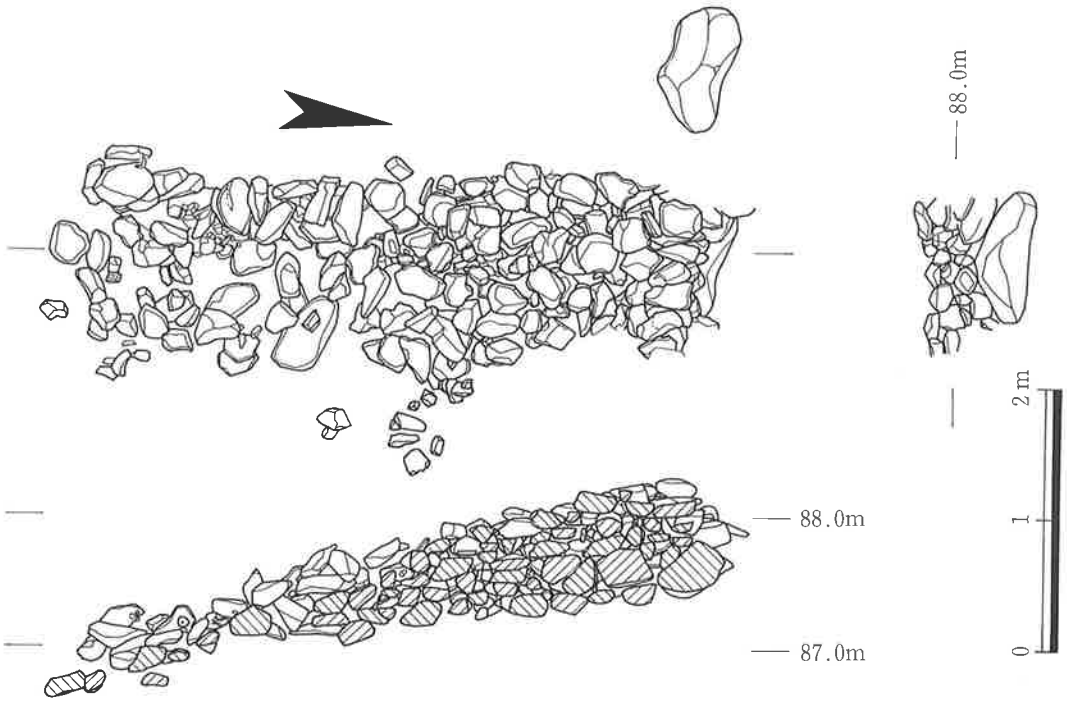


図33　3号墳閉塞石

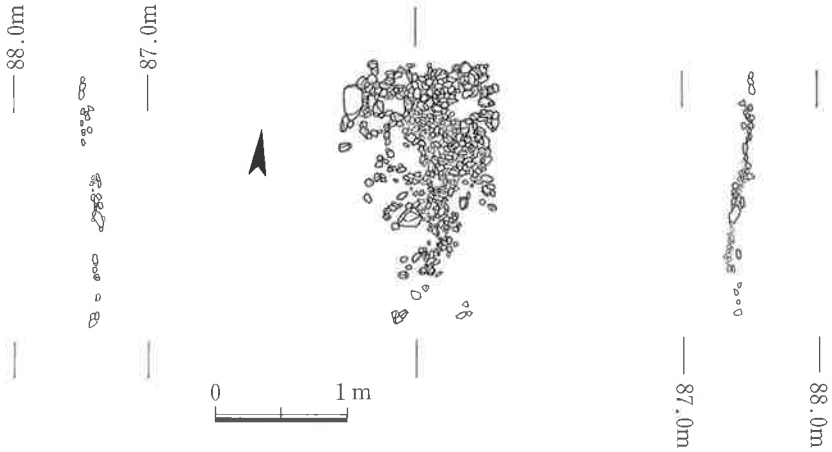


図34　3号墳羨道床石（1次）

腰石上には2段の積石が残るが、やや小振りの石を用いる。壁の立ち上がりはいずれも垂直に立ち上がる。石の積み方は面が揃わず雑な印象を受ける。敷石は盗掘で乱され、左側壁側にわずかに残る。40cm前後の石と10cm前後の石を用いている。袖石は左袖石で幅0.4m、高さ0.92mの石を立てる。右袖石では幅0.6m、高さ0.88mの石を立てる。袖石幅1.12m、仕切石に幅0.4mの石を置く。

遺物は鉄製馬具、鉄鏃、ガラス小玉等が出土している。

羨　道

幅1.12m、中央長2.08mでほぼ直線的に延びる。両側壁の石積みは3段分残るが、石の大きさも不揃いで積み方も雑である。敷石は2面確認できた。上面は10～40cmの石を密に敷く。下面には5～8cmの小石を敷く。羨道部埋土は下から炭化物を含む赤色土、暗褐色土が堆積していた。

墓　道

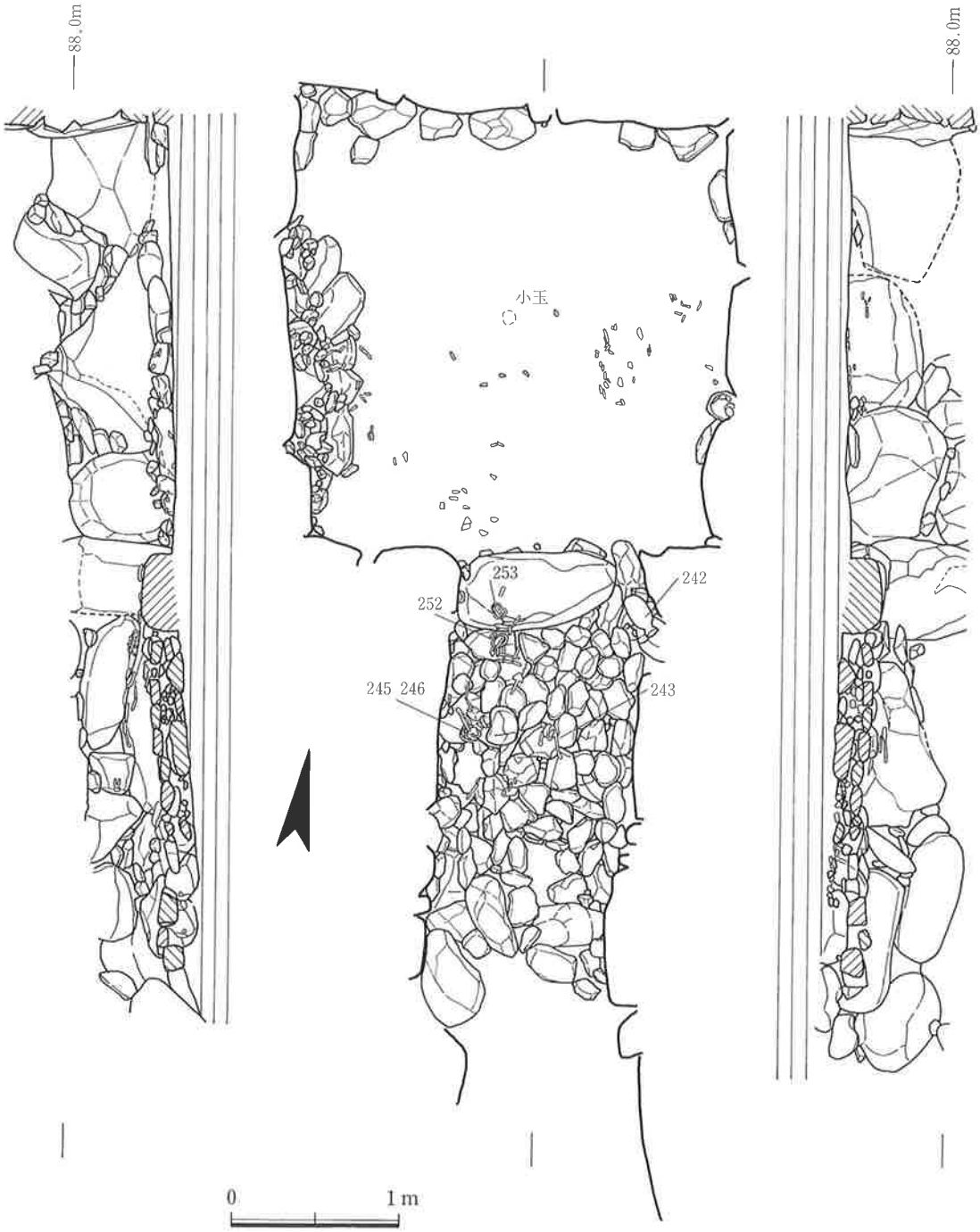


図35　3号墳遺物出土状況

墓道は1.8mほど確認できたが、南側は大きく削られており、残存部では谷部に向けて緩やかに傾斜する。

閉塞石

羨道から墓道にかけて30～50cmの扁平な石を積む。隙間には小石を充塡する。羨道部では厚く密に積む。須恵器提瓶、鉄製馬具、鉄鏃が出土した。墓道側では薄く、まばらで積み方も雑である。閉塞石内には黒色の灰層が認められ、また、須恵器坏、甕、高坏等、丹塗りの土師器高坏等が出土している。墓前祭祀に関わるものであろう。

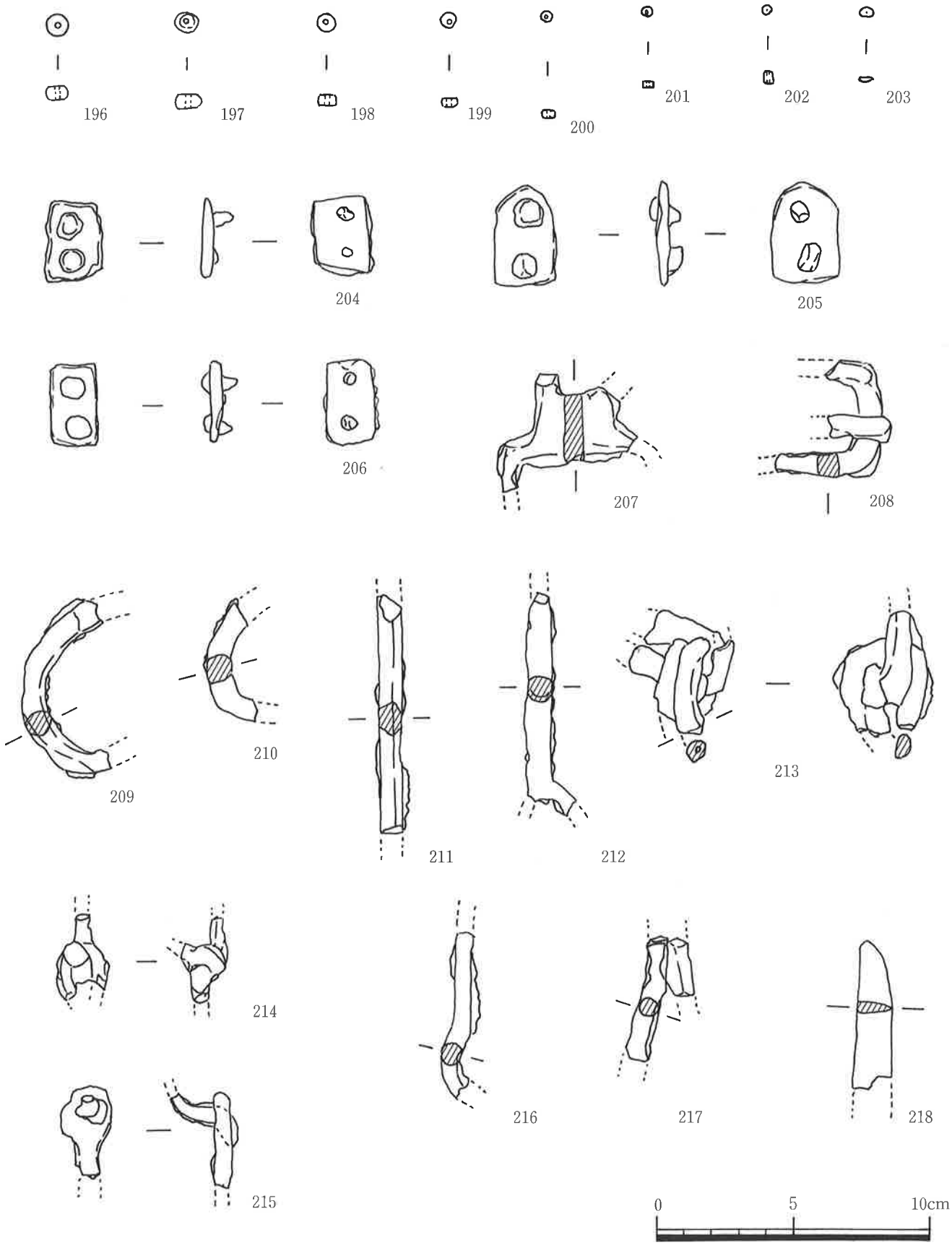


図36　3号墳出土遺物(1)

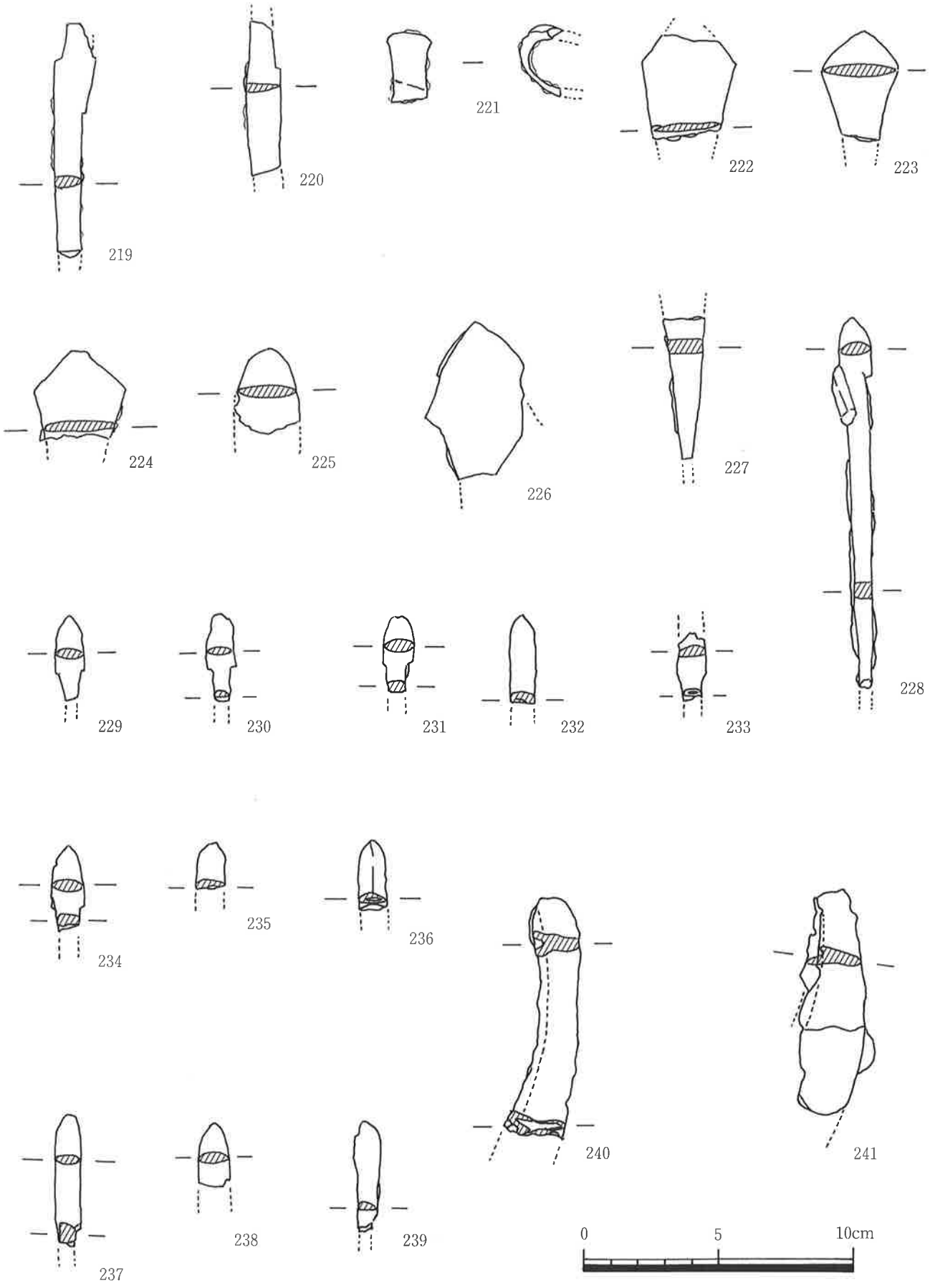


図37　3号墳出土遺物(2)

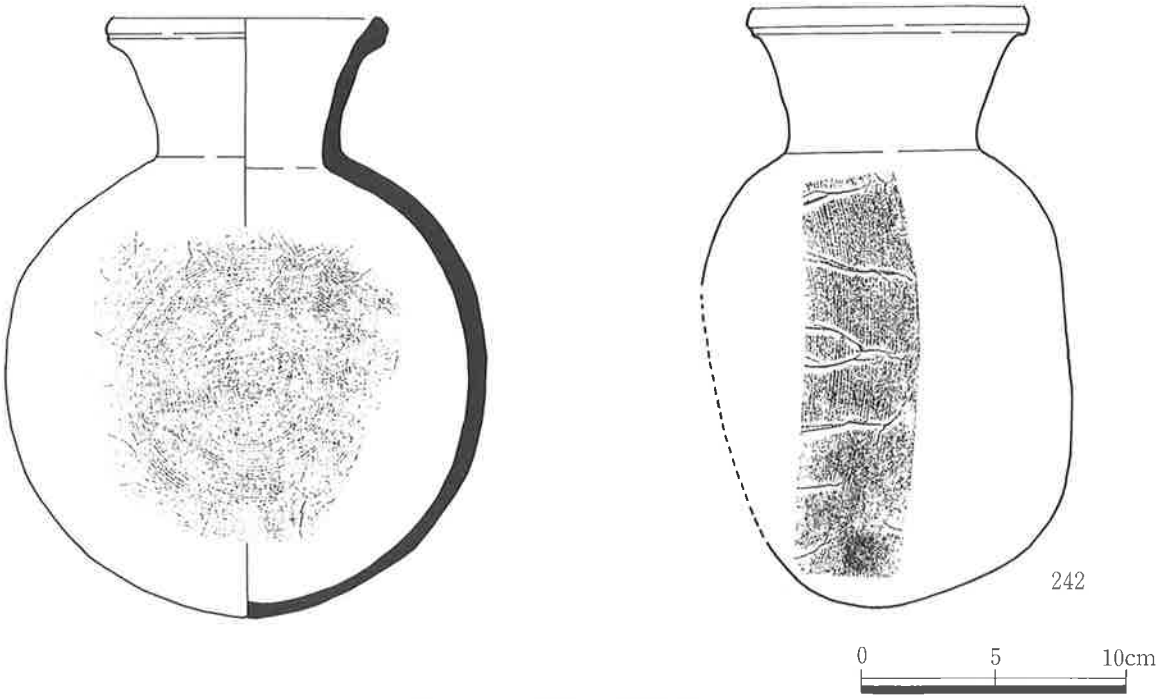


図38　3号墳出土遺物(3)

石室掘り方

斜面に直交して掘られているものと思われる。

（4）遺　物

玄室内出土遺物（図36、37）

装身具

小　玉（196～203）

196は高さ0.6cm、直径0.8cm、濃青色。197は高さ0.5cm、直径0.9cm、濃青色。198は高さ0.5cm、直径0.7cm、無色。199は高さ0.3cm、直径0.6cm、青色。200は高さ0.2cm、直径0.4cm、濃青色。201は高さ0.2cm、直径0.4cm、濃青色。202は高さ0.4cm、直径0.3cm、濃青色。203は高さ0.2cm、直径0.5cm、青色。

鉄　器

馬　具（204～217）

204～206は飾金具。204は長さ3.0cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm。鋲を2個打つ。205は長さ3.6cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm。206は長さ3.0cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。207は立聞付鏡板の破片。208は絞具。209、210は環状の金具。鏡板か。211、212は引手金具、或いは銜のものか。213～215は金具の連結部の残片。216、217は兵庫鎖の一部と思われる。

武　器

刀　子（218～221）

218～220は刀子と思われる。218は切先。残存長5.2cm。219、220は刀身部から茎部にかけての破片。219は残存長8.6cm。220は残存長5.5cm。221は刀装具と思われる。

鉄　鏃（222～239）

222～224は鏃身部の破片で圭頭形を呈する。両丸造。225は鏃身部の破片で両丸造。226は鏃身部の破片で三角形を呈する。227は鏃身部で刃部を欠く。228～239は長頸鏃。228は鏃身部が三角形を呈す

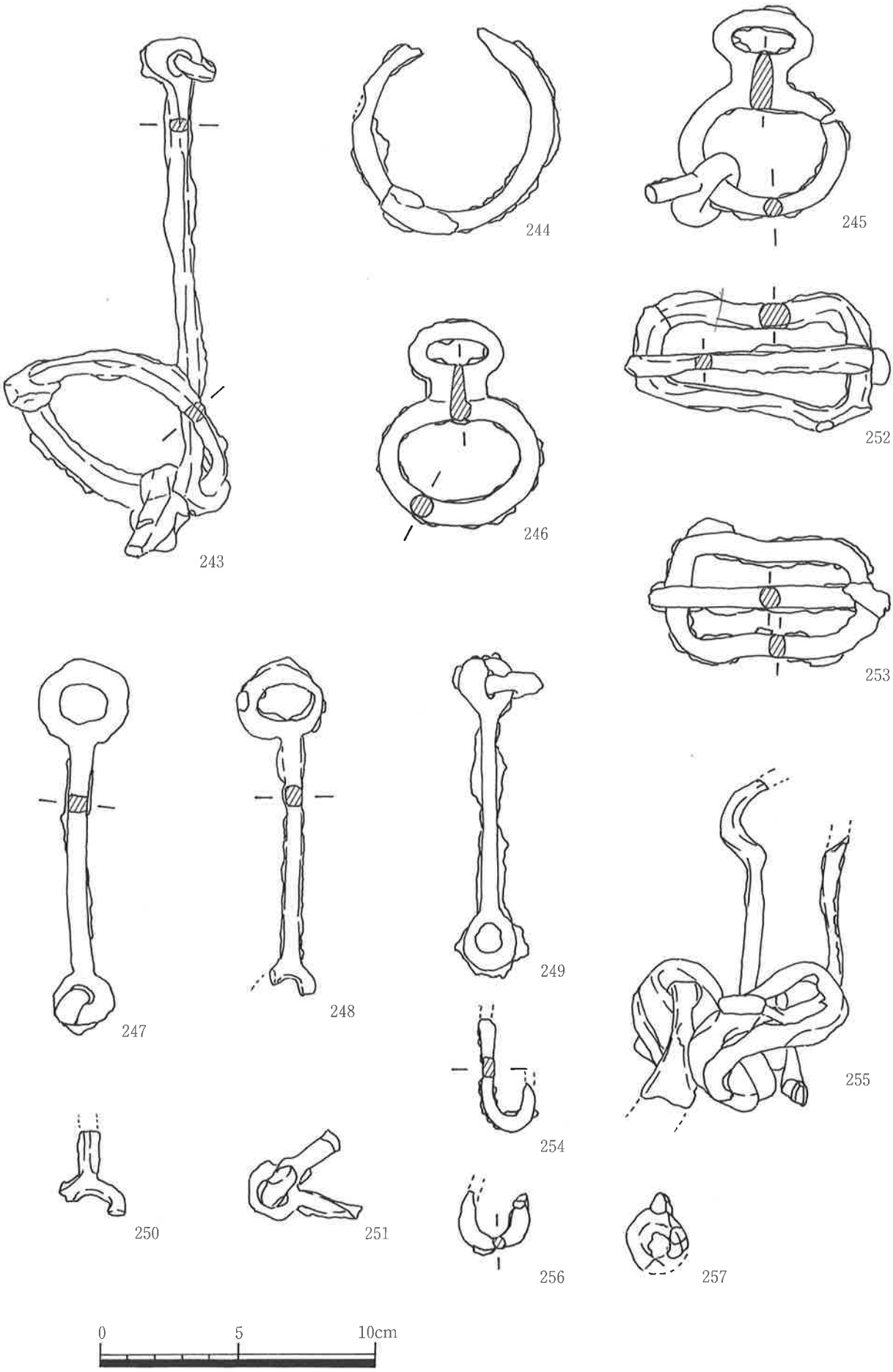


図39　3 号墳出土遺物(4)

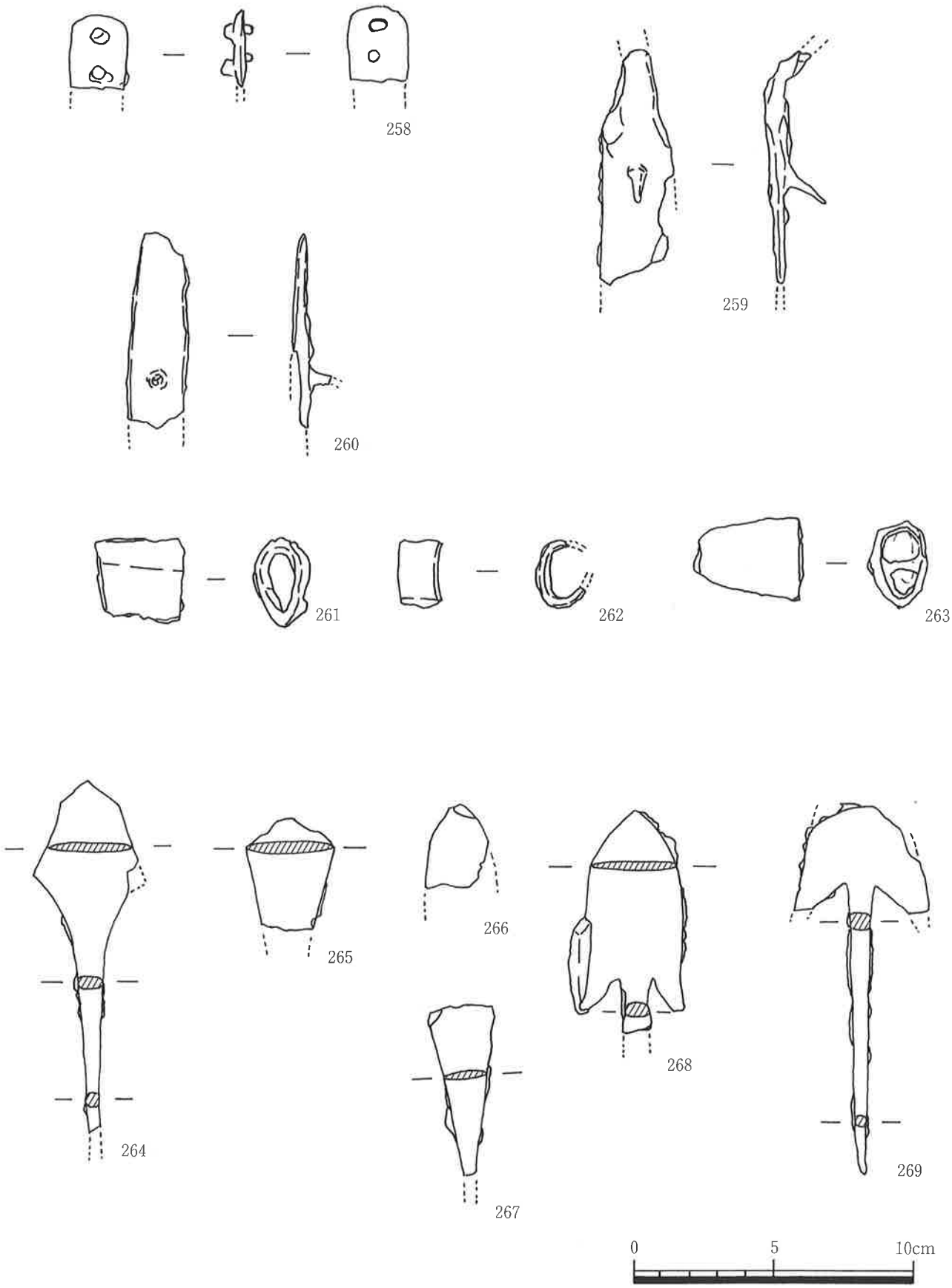


図40　3号墳出土遺物(5)

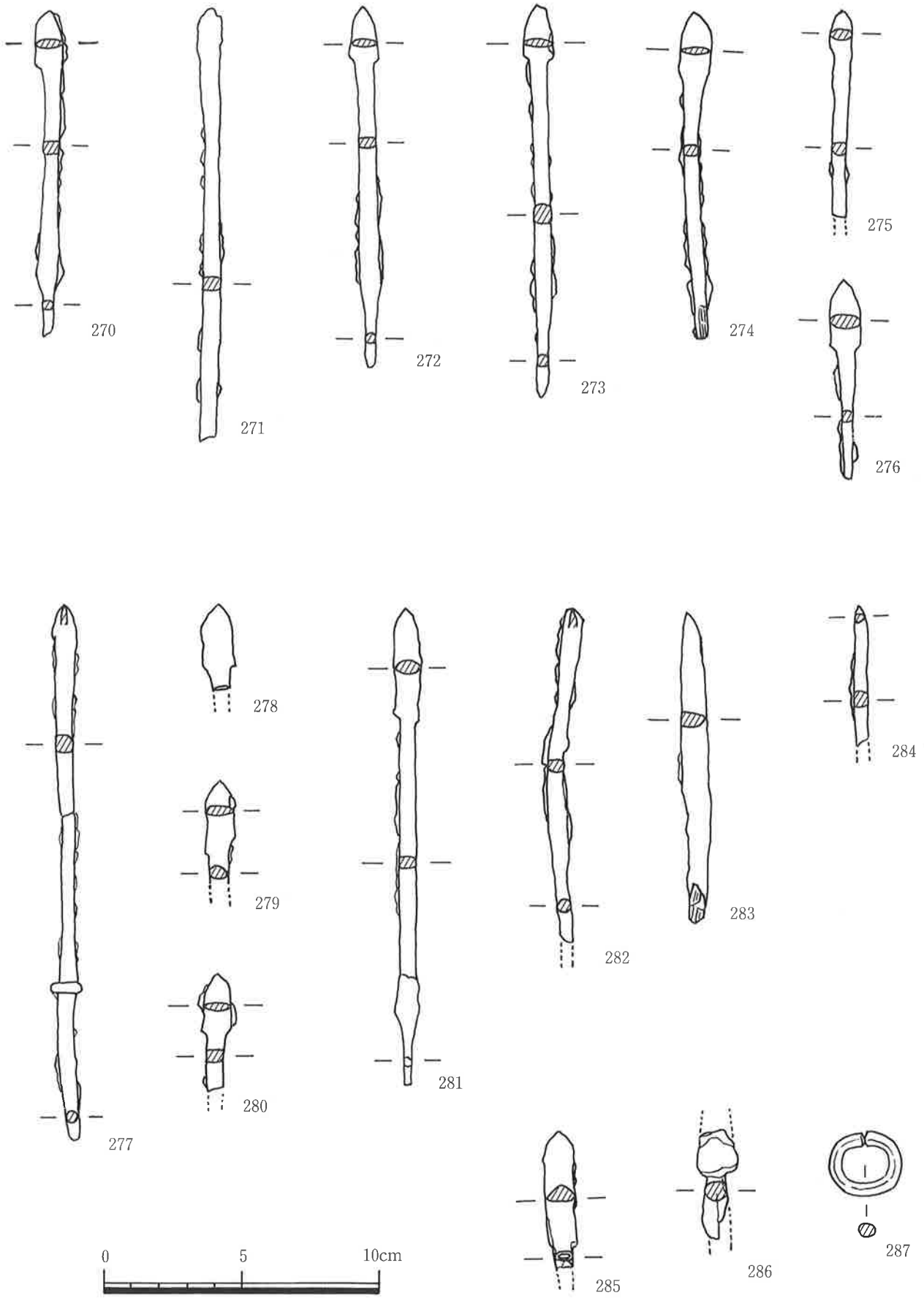


図41　3号墳出土遺物(6)

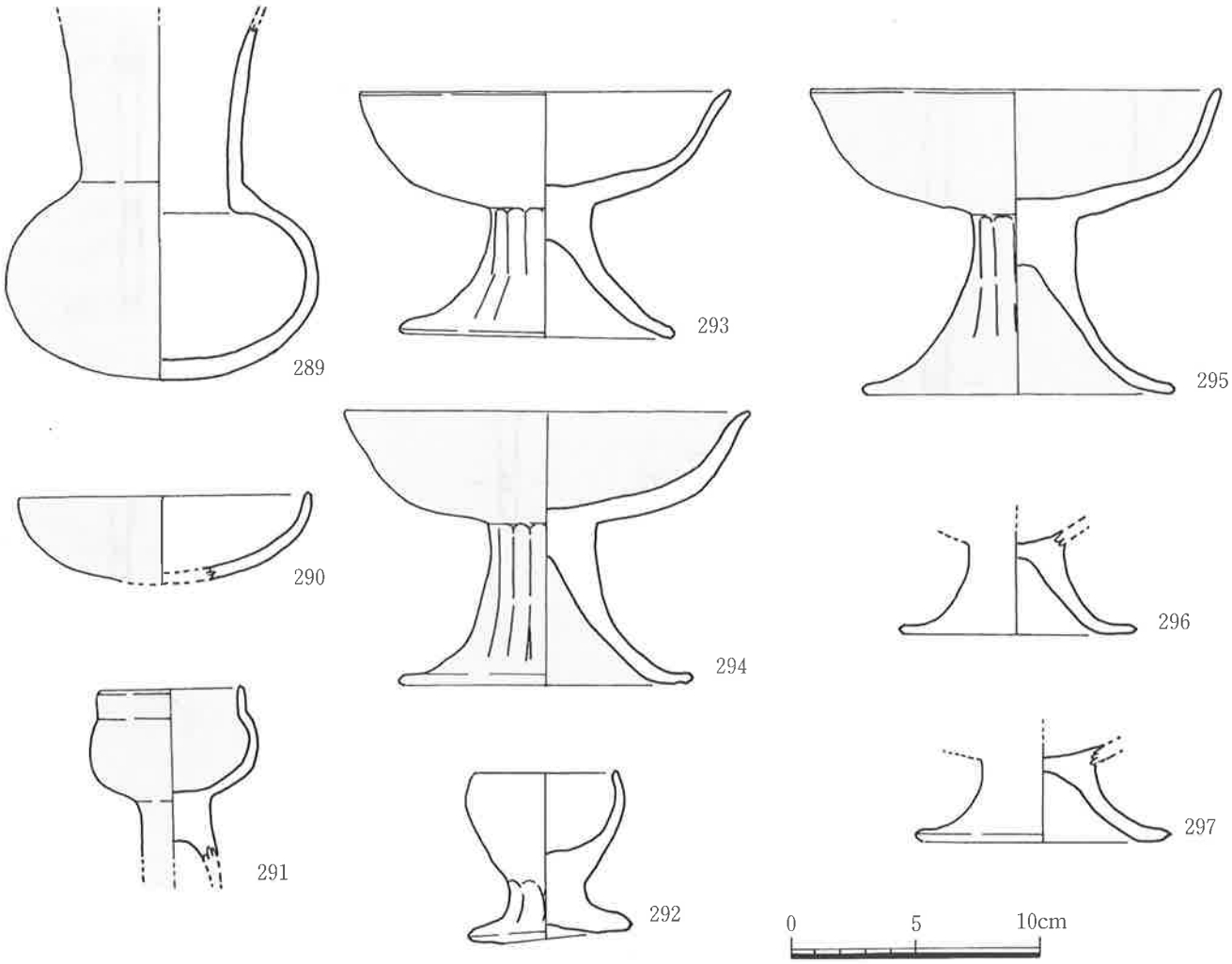


図42　3号墳出土遺物(7)

る。残存長13.6cm、重さ22g。229～239は鏃身部の破片。229～232は鏃身部が三角形を呈す。両丸造。233～238は鏃身部が長三角形を呈する。233～236は片丸造。237、238は両丸造。239は片刃造。

農　具

鋤　先（240、241）

鋤先で同一のものの可能性がある。240は残存長9.0cm。241は8.4cm。

羨道内出土遺物（図38、39、40、41）

土　器

須恵器

提　瓶（242）

球形の体部から口頸 部は大きく開き、口縁部は肥厚する。口縁部に沈線が1条巡る。つり手は付かない。前面はカキ目調整。口頸部は内外面ともナデ。口径10cm、体部最大径18.2cm、器高22.8cm、灰色。

鉄　器

馬　具

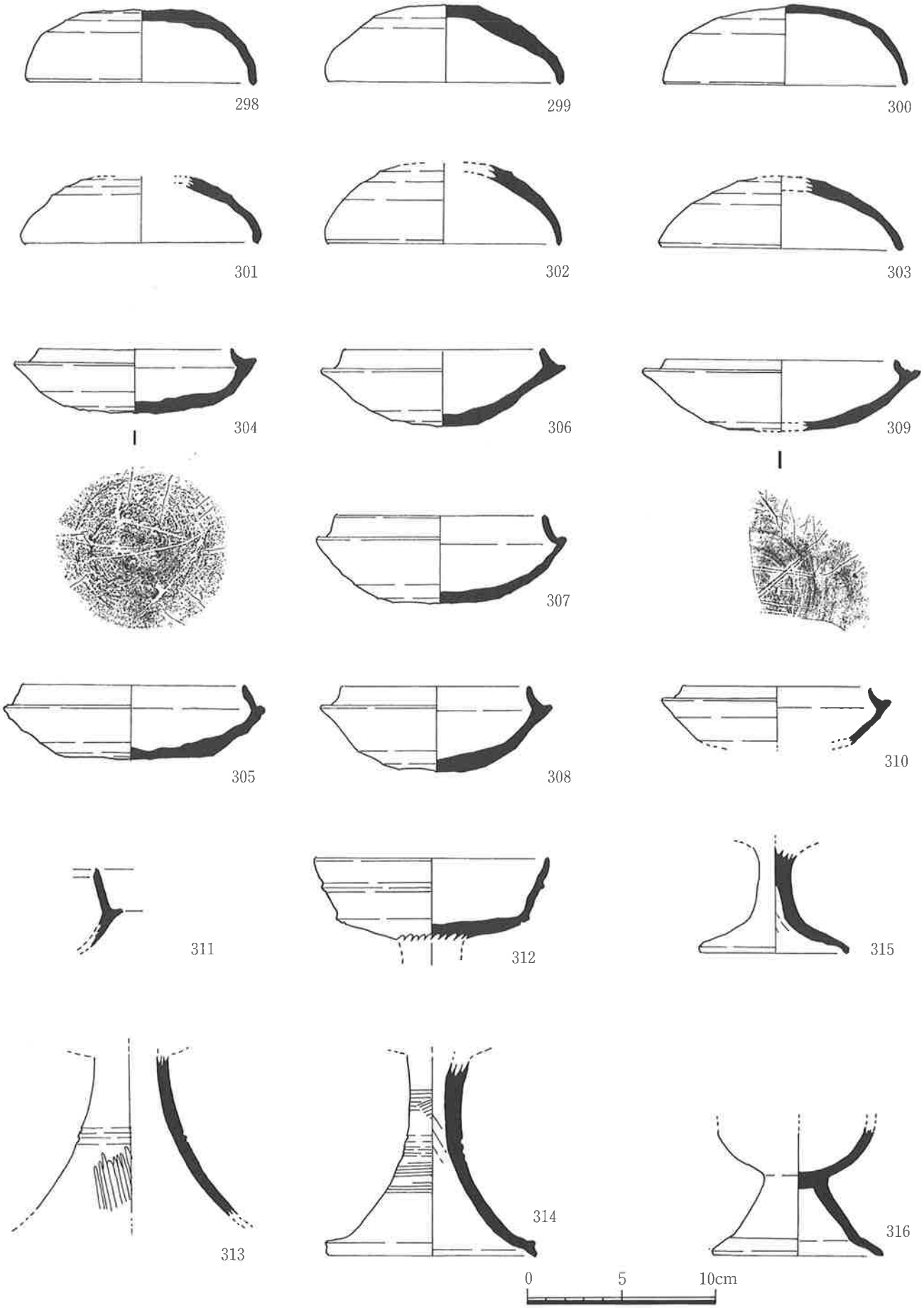


図43　3号墳出土遺物(8)

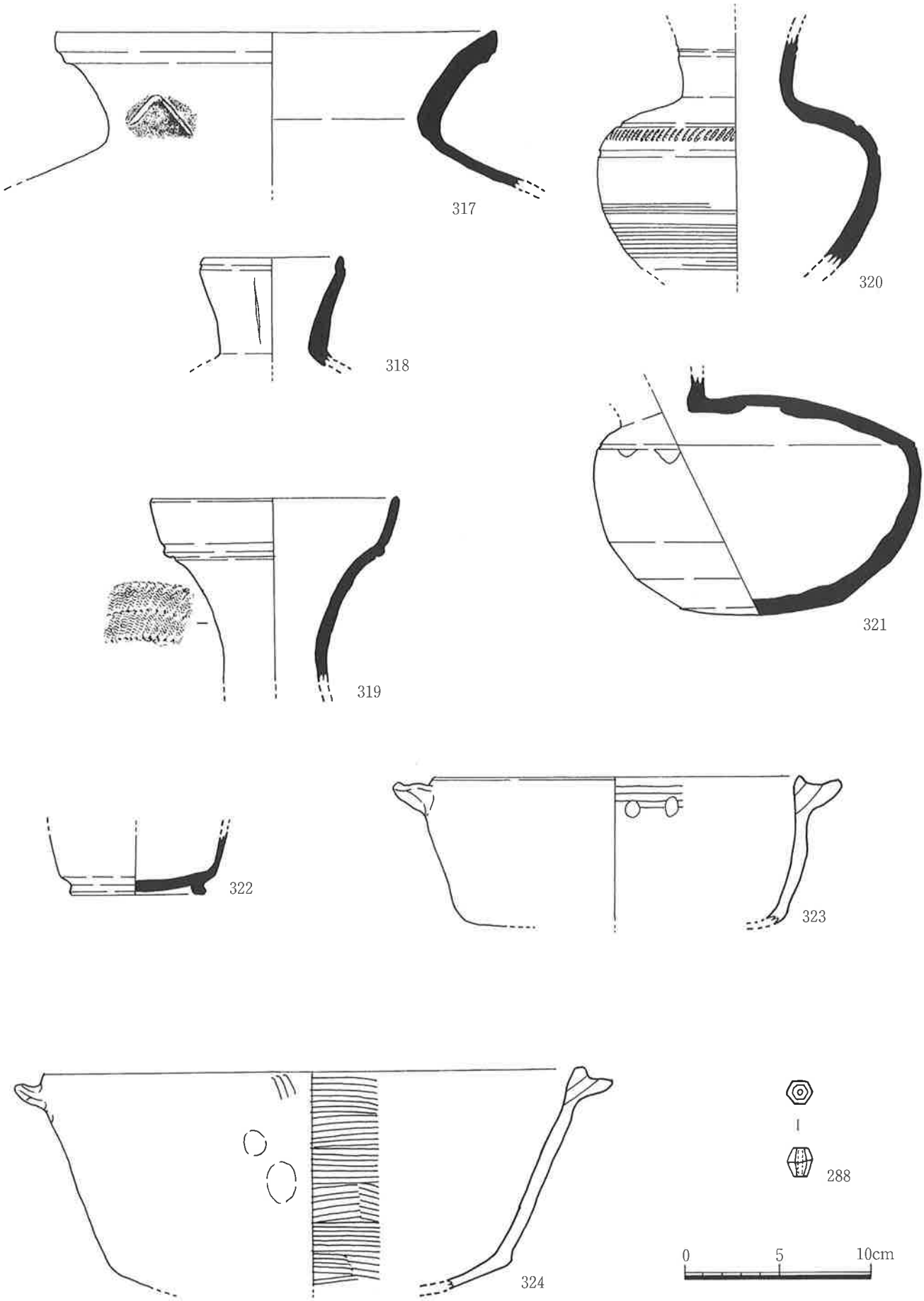


図44　3号墳出土遺物(9)、1号土坑出土遺物

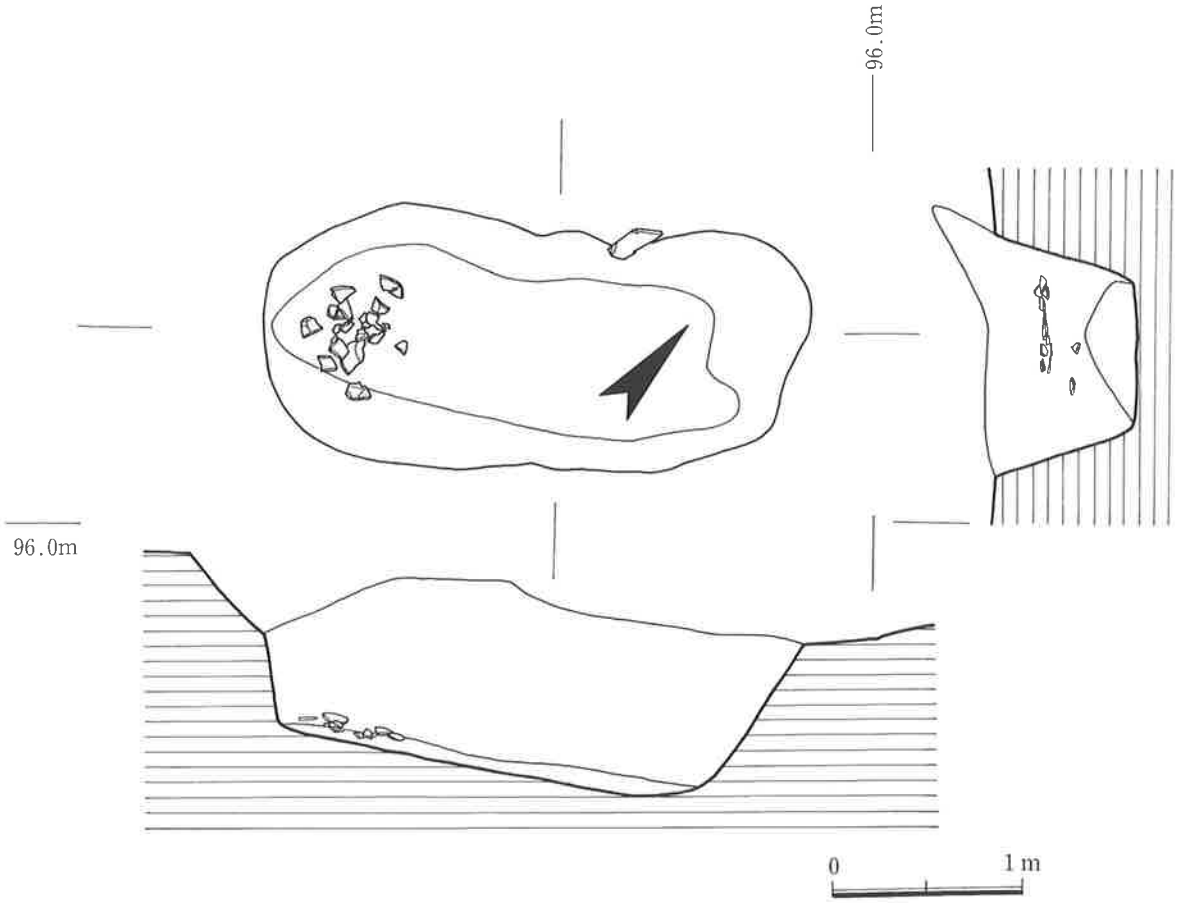


図45　1号土坑出土遺物

轡（243～251）

243は素環状鏡板付轡で引手金具と銜の一部が残る。鏡板の直径8.0cm。引手金具の長さ17.2cm。244は素環状鏡板。直径7.4cm。243と244は対のもの。245と246は楕円形立聞付の環状鏡板。鏡板は楕円形。245は長径5.8cm、短径4.4cm、高さ3.0cm、幅3.6cm の立聞がつく。断面は円形。246は長径6.0cm、短径4.6cm、高さ2.6cm、幅3.8cm の立聞がつく。断面は円形。247～251は銜。

247は長さ13.2cm。断面は方形。249は残存長12.2cm。断面は方形。~~249~~250は長さ1.2cm。251は連結部のものである。245・246・247・248・249・250・251は一連のもの。

絞　具（252、253）

252は長さ9.8cm、重さ53g。253は長さ8.6cm、重さ74g。その他254～257は馬具の一部と思われる。

武　器

刀装具

261、262は責金具。262は完形。重さ30g。263は石突。完形。重さ32g。

鉄　鏃（264～286）

264は鏃身部が三角形のもの。両丸造。残存長12.3cm、重さ22g。265は鏃身部が圭頭形のもの。両丸造。残存長3.9cm。266は鏃身部の破片。267は鏃身部が方頭形のもの。両丸造。残存長8.0cm、重さ9g。268、269は鏃身部が腸抉三角形のもの。268は残存長7.8cm。両丸造。25g。269は残存長13.9cm、重さ25g。

270～285は長頸鏃。270～280は鏃身部が三角形を呈する。270は両丸造。残存長11.7cm、重さ13g。271は残存長15.7cm、重さ11g。272は両丸造。残存長13.0cm、重さ10g。273は両丸造。残存長11.7cm、重さ10g。274は両丸造。木質が残る。残存長11.8cm、重さ10g。275は両丸造。残存長7.4cm。276

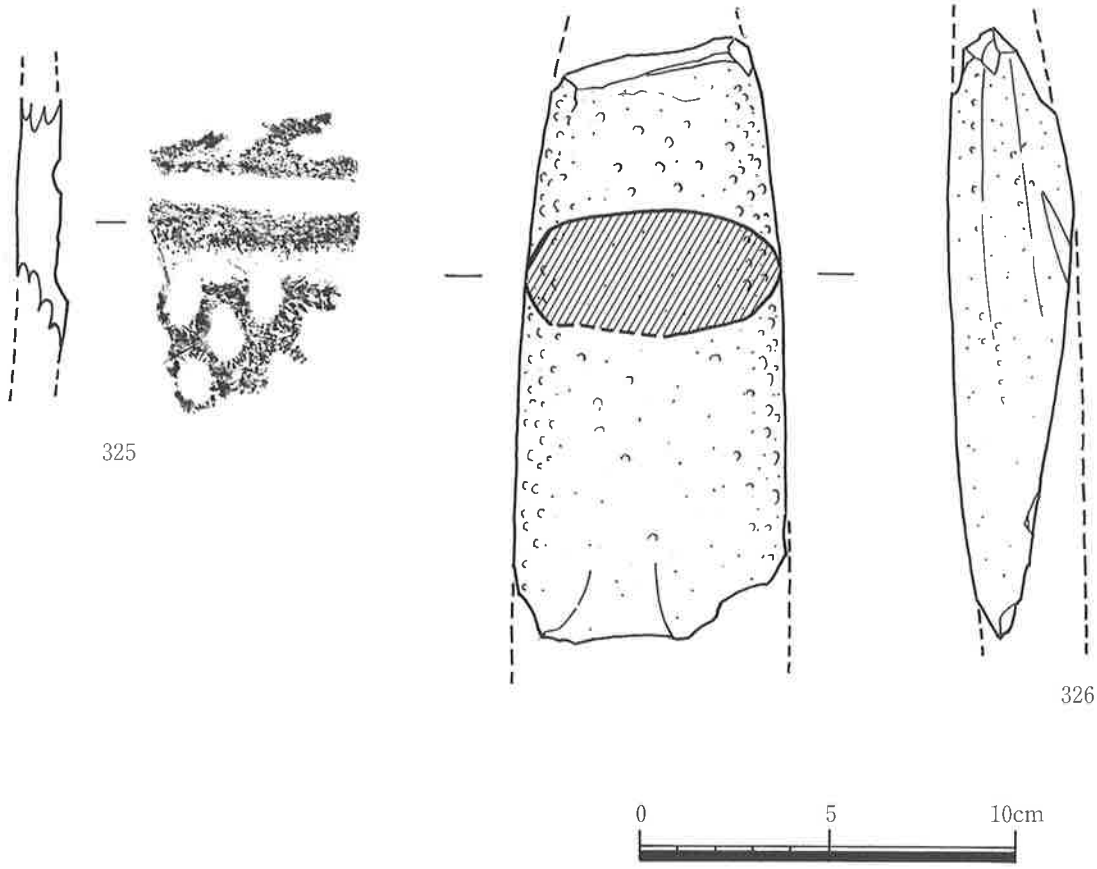


図46　その他の出土遺物

は両丸造。残存長7.4cm。277は完形。全長19.2cm、重さ18g。棘状の関部を有する。278～280は鏃身部。278は残存長3.0cm。両丸造。279は残存長3.6cm。両丸造。280は残存長4.2cm。両丸造。281、282は鏃身部が長三角形を呈する。281は完形のもので全長13.9cm。両丸造。282は残存長4.9cm。片鎬造。283～285は片刃鏃。283は残存長11.8cm、重さ12g。284は残存長11.1cm。重さ10g。木質が残る。285は残存長5.1cm。

その他286は一部銅が残るが、形状は不明。

墓道内出土遺物（図41、42、43、44）

装身具

耳　環（287）

短径2.2cm、長径2.6cm、重さ８g。銅芯。

土　器

土師器

壷（289）

扁平な体部にやや外反しながらのびる口縁部を有する直口壷。口縁部を欠く。外面は丹塗り。体部外面はヘラミガキ。内面はナデ。口頸部内外面はナデ。残存高14.1cm。

坏（290）

丸味のある底部に口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。一部黒色の顔料が残る。内外面ともナデ。

復原径11.6cm、残存高3.4cm。

台付壷（291）

小型のもので脚付きの短頸壷であるが、脚部から裾部を欠く。丹塗り。脚部及び壷の体部上部外面はヘラミガキ。他はナデ。口径5.8cm。残存高6.9cm。

高　坏（292～297）

292は小型の手捏ねのもの。内外面ともナデ。口径5.6cm、器高6.6cm、裾部径6.8cm、橙色。293～295は口径の大きな坏部に短い脚部が付く。坏底部は丸味をもち、体部はやや内湾しながら開き、口縁部でわずかに反る。口縁端部は丸く収める。脚部は太く裾部は大きく開く。坏部は内外面ともナデ。脚部は外面ヘラケズリ。内面はナデ。293は口径14.8cm、器高9.7cm、裾部径11.2cm、橙色。294は16.2cm、器高11.0cm、裾部径12.0cm、橙色。295は口径16.2cm、器高12.1cm、裾部径12.4cm。丹塗り。296、297は脚部の破片。脚部は太く、短い。裾部は大きく開く。296は裾部径9.4cm、残存高4.1cm。丹塗り。297は裾部径10.0cm、残存高3.7cm、茶白色。

須恵器

坏　蓋（298～303）

298は天井部が平坦である。口径11.8cm、器高3.8cm。内面ナデ。外面上部はヘラケズリのちナデ。内面灰色。外面茶褐色。299～303は全体的に丸味を帯びる。299は口径12.4cm、器高4.0cm。内外面ともナデ。内面茶白色。外面茶橙色。300は口径13.6cm、器高4.2cm。天井部上部外面はヘラケズリ。他はナデ。茶灰色。301は復元径12.4cm、残存高3.5cm。天井部外面はヘラケズリ。他はヨコナデ。内面茶白色。外面茶橙色。全体の1/5残存。302は復元径12.4cm、残存高3.7cm。天井部はヘラケズリ。他はナデ。灰色。1/4残存。303は復元径12.4cm、残存高4.1cm。天井部はヘラケズリ。他はナデ。灰色。1/5残存。

坏　身（304～311）

304、305は器高が浅く、立ち上がりが短いもの。304は口径12.4cm、器高3.4cm。底部外面はヘラケズリ。他はナデ。1～2 mm大の砂粒を含む。ヘラ記号を有する。茶白色。305は復元径11.8cm、器高3.9cm。底部外面はヘラケズリ。板状圧痕が残る。他はナデ。1～2 mmの砂粒を含む。灰色。1/4残存。306～308は器高が深く、立ち上がりが長いもの。306は口径11.2cm、器高4.0cm。底部外面はヘラケズリ。他はヨコナデ。1～3 mm大の砂粒、1 cm大の小石を含む。全体の1/4を欠く。内面茶色。外面灰色。307は口径11.0cm、器高4.5cm。底部外面はヘラケズリ。他はナデ。1～2 mm大の砂粒を含む。口縁部の一部を欠く。小豆色。308は口径10.0cm、器高4.5cm。全体にナデ。1～3 mm大の砂粒。また、7 mm大の小石を含む。内面茶色。外面灰色。309は復元径12.0cm、残存高3.8cm。外面はヘラケズリ。他はナデ。1～2 mm大の砂粒を含む。灰色。1/4残存。310は復元径10.0cm、残存高3.9cm。外面はヘラケズリ。他はナデ。内面灰褐色。外面灰色。1/4残存。311は立ち上がりが長く直線的にのびる。端部には段が付く。残存高4.0cm。内外面とも灰色。

高　坏（312～316）

312は坏部。外面に断面三角形の突帯を巡らす。口径12.2cm、残存高4.3cm。内外面ともヨコナデ。灰色。1/2程度残存。313は脚部のもの。外面中央に2条の沈線を巡らす。残存高7.9cm、灰色。314は脚部から裾部にかけてのもの。残存高10.2cm、裾部径10.8cm。脚部外面中央には3条の沈線を巡らし、その上下にカキ目を施す。内面はナデ。1～2 mm大の砂粒を含む。茶色。315は脚部から裾部にかけてのもの。残存高5.4cm、裾部径7.6cm。内外面ともナデ。1～2 mm大の砂粒を含む。黒灰色。316は丸味を帯びた坏部に太く、短い脚部が付く。灰色、一部黒斑。

甕（317）

復元径23.1cm、残存高8.0cm。内外面ともヨコナデ。内面には青海波文が残る。1～4mm大の砂粒を含む。黒灰色。一部灰釉がかかる。

提　瓶（318）

口頸部のもの。復元径7.8cm。ヨコナデ。残存高5.7cm。1～2mm大の砂粒を含む。灰色。

瓶（319、320）

319は口頸部のもの。口径13.0cm、残存高9.7cm、灰色。320は体部から頸部にかけてのもの。残存高12.4cm。内面はヨコナデ。外面はヨコナデ、カキ目。灰色。

横　瓶（321）

口頸部を欠く。残存高12.5cm。内面ヨコナデ。外面下半部ヘラケズリ。灰釉がかかる。1～2mm大の砂粒を含む。

坏（322）

高台が付く。底径7.2cm、残存高3.2cm。内外面ともナデ。灰白色。

表土出土遺物（図44）

装身具

切小玉288は高さ1.6cm、直径1.3cm。

2　中　世

1．土　坑

1号土坑（図45）

2号墳の墓道を切る。平面形が楕円形を呈し、床面はほぼ平坦である。長径1.4m、短径0.64m、深さ0.44mである。埋土は黄色砂質土である。土坑北西部から土鍋2点が伏せられ重ねた状況で出土した。

出土遺物

土師質土器（図44）

土　鍋（323、324）

いずれも外耳形把手付の土鍋である。323は口径19.2cm、残存高7.9cm。内面は横方向のハケ目。指頭圧痕が残る。外面には煤が付着している。全体的に摩滅しており、底部を欠く。1～3mm大の砂粒を多く含む。324は口径28.8cm、残存高11.7cm。内面は横方向のハケ目。外面には指頭圧痕が残る。外面全面に煤が付着する。1～3mm大の砂粒を多く含む。底部を欠く。

3　その他の出土遺物（図46）

縄文土器片1点（325）、大型蛤刃石斧1点（326）、寛永通宝1点が3号墳の表土中から出土している。

V まとめ

今回の調査によって３基の古墳を発掘したがその成果についてまとめてみたい。これらの古墳は愛宕山から派生する丘陵の祇園川に面する東斜面上に位置している。いずれも早くから開口し盗掘を受けていた。石室は南側の谷部に向けて開口している。１号墳は単室両袖型の横穴式石室を持つ。ほぼ方形の玄室に短い羨道がつく。羨道中央部に仕切石があり、玄室側に敷石が認められる。羨道には閉塞石を積む。遺物は玄室内からわずかに鉄刀片、鉄鏃片が出土したのみである。２号墳は副室両袖型横穴式石室を内部主体とする。大型の石材を用いたもので町内では姫御前古墳が知られる。同じ副室を備えた横穴式石室を持つ古墳は近隣では三日月町の織島東分古墳Ａ－２号墳や多久市の小城炭坑跡古墳が知られる。しかし、規模の点ではこの２号墳が両古墳を凌駕している。玄室内は盗掘を受け副葬品は出土していない。前室内も荒らされほとんど副葬品は出土していない。羨道内からは２次にわたる追葬が確認できた。１次は砥石を中心に夥しい数の長頸鏃群を主体とする鉄鏃等の鉄製武器及び鉄製馬具を副葬したものである。砥石を副葬した例は近隣では織島東分下遺跡10号墳がある。２次は羨道左側壁側に須恵器が副葬されている。これらの須恵器は７世紀前半に位置付けられるものである。２号墳南側の道路下からは石室内から掻き出されたものと思われる６世紀末の須恵器が出土している。２号墳については６世紀末に造営され、７世紀中頃まで使用されたものと思われる。３号墳は単室両袖型の横穴式石室である。羨道では２次に渡る敷石が認められる。１次では玉石を敷く。遺物は認められない。２次ではこぶし大の石を敷き閉塞石を積む。鉄製馬具、鉄鏃が出土している。前庭部の閉塞石内からは墓前祭祀に伴う土師器、須恵器が出土している。６世紀末～７世紀中頃に位置づけられるものである。

これら３基の古墳はいずれも６世紀末～７世紀中頃にかけて営まれたものであり、今回の調査により祇園川上流部における古墳時代の様相の一端が明らかにできたと思われる。

また、１号土坑については出土した土鍋から16世紀に位置づけられるものであろう。

参考文献

① 三日月町教育委員会『織島西分遺跡群Ｉ』三日月町文化財調査報告書第３集　1983

② 佐賀県教育委員会「小城炭坑跡古墳」『東多久バイパス関係埋蔵文化財関係調査報告書』佐賀県文化財調査報告書第76集　1984

③ 三日月町教育委員会『織島東分下遺跡群Ｉ』三日月町文化財調査報告書第５集　1990

④ 舟山良一「３須恵器の編年　九州」『古墳時代の研究６』雄山閣　1991

⑤ 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集第８集』橿原考古学研究所編　昭和63年

⑥ 宮代栄一・白木原宜「佐賀県出土の馬具の研究」『九州考古学研究第69号』1994

⑦ 徳永貞紹「肥前における中世後期の在地土器」『中世土器の基礎的研究Ⅳ』真陽社　1990

表２　出土土器観察表

図版番号	登録番号	器種	出土遺構	法　量	色　調	調　整	胎　土	残存状況	ヘラ記号
２号墳									
土師器									
5	0001	坏	玄　室	口径15.1底径11.0器高3.0	茶白色	糸切り離し	精良	１/４残存	
12	0002	高　坏	前　室	口径9.2裾部径7.0器高8.0	橙色	内面ナデ外面ハケ目手捏	精良	完形	
62	0007	坏	羨　道	口径11.4器高4.3	橙色	内面ナデ外面ナデ	精良	１/６程度欠損	
63	0008	高　坏	羨　道	口径10.2器高8.4裾部径8.2	橙色丹塗り	内面ナデ外面ヘラケズリ後ナデ	精良	坏部１/４欠損脚部一部欠損	
64	0009	高　坏	羨　道	口径10.8器高8.1裾部径8.2	橙色丹塗り	内面ナデ外面ヘラケズリ後ナデ	精良	坏部１/４欠損脚部一部欠損	
瓦　器									
16	0006	皿	前　室	口径10.2器高2.1	灰色一部黒斑	底部糸切り離し板状圧痕	1~2mm大の砂粒を含む	ほぼ完形口縁部の一部欠損	
須恵器									
13	0003	瓶	前　室	口径10.5器高12.2	灰色	ヘラケズリ後ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	完形	
14	0004	高　坏	前　室	口径11.6器高14.8部径10.4	灰色外面一部黒色	ナデ及びカキ目	1~2mm大の砂粒を含む	坏部１/４欠損脚部一部欠損	
15	0005	甕	前　室	口径17.3器高＜4.5＞	内面灰白色外面黒灰色	ナデ	1~3mm大の砂粒を含む	口縁部１/８残存	
65	0010	壺	羨　道	口径5.8器高6.2	黒灰色	ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	完形	
66	0011	坏　蓋	羨　道	口径9.8器高2.9	灰色	天井部外面ヘラ切り離し他はナデ	1~2mm大の砂粒を含む	完形	
67	0012	坏　蓋	羨　道	口径10.0器高2.9	灰色	天井部外面ヘラケズリ他はナデ	1~2mm大の砂粒を含む	完形	
68	0013	坏　蓋	羨　道	口径10.0器高3.0	灰色	天井部外面ヘラケズリ他はナデ	1~2mm大の砂粒を含む	完形	
69	0014	坏　蓋	羨　道	口径10.4器高3.2	灰色	天井部外面ヘラケズリ他はナデ	1~4mm大の砂粒を含む	完形	
70	0015	坏　蓋	羨　道	口径10.0器高＜1.4＞	灰色	ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	天井部外面剥離	
71	0016	坏　蓋	羨　道	口径11.2器高4.2	茶褐色	内外面ともナデ	精良	完形	有
72	0017	坏　身	羨　道	口径9.0器高3.7底部径8.2	灰色	ナデ底部外面ヘラケズリ	精良	完形	
73	0018	坏　身	羨　道	口径9.0器高3.7底部径6.6	灰色	ナデ底部外面ヘラケズリ	精良	完形	
74	0019	坏　身	羨　道	口径8.6器高3.9底部径6.6	灰色	ナデ底部外面ヘラケズリ	精良	完形	
75	0020	坏　身	羨　道	口径8.8器高3.5底部径6.4	灰白色	ナデ底部外面ヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の一部を欠損	
76	0021	坏　身	羨　道	口径9.0器高3.6底部径7.0	灰白色	ナデ底部外面ヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の一部を欠損	
77	0022	高　坏	羨　道	口径11.4器高15.7裾部径9.7	灰色	ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の一部を欠損	
78	0023	高　坏	羨　道	口径8.2器高7.6裾部径6.2	灰色	ナデ及びカキ目	精良	口縁部裾部の一部欠損	有
186	0024	坏　身	表土中	口径10.4器高＜2.5＞	灰色	ナデ	精良	口縁部の１/６残存	
187	0025	坏　身	表土中	口径11器高＜3.5＞	茶褐色	ナデ底部外面ヘラケズリ	精良	口縁部の１/４残存	
188	0026	坏　身	表土中	口径10.8器高4.2	灰色	ナデ底部外面ヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の一部を欠損	
189	0027	坏　蓋	表土中	口径12.5器高＜2.6＞	赤褐色	ナデ天井部外面ヘラケズリ	1~5mm大の砂粒を含む	口縁部の１/８残存	
190	0028	坏　蓋	表土中	口径－器高－	灰色	内面ナデ外面ヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	天井部のみ残存	有
191	0029	坏　蓋	表土中	口径－器高＜4.1＞	灰色	内面ナデ外面天井部ヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の１/５残存	有
192	0030	瓶	表土中	口径－器高＜15.8＞	灰色	内面ナデ外面天井部ヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部欠損	
193	0031	甕	表土中	口径－器高＜6.0＞	内面灰褐色外面黒灰色	ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の一部残存	
３号墳									
土師器									
289	0033	壺	墓　道	口径－器高＜14.1＞	橙色丹塗り	内面ナデ外面ヘラミガキ	精良	口縁部を欠損	

＜　＞　残存高

290	0034	坏	墓 道	口径11.6器高<3.4>	茶白色一部黒班	ナデ	精良	口縁部の1/3残存	
291	0035	台付壷	墓 道	口径5.8器高<6.9>	赤橙色	ナデ	精良	脚部を欠損	
292	0036	高 坏	墓 道	口径5.6器高6.6裾部径6.8	橙色	ナデ	精良	完形	
293	0037	高 坏	墓 道	口径14.8器高9.7裾部径11.2	橙色	ナデ及びヘラミガキ	精良	坏部の一部及び裾部の一部欠損	
294	0038	高 坏	墓 道	口径16.2器高11.0裾部径11.4	橙色	ナデ及びヘラミガキ	精良	坏部の一部及び裾部の一部欠損	
295	0039	高 坏	墓 道	口径16.2器高12.1裾部径12.0	橙色丹塗り	ナデ	精良	裾部の一部を欠く	
296	0040	高 坏	墓 道	口径－器高<4.1>裾部径9.4	茶白色	ナデ	精良	坏部のみ1/2残存	
297	0041	高 坏	墓 道	口径－器高<3.7>裾部径10.0	茶白色	ナデ	精良	坏部欠損	
須恵器									
242	0032	提 瓶	羨 道	口径10.0器高22.8	灰色	内面ナデ外面カキ目	1~2mm大の砂粒を含む	体部1/2欠損	
298	0042	坏 蓋	墓 道	口径11.8器高3.8	内面灰色外面茶白色	内面ナデ外面天井部ヘラケズリ	2mm大の砂粒を含む	口縁部の1/4残存	
299	0043	坏 蓋	墓 道	口径12.4器高4.0	内面茶白色外面茶橙色	ナデ	精良	口縁部の3/4残存	
300	0044	坏 蓋	墓 道	口径13.6器高4.2	茶白色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	精良	口縁部の3/4残存	
301	0045	坏 蓋	墓 道	口径12.4器高<3.5>	内面茶白色外面茶橙色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	精良	口縁部の1/6残存	
302	0046	坏 蓋	墓 道	口径12.4器高<3.7>	灰色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の1/5残存	
303	0047	坏 蓋	墓 道	口径12.4器高<4.1>	灰色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	精良	口縁部の1/6残存	
304	0048	坏 身	墓 道	口径12.4器高3.4	茶灰色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	ほぼ完形	有
305	0049	坏 身	墓 道	口径11.8器高3.9	内面茶色外面灰色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	1~3mm大の砂粒、1cm大の小石	口縁部の3/4残存	
306	0050	坏 身	墓 道	口径11.2器高4.0	灰色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部1/4残存	
307	0051	坏 身	墓 道	口径11.0器高4.5	赤褐色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の一部欠損	
308	0052	坏 身	墓 道	口径10.0器高4.5	灰色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ板状圧痕	1~2mm大の砂粒を含む	口縁部の1/4残存	
309	0053	坏 身	墓 道	口径12.0器高3.8	内面茶褐色外面灰色	ナデ	1~3mm大の砂粒、7mm大の砂粒を含む	完形	
310	0054	坏 身	墓 道	口径10.0器高<3.9>	内面灰褐色外面灰色	内面ナデ外面ナデ及びヘラケズリ	精良	口縁部の1/4残存	
311	0055	坏 身	墓 道	口径－器高<4.0>	灰色	ナデ	黒色の微少な砂粒を含む		
312	0056	高 坏	墓 道	口径12.2器高<4.3>	灰色	ナデ	精良	坏部のみ残存	
313	0057	高 坏	墓 道	口径－器高<7.9>	灰色	ナデ	精良	脚部のみ残存	
314	0058	高 坏	墓 道	口径－器高<10.2>裾部径10.8	茶色	ナデ及びカキ目	1~2mm大の砂粒を含む	脚部から裾部にかけて残存	
315	0059	高 坏	墓 道	口径－器高<5.4>裾部径7.6	内面赤褐色外面灰色	ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	脚部から裾部にかけて残存	
316	0060	高 坏	墓 道	口径－器高<6.5>	灰色一部黒班	ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	坏の上半部と裾部1/4を欠く	
317	0061	甕	墓 道	口径23.1器高<8.0>	黒灰色	内面ナデ青海波文外面ナデ	1~4mm大の砂粒を含む	口縁部のみ残存	
318	0062	提 瓶	墓 道	口径7.8器高<5.7>	灰色	ナデ	1~2mm大の砂粒を含む	口頸部のみ残存	
319	0063	瓶	墓 道	口径13.0器高<9.7>	灰色	ナデ	精良		
320	0064	瓶	墓 道	口径－器高12.4	灰色	ナデ及びカキ目	精良		
321	0065	平 瓶	墓 道	口径－器高12.5	灰色自然釉	ナデ外面下半部ヘラケズリ	1~2mm大の砂粒を含む	体部のみ残存	
322	0066	高台付坏	表土中	口径－器高<3.2>底径7.2	灰色	ナデ	精良	底部のみ残存	
1号土坑									
土師質土器									
323	0067	土 鍋	床 面	口径19.2器高<7.9>	内面茶白色外面黒色	内面横方向のハケ目外面不明	1~3mm大の砂粒を含む	底部を欠損	
324	0068	土 鍋	床 面	口径28.8器高<11.7>	茶白色	内面横方向のハケ目外面ナデ指押え	1~3mm大の砂粒を含む	底部を欠損	

表3　出土鉄鏃観察表

図版番号	登録番号	出土遺構	鏃身最大幅(cm)	鏃身長(cm)	頸部長(cm)	茎部長(cm)	全長・残存長(cm)	重量(g)	残存状況	特徴	型式	備考
1号墳												
4	2004	玄室	1.1				7.8		鏃身から頸部	平造	長頸鏃群BⅣ4	
2号墳												
55	2022	前室	1.8				13.3	20	ほぼ完形	平造	方頭鏃群B13B	
56	2023	前室	2	7.4			8.9	15	茎部欠損	平造	方頭鏃群B14	
57	2122	羨道	2.8				4.9		鏃身	平造	方頭鏃群BⅠ	
58	2121	羨道	3.4				6.5		鏃身	平造		
99	2039	羨道	4.2	7			11.4	20	茎部欠損	平造	圭頭鏃群BⅡ	
100	2125	羨道	3						鏃身と茎部欠損	平造	圭頭鏃群BⅡ	
101	2123	羨道	3.2	8.2		6.4	13.9	32	鏃身の先端を欠く	平造	圭頭鏃群BⅡ	
102	2040	羨道	3.4	7.6			11.4	27	茎部欠損	平造	圭頭鏃群BⅡ	
103	2126	羨道	3	8.4			10.8	24	鏃身先端と茎部欠損	平造	圭頭鏃群BⅡ	
104	2041	羨道	3.8	8.4			9.4	34	鏃身先端と茎部欠損	両丸造	圭頭鏃群BⅡ	
105	2042	羨道	3.2				8		鏃身	片丸造	圭頭鏃群B	
106	2043	羨道	3.4				6.8		鏃身	片丸造	圭頭鏃群B	
107	2044	羨道	3.2				4.6		鏃身	片丸造	圭頭鏃群B	
108	2045	羨道	3.8				7.5	34	茎部欠損	平造	圭頭鏃群BⅠ	
109	2127	羨道	2.6				12	20	茎部欠損	平造	方頭鏃群B	
110	2046	羨道	3				4.8			平造	圭頭鏃群B	
111	2047	羨道	3				8.4	20	茎部欠損	平造	方頭鏃B	
112	2124	羨道					7.7		鏃身			
113	2048	羨道	3.4	5.8			10	20	茎部欠損	両丸造	三角形鏃群CⅠ	
114	2049	羨道	3.2	6			10	25	茎部欠損		三角形鏃群	
115	2050	羨道	4	6			13.4	32	茎部欠損	片丸造	腸抉三角形鏃群Ⅰ	
116	2051	羨道	4.4	6.4			9	22	茎部欠損	平造	腸抉三角形鏃群Ⅰ	
117	2052	羨道							鏃身			腸抉を有する
118	2053	羨道							鏃身			腸抉を有する
119	2054	羨道							鏃身			透かし孔有り
120	2055	羨道										
121	2056	羨道										
122	2057	羨道										
123	2058	羨道	1.2	9			11.8	17	茎部欠損	平造	方頭鏃群AⅡ	木質が残る
124	2116	羨道	1	2	11.2	8.2	21.6	20	完形	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
125	2059	羨道	1	1.4			17.4	10	完形	平造	長頸鏃群BⅣ	
126	2060	羨道	0.8	1.8	9.4	5.4	16.5		完形	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
127	2115	羨道	0.8	2.4			16	10	完形	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
128	2061	羨道	1	1.4			15.3	12	完形	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
129	2062	羨道	1				13.8		茎部欠損	平造	長頸鏃群BⅣ	
130	2063	羨道	0.8	2			12.1	12	茎部欠損	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
131	2064	羨道	1		10.4		13.2	10		平造	長頸鏃群BⅣ	
132	2065	羨道	1.1		10.2		13.2		茎部欠損	両丸造	長頸鏃群BⅣ	木質が残る
133	2066	羨道	0.8	2.4			9.2		頸部以下欠損	平造	長頸鏃群BⅣ	
134	2067	羨道	1	2.2	7.4		13.2		茎部欠損	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
135	2068	羨道	1.1	2.2	9.4		12.6	9	茎部欠損	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
136	2069	羨道	0.8	3			13.2	7	茎部欠損	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
137	2117	羨道	0.8	3			12.8	10	茎部欠損	平造	長頸鏃群BⅣ	
138	2072	羨道	0.8	2.8			12.4		茎部欠損	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
139	2073	羨道	1	3.8			15.9		ほぼ完形	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
140	2070	羨道					9.2		鏃身から頸部の破片			
141	2071	羨道	1	2.2			7.9		鏃身から頸部の破片	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
142	2075	羨道	0.9	3			6.5		鏃身から頸部の破片	平造	長頸鏃群BⅣ	
143	2076	羨道	1.4	3			7.2		鏃身から頸部の破片	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
144	2077	羨道	0.9				5		鏃身から頸部の破片	両丸造	長頸鏃群BⅣ	
145	2081	羨道	1.1				3		鏃身	平造	長頸鏃群	
146	2079	羨道					3.1		鏃身	平造	長頸鏃群	
147	2080	羨道	1.3				3		鏃身	両丸造	長頸鏃群	
148	2115	羨道	0.9				2.5		鏃身	平造	長頸鏃群	
149	2118	羨道	0.8				2.5		鏃身	平造	長頸鏃群	
150	2074	羨道			8.6	5.6	15.7	13	鏃身欠損	平造	長頸鏃群	木質が残る
151	2128	羨道	1	1.4			9.8	8	頸部以下欠損	片丸造	長頸鏃群	
152	2082	羨道	0.9	2	10.1		14.8	10	茎部欠損	片丸造	長頸鏃群	
153	2083	羨道	1	2			11.8	11	茎部欠損	片丸造	長頸鏃群	

154	2084	羨　道	1.2	2.2			6.1		頭部以下欠損	片丸造	長頭鏃群	
155	2085	羨　道	1.1	1			7.1		頭部以下欠損	片丸造	長頭鏃群	
156	2086	羨　道	1	1.4			9.8		頭部以下欠損	片丸造	長頭鏃群	
157	2087	羨　道	1.3	2.4			10.8		茎部欠損	片丸造	長頭鏃群ＡＶ	
158	2089	羨　道	0.8				22.3	23	完形	片刃造	片刃鏃群ＢⅠ	
159	2090	羨　道	1				17.3	18	茎部欠損	片刃造	片刃鏃群ＢⅠ	
160	2091	羨　道	0.8				6.8		頭部以下欠損	片刃造	片刃鏃群	
161	2092	羨　道					8.3		頭部			
162	2093	羨　道					14.8	12	鏃身欠損			
163	2095	羨　道					14	12	鏃身欠損			
164	2094	羨　道					16	15	鏃身欠損			木質が残る
165	2096	羨　道				6	16.4	13	鏃身欠損			
166	2098	羨　道					8.6		頭部			
167	2099	羨　道					9.2		頭部			
168	2097	羨　道					12.7		頭部			
169	2100	羨　道					8.8		頭部			
170	2101	羨　道					6.4		頭部			
171	2103	羨　道					9.8		頭部			
172	2104	羨　道	1.5				7		鏃身			
173	2105	羨　道	1.8				2.2		鏃身			
174	2106	羨　道	1.4				3.4		鏃身から頭部			
3号墳												
222	2143	玄　室	3.4				3.9		鏃身	平造	圭頭鏃群	
223	2186	玄　室	2.8				4.1		鏃身	平造	圭頭鏃群	
224	2144	玄　室	3.4				3.2		鏃身	平造	圭頭鏃群	
225	2145	玄　室	2.2				3		鏃身	平造		
226	2187	玄　室					5.7		鏃身			
227	2189	玄　室					5.1		鏃身	平造		
228	2200	玄　室	1.2	2.2			13.6	22	茎部欠損	両丸造	長頭鏃群ＢⅣ	
229	2146	玄　室	1	2			3.2		鏃身	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
230	2147	玄　室	1.1				3.2		鏃身	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
231	2201	玄　室	1.1	1.7			2.8		鏃身	両丸造	長頭鏃群ＢⅣ	
232	2202	玄　室	1.1	2.4			3.2		鏃身	両丸造	長頭鏃群ＢⅣ	
233	2148	玄　室	1				3.2		鏃身	片丸造	長頭鏃群	
234	2149	玄　室	1				2.4		鏃身	片丸造	長頭鏃群	
235	2150	玄　室	1				1.6		鏃身	片丸造	長頭鏃群	
236	2203	玄　室	1				2.6		鏃身	片丸造	長頭鏃群	
237	2204	玄　室	1	4.2			4.8		鏃身	平造	長頭鏃群	
238	2205	玄　室	1.2 2.2				2.4		鏃身	両丸造	長頭鏃群	
239	2151	玄　室	0.9				4		鏃身	片刃造		
264	2173	羨　道	4	3.2			12.4	22	茎部欠損	平造	三角形鏃群	
265	2174	羨　道	3.2				4		鏃身	平造	圭頭鏃群	
266	2206	羨　道	2.2				3		鏃身			
267	2175	羨　道	2.4				6	9	茎部欠損	平造	方頭鏃群	
268	2176	羨　道	4	7			7.8	25	頭部以下欠損	平造	腸抉三角形鏃群Ⅰ	
269	2177	羨　道		4.8			13.2	25	鏃身部欠損		腸抉三角形鏃群Ⅰ	
270	2178	羨　道	1	2.2	7.4		11.7	13	茎部欠損	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
271	2179	羨　道	0.8	1.8			15.7	11	茎部欠損	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
272	2180	羨　道	1.1	1.8	6.1		13	10	茎部欠損	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
273	2207	羨　道	1.1	1.9			11.7	10	茎部欠損	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
274	2181	羨　道	1.1	2.2			11.8	10	茎部欠損	平造	長頭鏃群ＢⅣ	木質が残る
275	2182	羨　道	0.8	1.2			7.4		頭部以下欠損	両丸造	長頭鏃群ＢⅣ	
276	2183	羨　道	1	2.4			7.4		頭部以下欠損	両丸造	長頭鏃群ＢⅣ	
277	2208	羨　道	1	1.4	12.4	5.4	19.2	18	完形		長頭鏃群ＢⅣ	
278	2184	羨　道	1.2	2.3			3		鏃身		長頭鏃群ＢⅣ	
279	2209	羨　道	1	2			3.6		鏃身	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
280	2185	羨　道	1	2			4.2		鏃身	平造	長頭鏃群ＢⅣ	
281	2210	羨　道	1	3.8	10.8	2.8	13.9	18	完形	両丸造	長頭鏃群ＢⅣ	
282	2211	羨　道	1	4.1			4.9		鏃身	片鎬造	長頭鏃群	
283	2212	羨　道	0.7				11.8	12	茎部欠損	片刃造	片刃鏃群	
284	2213	羨　道	1				11.1	10	茎部欠損	片刃造	片刃鏃群	木質が残る
285	2214	羨　道	0.4				5.1		鏃身	片刃造	片刃鏃群	

表４　出土装身具観察表

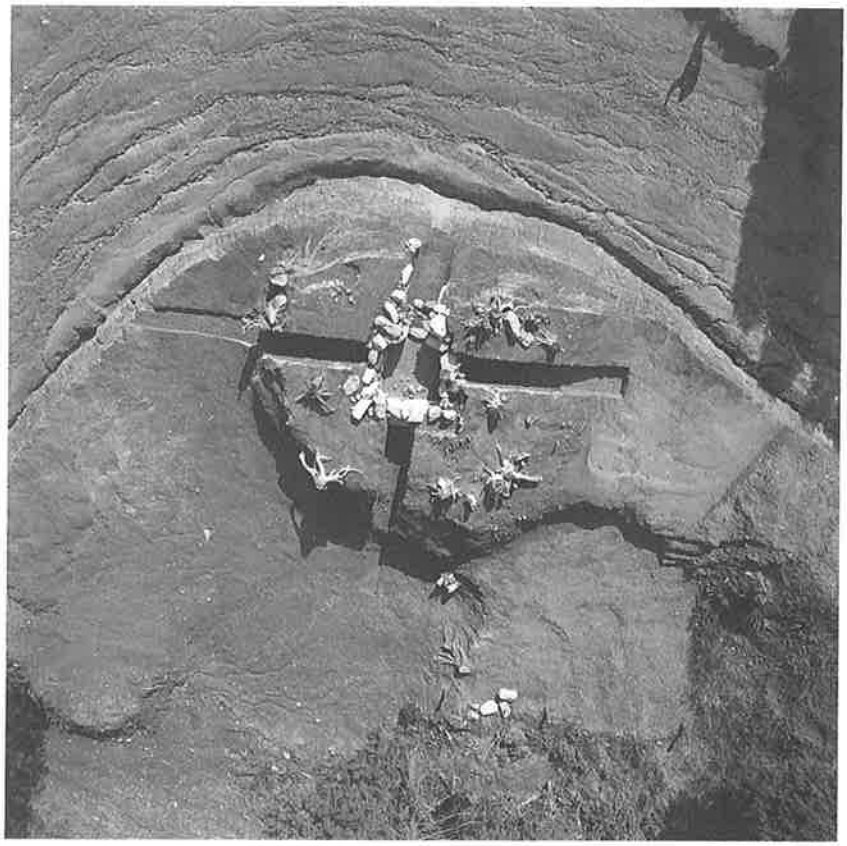
図版番号	登録番号	種別	出土遺構	材質・色調	径(cm)	高(cm)	重量(g)	残存状況
２号墳								
6	3001	耳環	玄室	銅芯金張り	2.6×3.0		18	錆が著しい
7	3002	耳環	玄室	銅芯金張り	2.8×3.2		22	錆が著しい
8	3003	耳環	玄室	銅芯金張り	2.9×3.2		26	錆が著しい
9	3004	管玉	玄室	濃緑色	0.9	2.3	3	完形
17	3005	耳環	前室	銅芯金張り	2.8×3.1		20	錆が著しい
18	3006	耳環	前室	銅芯金張り	2.8×3.0		16	錆が著しい
19	3007	耳環	前室	銅芯金張り	2.0×2.1		4	完形
20	3008	耳環	前室	銅芯	1.9×2.0		6	錆が著しい
21	3009	耳環	前室	銅芯	1.9×1.8		6	錆が著しい
22	3010	管玉	前室	濃緑色	0.9	2.7	4	完形
23	3011	管玉	前室	濃緑色	0.8	2.1	2	完形
24	3012	丸玉	前室	赤橙色	1.2	0.7		完形
25	3013	丸玉	前室	橙色	1.1	1.1		完形
26	3014	丸玉	前室	橙色	1	0.8		完形
27	3015	丸玉	前室	橙色	1	0.8		完形
28	3016	小玉	前室	群青色	0.8	0.6		完形
29	3017	小玉	前室	明青色	0.8	0.6		完形
30	3018	小玉	前室	明青色	0.7	0.3		完形
31	3019	小玉	前室	青色	0.7	0.7		完形
32	3020	小玉	前室	青色	0.4	0.4		完形
33	3021	小玉	前室	明青色	0.6	0.35		完形
34	3022	小玉	前室	明青色	0.4	0.4		完形
35	3023	小玉	前室	青色	0.4	0.35		完形
79	3042	耳環	羨道	銅芯銀張り	2.7×3.0		16	完形
80	3024	勾玉	羨道	茶白色	2.7		4	完形
81	3025	管玉	羨道	濃緑色	2	0.9	3	完形
82	3026	管玉	羨道	濃緑色	2.1	0.8	2	完形
177	3027	耳環	閉塞石内	銅芯金張り	2.8×2.9		22	完形
178	3028	耳環	閉塞石内	銅芯金張り	2.4×2.6		8	錆が著しい
179	3029	管玉	閉塞石内	白緑色	2.2	0.8	2	完形
180	3030	管玉	閉塞石内	濃緑色	2.6	1.1	6	完形
181	3031	丸玉	閉塞石内	白色	1	0.8		完形
３号墳								
196	3032	小玉	玄室	濃青色	0.8	0.6		完形
197	3033	小玉	玄室	濃青色	0.9	0.5		完形
198	3034	小玉	玄室	無色	0.7	0.5		完形
199	3035	小玉	玄室	青色	0.6	0.3		完形
200	3036	小玉	玄室	濃青色	0.4	0.2		完形
201	3037	小玉	玄室	濃青色	0.4	0.2		完形
202	3038	小玉	玄室	濃青色	0.3	0.4		完形
203	3039	小玉	玄室	青色	0.5	0.2		完形
287	3041	耳環	閉塞石内	銅芯	2.2×2.6		8	錆が著しい
288	3040	切子玉	表土中	無色	1.3	1.6	4	完形

图　　版

１号墳　トレンチ土層

１号墳全景（南から）

１号墳　トレンチ土層



１号墳全景

図版 2

1 号墳全景（東から）

1 号墳（南から）

1 号墳羨道部（東から）

1 号墳玄室（東から）

1 号墳玄室から閉塞石の状況

1 号墳玄室から羨道部をのぞむ

1 号墳玄室遺物出土状況（南から）

1 号墳羨道部（南東から）

2 号墳閉塞石の状況（北から）

2 号墳閉塞石除去後

1 号土坑（東から）

2 号墳全景（南から）

2 号墳全景

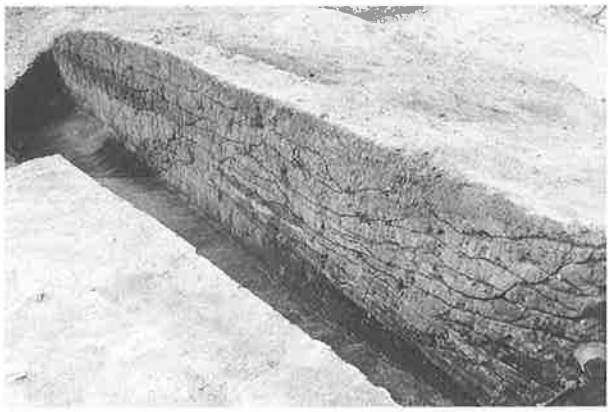
図版 4

2 号墳樹木撤去後（南から）

2 号墳（北西から）

2 号墳（南から）

2 号墳周溝（東から）



2 号墳Ｂトレンチ土層

2 号墳石積

2 号墳玄室石積状況

2 号墳玄室石積状況

2 号墳玄室石積状況

2 号墳玄室石積状況

2 号墳袖石

2 号墳玄室から外を見る

2 号墳前室の石積

2 号墳羨道部遺物出土状況

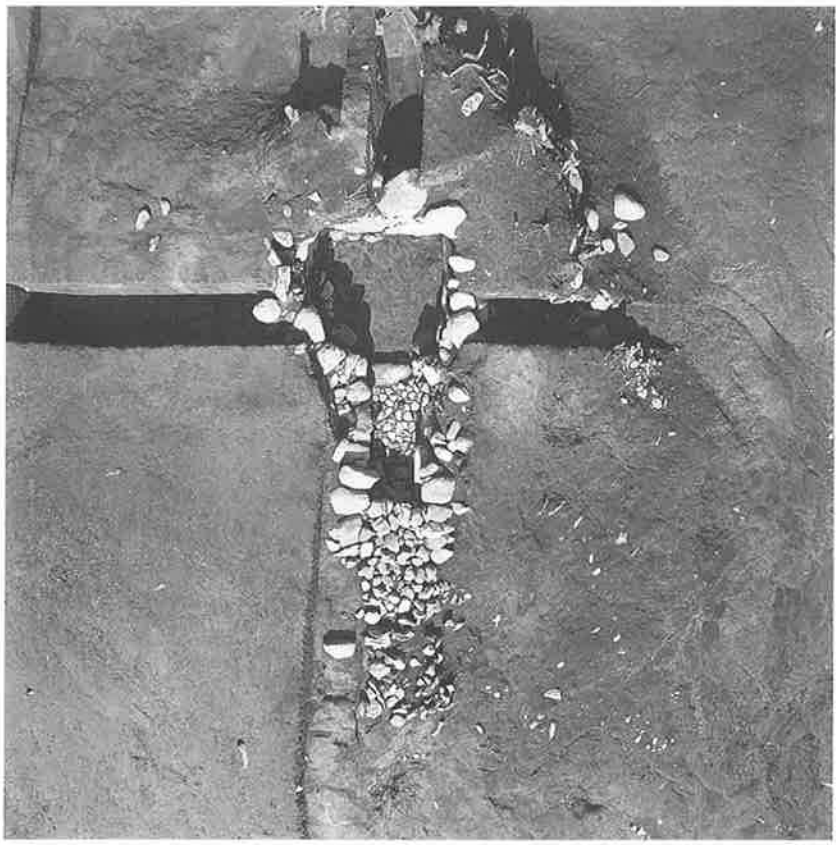
2 号墳羨道部遺物出土状況

2 号墳前庭部石積

図版 6

3 号墳全景（南から）

3 号墳玄室から羨道部方向



3 号墳全景

3 号墳（北から）

3 号墳（南から）

3 号墳玄室（東から）

3 号墳玄室（東から）

3 号墳羨道部遺物出土状況

3 号墳羨道部敷石（2 次）（東から）

3 号墳閉塞石内遺物出土状況（西から）

3 号墳羨道部敷石（下面）（西から）

図版 8

12

13

14

16

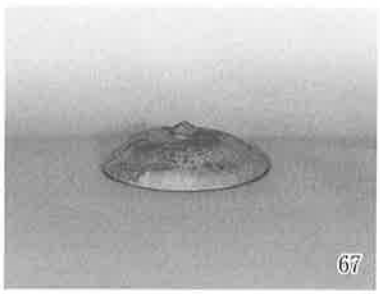
62

63

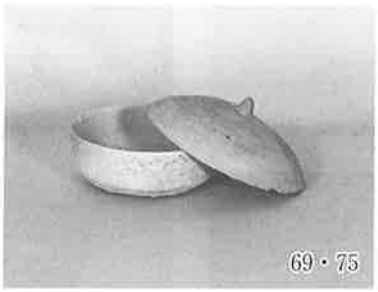
64

65

66・73


67

68・74


69・75

71

72

76

77

78

188

192

242

289

291

292

293

294

295

298

299

300

図版10

304

306

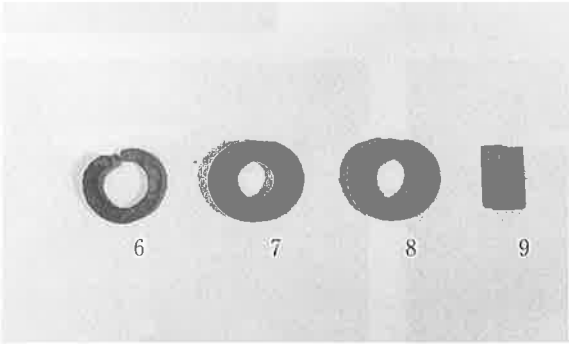
321

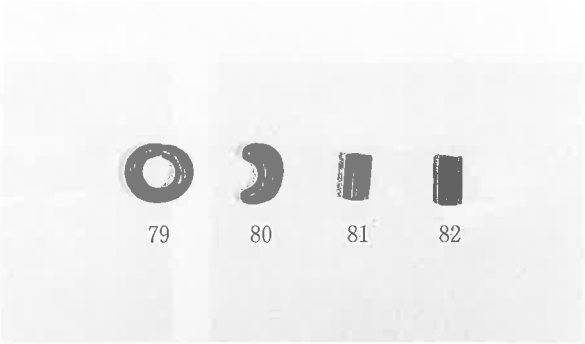
307

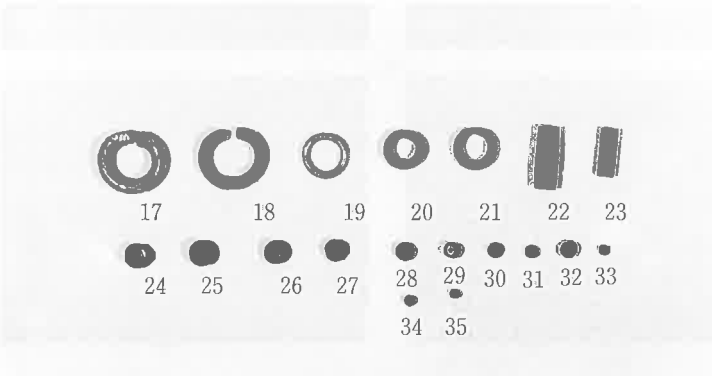
308

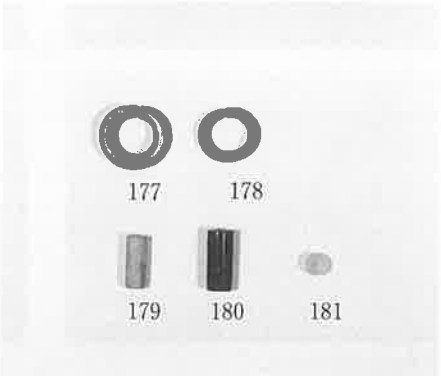
323

324


6
7
8
9


79
80
81
82


17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35


177
178
179
180
181

報告書抄録

ふりがな	にしたにろっかくいせき
書　名	西谷六角遺跡
副書名	
巻　次	
シリーズ名	小城町文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	古庄秀樹
編集機関	佐賀県小城町教育委員会
所在地	〒845-0001　佐賀県小城郡小城町253-21　☎0952-73-3215
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西谷六角遺跡（にしたにろっかくいせき）	佐賀県小城郡（さがけんおぎぐん） 小城町大字岩蔵（おぎまちおおあざいわくら） 字西谷五角（あざにしたにごかく）	413615	1002	33° 8′ 28″	130° 11′ 31″	19970722 ～19971226	3,000m²	土砂採取

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西谷六角遺跡	群集墳	古墳	横穴式石室３基	須恵器 土師器 金属製品 鉄製武器、工具、 馬具、装身具	

西谷六角遺跡

小城町文化財調査報告書第11集

平成11年３月31日

発　行　　小城町教育委員会

印　刷　　大同印刷㈱